

Aba ake

2025

朝明13 総合文芸誌

通刊 58 号



栃木県文芸家協会

レーガン大統領から届いた礼状(1983年)

THE WHITE HOUSE
WASHINGTON

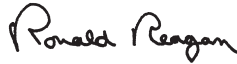
December 16, 1983

Dear Mr. Tomihari:

You were good to think of us during our all too brief visit to Japan and we want you to know how pleased we are by your kindness. Thank you for remembering us with your signed woodblock print which we received through Ambassador Mansfield. We deeply appreciate the friendship and goodwill that prompted this beautifully framed work.

Nancy joins me in sending you our best wishes.

Sincerely,



Mr. Hiroshi Tomihari
2328-5 Sugito-machi
Kitakatsushika-gun
Saitama Prefecture
Japan

拝啓 まったく短い期間でしたが、私たちが日本を訪問した際には、私たちの事をお考えいただき、ご親切ありがとうございました。あなたのご親切により、私たちがどんなに喜んでいるか、このうれしい気持ちをあなたに知っていただきたいと思います。

マンسفールド大使を通じていただきましたが、あなたの署名入りの木版画を私たちにお贈りくださりまして大へんありがとうございました。この美しく構成された木版画をお贈りくださったご友情とご好意に対し、深く感謝いたしております。

ナンシーもあなた様によろしくと申しております。

敬 具

1983年12月16日

ロナルド・レーガン

富 張 様

作者 富張広司



1936年茨城県生まれ。57年茨城大学教育学部美術科修了。59年より独学で木版画を始める。68年毎日現代日本美術展（71年も）。69年「現代美術の動向展」（京都国立近代美術館）。74年モダンアート協会展・新人賞（75年奨励賞）。78～79年文化庁芸術家在外研修員としてニューヨーク滞在。83年ハワイ・ホノルル美術館で個展。90年中国遼寧省博物館で個展。94年中国浙江省の中国美術学院に木版プレス機を寄贈。同校に「富張木版画美術館賞」創設。2000年トルコ日本現代世界展で日本トルコ国際芸術振興賞。

朝明

第一三号

栃木県文芸家協会

目次

特別寄稿 栃木県文芸家協会五〇周年に寄せて

森 羅一

創作

〔小説〕

マドンナ

石寄 敬子 4

初雁

鈴木 あぐり 31

甲六の働き(二)

(竹と石と・・)

嶋 均三 7

明日から研究すること

石塚 蓉子 34

天からの贈物

高杉 治憲 10

海女の筆筒

福富 陽子 37

末裔地主 4

紙屋 里子 13

天満月の肴

阿久 純 40

赤電話と郵便ポスト

相馬 龍久 16

窓際の椅子

島田 トミ子 43

蓮城院の風は、哀しみの色

安西 悠子 19

三人の女

永井 想 46

和氣先生の現代文

丕内 七武 22

遊行柳

寺崎 暁生 49

マンボウと夜明け

鈴木 みずほ 26

手紙

旭 英幸 53

まほうびんのれきし

くぼかわ けんいち 28

詩

花手水

見ていてください

墓参り

百日紅

青春の残像

閉じ込められた風景

岩本 久美子 56

村上 周司 58

松本 ミチ子 60

吹木 文音 62

螺良 君枝 64

こやま きお 66

夢

夢想

サイの化身

草原のサハスラブジャ

文芸部異聞

戸井 みちお 68

森 秀夫 70

貝塚 津音魚 72

高田 太郎 74

短歌

小石

ふるさと

洞窟酒蔵(昭和の遺構)

唐澤 るみ子 76

神野 規子 77

高橋 淑乃 78

葵祭・花ありて

櫻 杜・風にならばや

命の連鎖・楡の巨木

田村 世津子 80

増田 律子 82

福澤 悦子 84

俳句

雲母坂

石井 光 86

稲の秋

渡邊 公之 87

川柳

マイペース
元気は正義
下り坂

水上 義明 88
三上 博史 90
あおい 七海 92

思案
夕焼け小焼け

柳岡 睦子 93
松本 とまと 94

評論

未収録詩篇と筆名について 森

羅一 95

中世ミンネザングについて 名村 忠 98

随筆

名もなきナス料理
なあんだ！
随筆丸
花粉の気紛れ
財布がない

松林 厚子 101
古谷 耀子 103
柴崎 幸子 105
小林 博 107
関根 喜久枝 109

玉碎地に届いた祖母の祈り
どうしようもない変化
萎れた花びら
糸井哲夫さんとの
益子での出会い
館野 ひろ子 111
国井 和子 113
国母 仁 115
藤田 香月 118

特集 「かけがえのない言葉」

パレイドリア	福富 陽子 122	人生の和は総じて一 いっ	高橋 淑乃 136
短い言葉	安西 悠子 123	祖父のくれた言葉	鈴木 みずほ 137
お帰りなさい	高杉 治憲 124	自分の言葉に救われる	松林 厚子 138
もっとダメ	吉田 稔 125	センセイとハサミ	くぼかわ けんいち 139
キャンバスの片隅は	島田 トミ子 126	想う	相馬 龍久 140
有難くもない有り難う	三上 博史 127	私は私	小林 千枝子 141
エツコハドコ	福澤 悦子 128	紫式部からのメッセージ	吹木 文音 142
ゴメンナサイ	国母 仁 129	八〇年間、胸にある悔い	舘野 ひろ子 143
君ひとの子の師であれば	こやま きお 130	故郷（ふるさと）があるからこそ 頑張りました	藤田 香月 144
敗北と死に至る道が	石寄 敬子 131	おてんとうさまが 見でっから	渡邊 公之 145
生活ならば	不内 七武 132	愛は王冠より、 もっと求める価値がある	名村 忠 146
ほんとうに	旭 英幸 133	エー それって「結」 ゆい	貝塚 津音魚 147
まずは医局で		食えればいい	戸井 みちお 148
ラーメンを食おう			
価値観を			
押し付けないように	関根 喜久枝 135		

令和5年度栃木県文芸家協会事業報告 事務局長 吉田 稔 150

栃木県文芸家協会規約 152

栃木県文芸家協会会員名簿・役員名簿・『朝明』編集委員 154

編集後記 156

特別寄稿

栃木県文芸家協会五〇周年に寄せて

栃木県文芸家協会五〇周年に寄せて

森 羅一

詩の同人誌を始めた頃、宇都宮で『時代』と言う文学雑誌が出版されたことを新聞で知った。10数年後、この雑誌と関わりうとは思ひもなかった。私が栃木県文芸家協会に参加したのは21号からである。従って、創刊号から20号までの内情はよくわからない。

21号から45号までの記憶は協会を運営する先輩に引っ張られて鳥合の衆の一人として事業の渦中に過したのが正直な話である。先輩たちの行動力と企画力、それを貫徹してしまうエネルギーには圧倒され、只々傍観しているに過ぎなかったことが思いだされます。

協会の主たる活動は協会誌の発行である。協会は1973年栃木県の各分野（評論、小説、エッセイ、詩、俳句、等）で構成し、協会誌『時代』を、メンバー28名で創刊した。索引整理の時、初めて見た創刊号の装丁にいたく感銘したのを覚えている。

2013年に協会誌『時代』を発展的に改称し、高田太郎氏の命名で「清新な未来を拓く」をキャッチフレーズに『朝明』として、各分野（評論、創作、エッセイ、随筆、川柳、詩、短歌、俳句）で構成し、新たに出発し、すでに10年を過ぎ、会員、運営委員も新たな顔ぶれで進展しています。

『朝明』創刊号の時まとめた索引調査の過程で収集したバックナンバーから、目についた項目をみると、各分野の特集、県内文学状況、画家とのコラボレーション、会員外からの寄稿等がある。

注目したのは3号（1974年）、10号（1978年）、19号（1985年）、28号（1995年）である。3号の編集後記に「栃木県に文学館をつくらう」がある。90年代に再びこの声が役員会で話題になったがこの構想は未遂に終わった。この構想の実現が果たされると先輩たちがさぞ喜ぶだろうなと思う。

10号に役員名簿が載るが以降、記載がない。19号に会員名簿が載る。21号に編集、下野文学大賞、文化協会の各委員が載る。28号に会員名簿、役員名簿、規約が載り以降このスタイルは23号を省いて存続される。従って、文芸家協会の運営は創刊から28号まで規約、会員、役員は明瞭でなかったことが分かる。

この他、全45冊を閲覧して創刊号、2号、9号、14号、15号が挙げられる。14号「栃木県文士往来」は唯一単行本の体裁である。9号、15号「短歌年刊」は県内短歌の総集編と言ってよい労作である。この他にも子細に読めば貴重な号がある

うと思える。

事業としては『下野文学大賞』下野新聞社との共催（1988～2003）、『栃木県文学大賞』文芸家協会主催（2005～2008）、『平成栃木の文学』の刊行（2014）があり、協賛として『栃木の文学史』（1986）、『栃木県近代文学全集』（1990）、『栃木県近代文学アルバム』（2000）がある。

この他、会員は栃木県文化協会や各種の団体に関わり、芸術祭や地域の文化振興に寄与したことがあげられる。

会長は（時代）岡崎清一郎氏、三田忠夫氏、高内壮介氏、渋谷行雄氏、落合雄三氏、荒井宗明氏、野澤俊雄氏、（朝明）高田太郎氏、松本富生氏、小林守城氏、福田三男氏が任じている。

事務局は（時代）落合雄三氏、野澤俊雄氏、小島延介氏、（朝明）宇賀神忍氏、高杉治憲氏、三上博史氏、今年度から吉田稔氏である。

特筆することは2008年から「とちぶん会報」（年3回程度）の発行、2020年からはホームページを設け会報とネットでの会の動向を知ることが出来るようになったことである。

以上、私が知りうる文芸家協会50年の概略である。

※『朝明』創刊号の編集後記に誤記を発見。（誤）平成を迎え早二十年、（正）今年で四十年。訂正してお詫びします。



『時代』45号2012年
高橋昭行氏の表紙写真



『時代』創刊号1973年
玉置正敏氏の表紙原画



『朝明』創刊号2013年
福田厚子氏の表紙原画



『短歌年鑑』1982年
清水比庵氏の表紙原画

マドンナ

石寄 敬子

小野田里香は洗面台で、鏡に映った自分の顔を半ば諦め気味に覗き込んだ。昨日より美しくなることは、この先何が起きようと有り得ない。それならせめて今まで関わった人々に若い頃の印象を持たれたまま人生を終えたい。そう思っただけは月に三度の用事を除いては、専ら庭の手入れと読書に勤しんでいる。

夫は高校の教師だったが、定年退職して好きなことをする間もなく他界した。里香は中学校の音楽の教員だった。五歳からバイオリンを習い始め、演奏者を志した。思い返せば音大に入学するまでが希望に満ちた良き時代だったと言える。いざ音大に入学すると、演奏者として活躍できるのは神に選ばれた人間だけだと思い知らされる。仕方なく教師になった。バイオリン教室など田舎で生徒が集まるとは思えないし、ここまで多額の支援をしてくれた両親の手前、音楽に関係ない仕事には就けなかった。

毎月第二月曜日は車で三十分ほどの住宅地で開催される料理教室に通っている。一人暮らしになってからほとんど食事の用意が面倒になってきた。コンビニの弁当で済ますことも増え、これではまずいと思い通い始めた。六十代の品のいい女性が主宰で、生徒が五、六人とこぢまりした教室で、里香はこの時間を大切にしていた。

「おはようございます」

ベルも鳴らさず玄関を開け、すたすたとリビングに入っていた。料理教室の連中はわざわざベルは鳴らさない。初めての参加者だろうか、リビングで主宰の遠藤多紀と話し込んでいる女性がいた。

「小野田さん、おはようございます。新しい方紹介するわ」

「駒田です。よろしくお願いします。あの、小野田先生ですか。小松二中で音楽教えてた」

「ええ、教えていましたけど。旧姓はなんて」

「新藤です。新藤明子です。合唱部でお世話になりました」

「ごめんなさい。覚えていなくて」

多紀はおかしそうに二人をながめて、

「まあ、偶然ね。先生は顔が広いから、こういうこともあるわよねえ」

「同級生に誰か目立っていた子いたかしら」

里香は駒田に聞いてみる。小松二中には八年勤務したが、目の前の駒田のことは全く記憶になかった。

「あたし、目立たなかったんで、知らないと思います。えーと佐川龍介君覚えてますか。背の高かった」

「佐川君。初めて担任した生徒だから覚えてるわ」

「あたしもその学年です。先生はちょっと近づきたい雰囲気

気で男子からすごい人気で。佐川君、いつも小野田先生に引付いてたでしょう。あたし佐川君好きだったから、先生が羨ましくて、先生のこといつも覗んでたんですよ」

駒田は高い声でけらけら笑いながら話を続ける。

「もう四十年前以上前の話ですよ。でも先生、全然変わらないです。相変わらず綺麗ですね」

「おばあさんに何言ってるの」

里香は家を出てくるときの鏡に映った自分を思い出した。とても真に受けるわけにはいかない。ここで駒田と顔を合わせなくなかった。里香は顔に出ないように作り笑いをした。

毎月第三木曜日はバイオリンのレッスン。大型店舗の中にある音楽教室。音大を卒業したばかりの女性講師の個人レッスンを受ける。レッスンを受けるというより、そのスペースを借りているといったほうが正しい。戦友ともいふべき自分のバイオリンと心を通わせる。学生時代は演奏を楽しむ余裕などなかった。そう、今だから誰にも邪魔されたくない里香の至福の時間になっている。

そして不定期ではあるが、月に一度必ず食事の誘いがあった。

料理教室で駒田明子に会った一週間後、里香はアジアン創作料理の店で佐川龍介と待ち合わせしていた。佐川とは中学卒業後も年賀状のやりとりが続いていた。夫が亡くなり、しばらくしてから、

「先生、寂しくないですか」

と、佐川が連絡をよこした。

「間に合っている」

里香は答えたが、佐川は笑いながら、里香を強引に食事に

誘った。それ以来呆れるほどまめに連絡をよこす。

先に店に着いたのは里香だった。店内は照明を抑えた、隣のテーブルと間隔を確保している里香好みの空間だった。

「五分遅刻しました。ハイ、先生」

佐川龍介は小さな花束を差し出した。

「明日誕生日でしょう。仰々しいのはお好みじゃないと思つて」

「覚えていたんだ。ありがと」里香は素直に可愛らしい花束を受け取った。

「どういたしまして。こうやって二人で会えるんだから長い間待った甲斐がありましたよ」

「照れもせずよく言うわね、タツ」

「タツって呼ばれるのも嬉しい。俺のことタツって呼ぶの先生だけだし」

「どんなに出世して後頭部が寂しくなっても、タツはタツよ」

「残念、昔から先生に追いつきたくて頑張ってきたのに」

スタツフがビールを運んできた。

「じゃあ、いつまでも綺麗な先生に乾杯」

軽くグラスを合わせる。綺麗という言葉が妙に引っかかる。佐川に言われても気にならないが、数日前駒田に言われたそれはサンドペーパーの上を滑ってきたようなざらつきがあった。

「新藤明子って覚えてる？」

「新藤……ああ覚えてますよ。小学校の同級生」

「料理教室で会ったの。タツのこと好きだったって言ってた」

「知ってましたよ。告げられたから」

埃を被った記憶を引き出すように佐川は顎に手をやる。

「気のいいやつでしたけど、ほら先生、島田涼子って覚えてます？成績よくって、生徒会の副会長もしてたなあ」

「涼子ちゃんは覚えてる。よく挨拶してくれた」

「島田は先生には受けが良かったけど、陰では悪さしてるって噂があつて、新藤は島田とよくつるんでましたよ」

「そうなの？わからないものね」

「成績がいいと先生たち騙されちゃうでしょ。特に里香先生は生徒にあまり関心なかったしね」

俺は知っているぞとばかり佐川は里香に視線を向ける。佐川の言う通り、里香は生徒のために頑張る教師ではなかった。定年退職したときに改めて自分は子供が苦手なのだと思ったくらいだ。

「そうだな。教師やっていてかわいいと思ったのはタツだけかも」

「えっ、それって告白されてるんですか。今」

嬉しそうに佐川は椅子から腰を浮かした。

「相変わらず馬鹿だなタツは」里香は一拍おくと、「タツと会うのもあと二年。せいぜい美味しいもの食べさせてもらおう」

「またですか。先生の七十五歳寿命説。先生の願いはかなわないと思いますよ」

「それはあと二年経てばわかること。さあ、食べよう、初めてのアジア料理。美味しそうだ」

翌月の料理教室、駒田明子はすっかりメンバーと打ち解けて、自分が年少だからと雑用を買って出していた。主宰の遠藤多紀も駒田を気に入ったようだ。

先月佐川に会った後、段ボールから小松二中の卒業アルバムを取り出した。卒業生を担任した年は教師にも渡されるが、実際アルバムを開いたのは初めてだった。佐川も駒田もまだ幼さが残っている。そして三代になったばかりの磁器のような冷たさを帯びた里香がいた。音楽家としてのプライドと挫折。付け入る隙を与えない、里香を覆ったボールは、男子生徒にはクールに映ったろう。しかし敏感な女子生徒には受け入れられるものではなかった。

小松二中に在職の間、嫌がらせをよく受けていた。音楽準備室の床に水が撒かれていたり、職員用の下駄箱に鳥の死骸が入っていたこともあった。下駄箱に鳩の死骸を見つけたときはさすがに小さく悲鳴をあげてしまった。笑いながら走り去る女子生徒らの声でした。

駒田明子が玉ねぎを刻んで涙が止まらないのを見て、皆で笑っている。さらに玉ねぎが床に転がって笑い声が大きくなった。駒田明子も笑っている。高くけらけら響く声で。

この笑い。里香が背中から聞いた、走り去っていったあのときの笑い声だった。里香は皆と一緒に笑った。あと二年この楽しい空間を壊してはいけない。作り笑いは得意である。

甲六の働き (二) (竹と石と・・)

嶋 均三

あれから十年、柴元甲六はここ清満城内にて重要な地位を得た。日頃から寸分の隙もなく眼を懲らし、油断無く城を守る姿に殿の信頼は厚い。他の武將にも一目おかれた。

甲六は殿に進言し、先ず間者を今まで以上に増やした。さらに長柄槍隊を充実させた。

特筆すべきは「飛礮隊」の創設であった。甲六は常々「鉄砲」という武器に魅力を感じていたが、何分この清満城にはそれを備えるだけの資金力はない。

そこで飛礮を考えた。そもそも飛び道具とは接近戦に到る前に敵を射抜く武器である。それは経験豊かな武將、高名且つ勇猛な馬上兵をも、名も無き足軽が撃ち倒すという、当世驚くべき武器であった。距離を支配し、遠距離から接近戦に到る前に効果を顯す。

だが清満城にはそれを求めるだけの銭がない。そこで甲六は飛礮に眼をつけ、投擲に向く屈強な若者を募集しその一隊を育てることに腐心した。

腕力があり長身の若者が集められた。腕周りの太さは尺を超すほどあり掌は大きい。何より足腰の強さは抜群であり、安定感があった。足を踏ん張って全身で投げるこぶし大の石は命中率が高く破壊力があった。

ある日城主・藤堂が城内に打った杭の先に渋柿を置いた。「あの柿を落とせるか？」

「はっ！」

藤堂の命に腰を折って応じたのは「八郎」という若者。奥山で山林の伐採を生業としていたが甲六に見いだされ、今では「飛礮隊」の中樞を担うまでに成長した。

八郎は立ち上がって腰に下げた石袋から一つ掴み、身体を右に振ったかと思うと振りかぶり、一気に投げた。すかさず前屈みから身体を起こし次の動作に移りつつ前方を睨んだ。投げられた石は微かな音と共に宙を飛び、庭に立てられた柱の上に置かれた青い蜂屋柿を撃ち砕き、粉々に散らせた。間をおかず、直ちに次の石が空を切って飛び、今度は柱の頂上部をえぐるようにして木片が飛び震動させた。この行動、一部始終は見るものすべてに衝撃を与えた。

「見事じゃ！」

殿の覚え目出度き八郎。控える甲六は胸中安堵した。

それからというものの、城内には数カ所、石袋と石籠が備え付けられこぶし大の石が詰まっていた。いざという時にはこの籠を背負って、八郎を筆頭に十一名の若者（投擲手）が出陣するのだ。この若者は「飛礮隊」とよばれた。

さあ、そんな折り、十年前のいくさで落城させた「五料城」の残党が、あろうことか大豪族「相駕常興」に拠って策謀を巡らせたのだ。相駕家の懐に入り清満城の悪しき噂、雑言を吹き込み兵を挙げてここ清満領を奪う目論見である。

かくして二十日ほど後、急ぎ間者が甲六の許に戻った。

「申し上げます。相駕家の兵四百と五科の残党およそ五十程が出陣の様子！」

「ふむ、山並み街道を通るか？」

「御意！山並み街道を経て早ければ五日後にここ清満に到ります」

「残党とともに拳兵となれば刻を要する、若干遅れるな」

「しかし、六日とはかかりませぬ」

「あいわかった。直ちに戻り、敵の動きを具に知らせよ」

「はっ！」

甲六はこの動きを殿（藤堂）に知らせ、老臣たちを集めた。

「相駕家は兵力、経済力ともにここ清満城とは違う。雲泥の差がある」

「はっ、真正面から戦っては勝ち目はござりませぬ」

「何より敵は『鉄砲』という武器を備えております」

「その数は如何ほどか？」

「細作の調べによりますれば七丁ほど」

「ふむ・鉄砲の欠点は何か？」

「はっ、先ずは雨にござりまする」

「次は？」

「闇にござりまする」

「ふむ、暗闇では照準が定まらぬのう・次は？」

「はっ、刻にござりまする」

「む・」

「弾込めに刻を要しまする」

「あいわかった。続けて訊くが敵の先鋒は如何ほどの武者か？」

「今夕までには判明いたしまする」

「いずれにせよ先鋒となれば勇猛であろう」

ここで老臣「多田宗平」が徐に腰を折って城主・藤堂の話を受けた。

「先ず、先陣とは敵を突破する役、剛の者が迫るでありましよう。当方、策もなく戦うは愚にござりまする」

「ふむ、甲六の考えはどうじゃ？」

「相手が大军なれば一般論として籠城・」

「籠城とはやがて士気が下がりが兵糧も乏しくなる。これは外に味方があつてこそ成り立つ策じゃ」

「御意！先ずは籠城と見せ掛け、敵を油断させ途中で引き入れる策にござりまする」

「引き入れるとな・」

この清満城は高台に築かれ東側は横田川に接している自然要害の地。先々代の時期にこの斜面に崩れを防ぐために細竹、あるいは篠を植えた。年数の経過とともにこれが広がり根を張って周囲の地盤は固まった。

だが、敵に包囲されれば城内からの見通しが悪くこの竹藪、篠藪が欠点となる。

重臣が集められたこの場は軍議となつて二刻を経た。

かくして相駕勢が動いた。四百を超す軍勢が清満城に迫り、ここを囲む畑や原野は瞬く間に敵の旗差しもので埋まった。

雲見役が召し出され慎重に氣象を占った。その日の辰の刻、今度は敵陣から使者が立った。

「戦わずに城を明け渡せば全兵の命は助ける」というもの。藤堂は悩む仕草で腕を組んだ。使者を数刻に亘り待たせ、見

せ掛けの厚遇をした。こうして時を稼いでいる間に甲六が城内で必死に動き、徒兵^{かち}を指図して万全の態勢を敷いた。

その後、夕刻になって藤堂は敵の使者に向かつてこの申し入れを断つた。清満城を包囲する敵将「相駕常興^{あいがつねおき}」からの申し出を敢然と蹴つたのだ。

夜になってこれを受けた相駕常興、激怒して床几を蹴つた。すぐさま配下の者に厳命した。

「明朝、城攻めを決行する！」

かくして夜明けと共にその日は小雨が降り続いた。敵が動く前に、甲六は数名の家士を引き連れて突然、城門を開き打つて出た。群がるように敵が迫ると直ちに退いて門を閉じた。所謂「挑発^{いっはゆる}」である。

これを繰り返すと相駕勢、雨の中を全軍に出撃命令が出され、城を包囲した敵が東の城壁に向かつて登りだした。

いや、正確には登れない！登れないのだ。

土手にしがみつきの斜面を上がろうとした徒兵^{かち}が立ち止まった。前面見渡す限りの斜面の細竹と篠が一夜にして刈り取られ、鋭い武器となつて相駕勢を苦しめた。鎌で刈られた竹は草鞋の兵にとって突然、武器に変わってしまった。

かろうじて騎馬兵は登り始めたが、斜面の上から土砂、丸太、大石が転がり落ちた。馬の嘶きしきり。

さらに城壁に近い斜面には六尺ほどに伐られた「青竹」がぎつしりと敷き詰められ、そこに木の葉がかけられていた。

喩え、みごとな手綱捌きで武者がそこまで上り詰めたとしても、この敷き詰められた青竹に馬が、馬の蹄^{ひづめ}が滑った。騎馬もろともに滑落していった。

こうして相駕軍、もはや攻めの一隊を成さず、城壁に辿り

着く者はいなかった。騎馬と雖も完全に骨抜きとなった。

一方、甲六は愛馬にて配下の将十騎を率いて大手を開き、今度は東の斜面に溜まつた敵兵の側面に討ち入った。混乱の敵脇腹に突つ込み槍を振るい頃合いを見てすかさず退いた。

この退きに乗じて敵が追いつがると、大手城門にある「飛礮隊^{ひがてい}」が万端整えて姿を現した。腰に石袋、その裏には多くのこぶし大の石を詰めた「石籠」を背負う剛力数人が控えている。誘いに乗った敵兵を睨み、

「まだだ、距離を確保せよ！」

やがて満を持した一隊、八郎が大音声で命じた。

「放てえ！」

鋭い声とともに飛礮^{つぱて}が唸るように飛んだ。命中率が高く相駕の兵がバタバタと倒れた。顔面に当たれば即死、手足に当たれば直ちに戦闘能力を失う。ほどよい距離を得て一段高い場所からの「飛礮」は抜群の効果を現した。城壁斜面で減らした敵の騎馬兵を、さらにここでも無力化させた。

こうなると敵の指揮命令は混乱、極端に士気が落ちてゆく。もはや壊乱状態、統率が取れず右往左往。

ここで城兵、大手と捌め手から全軍が撃つて出た。勝負のとき！満を持しての行動！極めて士気が高い。大手馬出から本隊を率いて城主・藤堂が躍り出て前面の敵を瞬く間に蹴散らした。捌め手を預かるは、あの忠臣「多田宗平^{ただそうへい}」さすがは古武士であった。寡兵ながら見事に指揮して城外に撃つて出て周囲の敵、数多^{あまた}を討ち取った。

こうして寡兵ながらも清満城、みごとに守り通した。

天からの贈物

高杉 治憲

人生は四苦八苦、山あり谷ありの繰り返しといわれている。まして昨今、地球温暖化の異常気象やコロナ禍、更に戦争紛争の拡大など世界中に避けられない苦難が溢れている。一方で、やまない雨はないし明けない夜もないという自然の理に加えて天から救いの手が降りてくることもある。かくいう私自身、七十九年の人生で幾度かのどん底や間一髪の危機を経験してきた一人である。そして、幸いにも、その度にそれを乗り越えるチャンスが廻ってきて生きる希望と糧に恵まれ、新たな一歩を踏み出すことができてきている。幼い頃から病弱で何度も入院をした上に、十一歳の冬休みに突然、急性骨髄炎の激痛に襲われ新進気鋭の整形外科医に左足切断の危機と診断された。この時は母の気丈な決断と機転によって父の主治医だった旧陸軍軍医として南方戦線で同様の伝染性患者を多数治療してきた伊達先生を自宅に呼び、一刻を争う中、自宅で緊急手術をして助けて頂いた。しかも、この稀有な経験をしてお蔭で、その後、中学、高校では野球部から体育会応援団、大学では馬術部員として身心を鍛えることができた。この実体験により、社会人になってからこれまでの五十六年の間、入院することもなく健康な人生を送ることができた。その上、事業家になってからも時として大きな挑戦をする機会へと繋がった。中でも三十一歳の時に社長として

再起不能といわれた大倒産から再建を信じてひた向きに努力していると霧が晴れるように八年間で完済し、地域に大きく貢献する企業に生まれ変わることができた。また、その後、五十一歳で義父から懇請されて継承した会社は、時代の大きな変化に対応できず平成二十三年に一〇〇億円を超える債務超過で民事再生申立てに追い込まれた。更に、その直後に勃発した東日本大震災で罹災し二度目の大ピンチを迎えることになった。この時にも、正に天の導きと思えるような出来事が重なった上に、多くの人々の支援を頂き、嘗ての再生経験が活かされて乗り越えられたのである。

こうして、二度目の会社再生をも成し遂げた平成二十八年五月下旬のある日、私が経営する南平台温泉ホテルに通常ではありえない一本の電話が掛かってきた。相手は、栃木県管理部の手塚と名乗り社長の私と大事な話があるという。

「内々のお願いで電話しました。実は宮内庁からのご指示で、来月、御料牧場に滞在される天皇皇后両陛下が来る六月二十一日に那珂川町の星農園と同社のハム工場を視察した後、貴社南平台温泉ホテルにてご昼食とご休憩をお願いしたい件で急ぎ御受け頂けるかご返事を頂きたいのです」

余りに唐突な話で一瞬様々な事が頭を過ぎった。が、これより十六年前、地元の馬頭高校の水産科でナマズの研究講演

をされるために来町された秋篠宮様と妃殿下をお迎えして御昼食とご休憩を承り先導役を勤めたことを想い出していた。

「たいへん名誉で光栄なことであり、以前にも秋篠宮様両殿下をお迎えした経験がありますので、謹んでお受けいたします」と、冷静に対応した。

「早速、御了承頂きありがとうございます。県庁内部の上層部から、那珂川町の両陛下御視察の際には南平台温泉ホテルにお願いするようにと申し付かっていましたので安心しました」と、担当者がこの慶事の重要さに緊張していることが伝わってきた。それから僅か三週間で完璧な準備をする責任を強く感じた私は、直ちに総支配人を始めマネージャー、料理長、おもてなし課長を集めて相談を開始した。いずれ宮内庁や栃木県管理部並びに県警の警備担当などから詳細の指示が届くことを前提として、予め秋篠宮様ご来駕の際の資料や料理献立等々を縝き自主的に考えられる下準備を話し合うことにした。すると、料理長から意外な発言があった。

「社長、実は私、皇族方料理の免許皆伝を持っていますので、先ずは地産の食材で献立を作り天皇陛下下の料理長のチェックがあっても大丈夫な料理を提案します」と、いうのである。

「えっ、そんな免許皆伝があるの」と驚いたが、不思議な縁が付いてきているような気がしてきた。さらに、総支配人が、「昨年末に本館の改設計画を相談した際に、社長が『秋篠の間と八溝の間』のリフォームを実行したのはまるで今回の慶事を予感していたかのようですね」と、話したことで参加者一同の心構えに拍車が掛るムードになっていった。

その後、準備が進む中で県管理部並びに総務部から、那珂川町御視察御日程細目（宮内庁事前調査）十五項目に亘る分

刻みの御日程細目が届けられた。そこには、お立ち寄りになる全ての施設の詳細図面を始めとして、御行動細目には御先導・出迎え役の私と、息子で副社長の立ち位置からお召車御着図、御休所と御昼食処、両陛下のお進みになる御順路図、そして、御発図には御先導・御見送りとして私たち父子の名前と立ち位置等々が詳細に示されていた。

「今回の御視察は御公務でなく両陛下下のプライベートな行事ですので御服装も軽装であり写真撮影もご遠慮くださいますようにお願いします」という表現に添った準備である筈だった。しかし、日が迫るにつけてお迎えする私たち南平台スタッフ一同より寧ろ県管理部と総務部の担当者や栃木県警の警護担当官、宮内庁担当者等々が限りなく緊張を高めていることがひしひしと伝わってきた。当初、『プライベートの御視察で平服、歓迎市民にも気軽に旗を振って頂く』という話から、一転して『行幸啓にあたる『留意事項』という表現に変わっていた。その内容も①先導者（私と息子）の服装と名札から始まり、②お出迎え、お見送りにおけるご挨拶、自己紹介、お辞儀の仕方、③御先導者の歩く速度や公認された写真取材カメラマンへの留意、④御休憩室について、⑤湯茶のサービスについて、⑥お休みどころと化粧室について、⑦カーテンについて等々、三十二項目を示唆していた。その一方で結びの欄には『ごく自然な態度、言葉づかいで御説明願います。関係者は事前にリハーサルを行うなど、御順路、段取りについて熟知しておいて下さい』と、少々矛盾する向きもあったが素直に従い万全を期した。

而して、準備万端が整い六月二十一日の当日を迎えた。

午前十一時三十三分、指示書にある日程に一秒の狂いもな

く御着きのお召車からお降りになられた天皇皇后両陛下は、先ず、集まり過ぎることを注意して制限された七十名ほどの日の丸を振って歓迎する市民に笑顔で手を振ってお応えになった。それからお迎え役の私の方に正対されて自己紹介とご挨拶を受けると、『ありがとう、今日はお世話になります』と、陛下は包み込むような、穏やかでお優しい笑顔とお言葉で語りかけてくださり私たちの緊張を解き放つてくださった。

風除室で待機して自己紹介した副社長には皇后様が「御子息ですね、今日はありがとう」とおっしゃられ、ロビーに整列していたスタッフ一同にも笑顔とお言葉を頂いて御休室へと御先導申し上げた。周りの緊張や固い表現とは真逆で、私がこれまでの人生で初めて、どこまでも暖かくその懐に抱かれているような気がしたことは、両陛下にお会いする機会を得た人々誰もがもつ共通の感動であるに違いない。それからの時間は静かに穏やかに進み両陛下のご昼食が始まると、そこに携わる人々の間に、ほっとした空気が流れた。私的行幸といっても侍従女官四名、県警と皇宮警察官が総勢二十名余り、栃木県関係者二十名がそれぞれ分かれてご昼食を召上り終えると、早くも御発ちへの準備に移っていった、その時である。もう一つのご褒美の様な感動が訪れた。侍従の一人が私のところに来て、「社長に、馬頭温泉郷の歴史と当ホテルの由来をお聞きするよう陛下からお尋ねがありましたのでお聞かせください」と、願ってもないインタビュースタッフとなったのである。

折も折り、私は、下野新聞社から二度目の上梓として既にかき上げていた『馬頭温泉物語』の原稿を推敲中だった。そこで、小説のストーリーを頭に思い浮かべながら話し始めた。『寛文元年（一六六一年）に水戸藩第二代藩主となった徳川

光圀公は、朝廷の後水尾法皇の姪で後光明天皇の従妹である泰姫を正室として迎えていて帝と朝廷に尊崇の念を深くしていたことが明らかにされています。そして、この那珂川町の小口は、当時、水戸藩武茂郡小口村であった為、光圀公は延べ九度もこの地を訪れ、小口の名主であった大金重貞との交流で得た情報と現地視察により、この地のゆり金（砂金）と温泉を殊のほか大切に保全保護するよう示唆した歴史的事実が記録されています。以来、四百年に亘り地域の村民に愛され護られてきた温泉でしたが、源泉の殆どが河川敷での湧出であった為、その後も嵐や大雨により流失と湧出を断続的に繰り返しながら保ってきた歴史があります。それを、弊社創業者であり義父の故神場多巳一が、昭和四十八年にこの高台に南平台ホテルを開業し、その後、昭和六十年に流失の起かない温泉を目指して一〇二〇mの深井戸掘削を断行し、稀代の名湯といわれるトロトロ温泉湧出に成功しました。又、以前から存在していた温泉宿や県と町の温泉施設を纏めて、近郊に同様の温泉を採掘し『馬頭温泉組合』を設立して現在に至っています」と、やや早口で説明しその思いを侍従の方に託した。暫くして御発ちの先導を務めると陛下より、『美味しいお食事と貴重な御話をありがとう』と、願ってもないお言葉を賜った。私は、この感動を小説の結びに書き加えて完結としたが、両陛下のご来駕物語はそれで終わることはなかった。その二ヵ月後、天皇陛下御自ら、テレビで全国民に、生前ご退位と共に皇太子様に皇位継承されることを静かに語られたのである。その後、時代は令和へと移り六年が経過した今日でも、上皇様と上皇后様のお元気で仲睦まじいお姿を拝見する度に、あの日のえも言われぬ幸せが甦るのである。

末裔地主 4

紙屋 里子

風が出て、少し寒くなったので大急ぎで車に入った。

「後、二、三カ月ぐらい入院するかな」と親父が走り出した車の中で呟いた。大叔父の顔色が余り好くなかったので、心配になったのだろう。

「だいが、良くなったとは思うけどな。今の医学は進んでいるからもうと早く退院出来るかも知れないよ」と言ったが、確信は持てなかった。

それから二カ月ほどは三日に一度ぐらい彼女から電話が掛かったが、状態にそれほど変化はなさそうな様子だった。そろそろ退院するかもとは思えない電話ばかりだ。

朝からとても寒い日になり空には黒い雲がかかっていた。居間にいると電話が鳴った。

「もしもし、健次さん」

鈴を振るような上ずった声で話し始めたのは、円香だった。

「主人が、主人が……」と、涙声で言い言葉が続かない。

「どうしたんだい」

「主人が、主人が亡くなってしまったの」と言ってから、ううう、と口を押さえているような感じだった。

「何だって……」

余りのことに吃驚して、しばらく、物が言えなかった。

「亡くなった、死んだって、本当か」と、大きな声を出した。

「貞三大叔父が、亡くなったって」と、大声で言うと、お袋が振り返ってキョトンとしていた。それから、大急ぎで戸口にいる親父に報せに行った。親父も驚いたのか大声を出した。「何だって、貞三が、まさか……」と後は言葉が出て来ない。お袋は、その場にへたり込んでしまい、親父も、しばらく立ちすくんでいた。

二カ月前、出会った大叔父は、死んでしまうほど弱っているとは、とても思えなかった。

むしろ、以前より少し元気になった感じだったのに。

「すぐ病院に行くよ」と、電話口で言う。

「お願いします。早く、来て下さい」

受話器を置きながら、本当だろうかと半信半疑だった。

「大変だ。とにかく、病院に行ってくるよ」

取る物も取りあえず大急ぎで車に飛び乗った。車を運転しながら、間違いであつてくれればいいがと願った。

病院に着いて、急いで大叔父が入っていた病室に行くと、掃除婦がモップで床を拭いていた。やはり大叔父はと、思いながら看護師詰め所に行った。

「ご愁傷様です。ご案内します」

中年の大柄な看護師が先に立ち、エレベーターで一階に下り『霊安室』と小さく表示してある部屋の前に立った。看護

師がドアをノックすると「どうぞ」と中から声が聞こえた。

ドアを開けると線香の匂いがしていた。顔に白い布が掛けられた人がベッドに寝ており傍に円香がいて、泣いていた。部屋の中に入り寝ている人の白い布をソツと持ち上げて顔を確かめると、やっぱり、貞三大叔父だ。もうこの世の顔ではない、息をしていない青い大叔父の顔があった。

「本当だったのだ」と大叔父の死が現実だった事を認識した。

「私、どうしたらいいのかしら」

途方に暮れているのか、ワナワナと震えている。

「直ぐに叔父貴の家族に報せなければならぬよ」

かなり決めつけて、有無を言わせぬ厳しい声で囁くと、妾は身体をびくりと動かしした。

「私が、私が知らせるのですか」

意外なことを言われたように思ったのか、聞き直した。

「そうだよ。大叔父と一緒にいたのだから。きちんと貴女が知らせないとだめだよ」

そんな当たり前のことが分からない筈がないと思い、もう一度言った。

「でも……」と呟きながら、彼女は力なく立ち上がった。フラフラしていまにも倒れそうに見えたので、思わず横へ行つて支えた。

「ロビーに電話があるよ」と、いうと、妾はふらつきながら廊下に出た。ロビー迄出て公衆電話に寄つて受話器を持たせ、十円銅貨を五個電話の受け口に入れてやった。彼女はふるえながら金田貞三の家の番号ボタンを押した。七、八回のコールのあと貞三の妻、民子がでた。始め、民子大叔母の声は小さかったが、だんだん大きくなって、とげとげしい感じが伝

わつてきた。

「もしもし、病院に来ていただけじゃないでしょうか」

妾がぎくしやくしながらも話していた。

「なにをきに、病院に行くのですか」と民子大叔母は射すような言い方をしている。

「貞三さんが亡くなったのです。お葬式をしなくてはならないので、相談をしたいのです」

まさか断らないだろうと思った。

「お断りします。十五年以上も私たちの所に帰っていないのです。もう貞三は、ウチの人間としてだれも認めませんよ。あなたはぜひぶん一緒にいて世話になったのでしょ。あなたがお葬式をすればいいんですよ」と、大声で怒鳴っている声が聞こえたと同時に、茶碗を床に投げつけるようなガチャーンという激しい音と共に電話が切れた。

大叔母はなんという、とんでも無いことを言ってしまったのだらう。円香は顔を上げたが、ブルブル震えて受話器を激しく戻した。ジャラジャラと電話のお金受け口からコインが返ってきた。

民子大叔母は、最後の方は涙声のようだった。大叔母も、もう七十歳は過ぎていた。大叔父より二歳下だから七十三才のはずだ。どんなに年を取ってもこういう事はゆるせないのだらう。年を取っても男と女なのだ、夫婦とはそういうものだらうか。

だが、そうはいってもこのまま放つて置く訳にはいかない。何があるうと、葬式は出さなくてはならないのだ。

「俺の親父に相談してみよう」と、云った。年を取っているが親父は家長だ。貞三は親父の叔父だ、肉親だ。頼れるのは

親父しかいないのだ。彼女が、ハッとしたような顔をしてうなずいた。二人で直ぐに霊安室に行き、病院の係の人に家に帰ってくることを告げた。

「分かりました。なるべく早くここへ来て下さい」と、言うので領いてすぐに彼女を連れて駐車場まで走って行った。

空は真つ黒な雲が出て、今にも大雨が降りそうだ。彼女は心ここにあらずのような様子で、ボンヤリして車に乗り込んで来た。助手席に座っている彼女は、下を向きハンカチで口を押さえているので、一回り小さくなった様に見えた。

十五分程で家に着いたが、下りと大粒の雨が降り出していた。走って家に入ると、親父とお袋が、居間に座ったまままだ食事もしていない様子だった。ショックで食事も喉を通らないのだろうかと思った。

「どうしたんだい」と、親父が訝ったように聞く。妾を連れて帰ったので気を悪くしたのだろう。

「叔父貴が今一人で霊安室にいるんだよ。相談があるんだ。円香さんから聞いてくれよ」

後は、彼女が、言わなければならなかった。

「ああ、相談ってなんだい」

親父が、領いたので彼女に座敷に上がるようにいったが、多分、座敷にあげるのは初めてだろう。妾なので蔑む風潮が強かったから仕方がないのだが、彼女も自分の立場が判っているのか、遠慮しておらずと座敷に上がってきた。お互い自分の立場をわきまえながら生きていかなければならないのだが、こんな場合は仕方がないのだ。

「円香、なんだい」

親父が不審そうにとがった言い方で聞く。相談、それも叔

父の妾からの相談なので尚更だが、眉間に皺を寄せていた。本降りになったのか、雨音が大きくなった。

「はい、実は、貞三さんのお葬式のことなのですが、……」

貞三の妻がとりつく島もない様子で話し始めた。大叔母の言葉通りに話してはいるが、口を振るわせ憎しみのこもった言い方をしていた。仕方のないことではあるが、本妻と妾とは本来相容れないものなのだ。

黙って眉間に皺をよせて聞いていた親父は、少しの間、考えている様子だった。口をひくひくさせ、いらだちや腹立ちの交じる顔には悲しみも出ていた。

「貞三は俺の叔父だ、この家から出た男だ。俺とは血続きだ。家族がそんなことをいうのなら、この家から葬式を出す」

激しい口調で言った。親父にすれば大叔父は、子供の頃一緒に遊んだ大事な係累なのだ。

彼女が畳に手をつけて頭を深々と下げながら、むせび泣いて、暫く頭を上げなかった。どうしたらいいだろうと心を痛めていて親父に救われたのだ。地獄で仏に会うとはこのことだ。

「直ぐに葬式の会場に行ってくるよ」

二人が一緒に外へ出ようとすると、お袋が呼び止めた。「傘を差していきなさい」と、言って二本差しくれた。健次にはいつも使っている傘を渡し、彼女には、姉たちが来た時に差すものを、まるで家族の様に渡した。

「ありがとうございます」と妾は嬉しそうに受け取った。車庫までだが、大降りなので傘がないとずぶ濡れになる。

赤電話と郵便ポスト

相馬 龍久

また郵便料金が値上げされる。来年の年賀状はどうしようかと思う。今年の年賀状にも多くの年賀状終い宣言が書かれていた。もう年賀状もソーシャルメディアやメールで送る時代なのだ。手紙やハガキの時代よりも多くの古い友人や遠方の知人とも気軽に連絡がとれる。ソーシャルメディアのグループなどで多くの人の日常を知ると、いつも会っているような気持ちになり、あらためて時候の挨拶など手紙を書く気にもなれない。ましてや敢えて遠方まで出かけて会う気にもなれない。毎日多くの人と距離に関係なく会っている気分だ。全てはスマホの中のデジタル空間で完結しているようだ。プライベートも居酒屋としても年賀状は止めようかどうかと夫婦で話し合っていた。

朝お店の重いシャッターを開ける。するとシャッターの中央に開けられた郵便受けからダイレクトメールやチラシ、請求書などの郵便物が落ちてきた。

白い封筒が目についた。

今どき私信の封筒は珍しい。震える字で屋号と私の名前が書いてあった。差出人は岩立浩子と書いてあった。その震える文字以上に私の心は震えた。それは五十年前の感情が突然溢れたのか今動揺したのか分からない。兎に角妻に見つから

ないように直ぐに鞆にしまった。妻とは笑いながら初恋談義などしたこともある。ただこの歳で動揺している姿を覚られたくなかった。いい歳をして女性からの手紙ひとつで心が乱れるなんて我ながら可笑しかった。

その日のランチタイムは上の空で仕事をした。

早くあの封筒を開封したいと思った。時計をみつめても時間はのろくさと重い足どりで進むようだ。

家内より先に自宅に戻り自室に一目散に飛込み、ドアノブをロックした。

そして自分の行動を笑った。明らかに秘匿本能が働いているからだ。

確かに岩立さんからだったが差出人の住所が書いてなかった。消印を見ると鎌倉とスタンプで印字されていた。

封筒を開けようとハサミを取り出したが止めた。母の言葉を思い出した。縁を切らないように手で開封した。いい匂いがする上質な便箋に懐かしいスカイブルーのインクで震える文字で書かれていた。

脳硬塞の後遺症で手が震えて乱雑な字であることのお詫びが書いてあった。私のお店のネット投稿を見つけて読んでいたことなど書かれていた。ただ自分の事は何一つ書いていなかった。

彼女は高校時代に鎌倉山の高級住宅地に引越したことは知っていた。独身だったのか、旧姓に戻ったのかそれとも苗字が変わっているのでも単に旧姓で書いたのか、思いを巡らせた。ただ岩立さんが時間をかけて一生懸命に手紙を書いてくれたことが嬉しかった。

私は横須賀線の小さな町に住んでいた。

岩立さんとは中学生のとき席が隣で知り合った。

最初は仲良く話していたが私が女の子として意識してから、ぎこちない会話が続いていた。席が離れてからは話す機会さえ無くなった。

高校時代までは年に一度の年賀状のやり取りをしていたがその後は音信不通になっていた。彼女は名門女子大へ進学したと風の便りに聞いた。

遠い世界の人だと思った。

それでも何度か横須賀線でばったり出会うことがあったが、えもいわれぬ電流が走り体が硬直して目礼するのがやっとならであった。

中学生当時、自宅から歩いて五分ぐらいのところに雑貨屋があった。住宅街の小道から県道に出る角だ。タバコ販売のケースがあり外からも小窓から買えるようになっていた。小窓の外側には赤電話が置いてあった。またタバコ売場のすぐ横には郵便ポストがあった。店番のお婆さんは小上がりの畳の上で日がな外を眺めていた。

いつも老眼鏡を鼻に掛け背中を丸めて新聞を読んでいたの
で着物の襟に挟んだ手拭いが目だっていた。

中学生のとき一度だけ岩立さんに封書を出したことがあった。

体育のソフトボール授業で女子がグローブを使用する事になった。そこで男兄弟のいない岩立さんに私のグローブを貸してあげようと思った。電話で済むことだが、夕方から夜は家族が居る。第一お茶の間の棚の上に置いてあった。家族全員の耳目を集める中とても電話なんて出来なかった。

夕方タバコ屋の赤電話に向かった。手前から心臓の鼓動が高鳴り、顔が熱くなった。

店番の婆さんが夕食でいないことを願った。

婆さんは居た。

一度タバコ屋の前を通り過して婆さんに見えないようにポストの横から手を伸ばし受話器を取りダイヤルを回した。急に怖くなり受話器を置いた。十円玉が落ちてくる金属音が響いた。そんな事をもう一度繰り返した。

ダイヤルを回す手さえ震えて、とても岩立さんに電話なんてできなかった。

店の中から小さな咳払いが聞こえた。

婆さんに見透かされているような気がした。そのまま店の前を通り過ぎる気にもなれず遠回りをして帰った。

そうだと手紙を書こう、手紙なら何度でも書き直しができる。そして何度でも書き直した。

朝早く投函しに行った。

それでもポストの前に立つと手が震えた。手紙を半分差し込んで引き戻した。

思い切り投げ込んだ。

差し込み口の蓋が音を立てて閉まった。後悔した。ついに

やってしまった。岩立さんがどう思うか考えると、急に心の底が揺らいでささめき立った。ポストの横に郵便物回収時刻表が貼ってあった。その時刻にあの手紙を返してもらおうかと思ったが、学校の時間だ。

いつの間にか婆さんが朝の掃き掃除をしていた。ポストの前に佇む私を気に留めていないようだ。

走って学校へ向かった。背中に婆さんの視線を感じた。

岩立さんは手紙を見ただろうか、次の日も次の日も気が気ではなかった。その頃は席が離れていたの、休み時間は廊下に出たりして話しかけられる機会を待っていた。当時は教室のなかで二人で話せる雰囲気ではなかった。

夜お茶の間で家族で夕食を食べているときに電話がかかってきた。

母がお友達から電話だと受話器を私に手渡した。

家族全員押し黙った。テレビの音だけが響いていた。誰かが音量を下げた。

私は家族に背中を向け猫背になって話した。

「もしもし相沢です」

「岩立です」

その声を聞いただけで顔が熱くなった。

「相沢くん有り難う。グローブ貸してもらうね」

「はい。有り難うございます！」

「やだあ、有り難うなんて。じゃあ明日学校でね」

私は受話器を持って壁に向かってお辞儀をした。ふり向くと家族全員箸を止めて私を見ていた。

高校は別々の学校に進学した。あれから岩立さんがどんな

人生を送ったか知らない。ただネットで私を見つけてくれてメールやメッセージではなく直筆の手紙をくれた。それが嬉しい。

何とか手紙を出したいと思った。

ある考えが浮かんだ。やはり手紙だ。人に想いを伝えるには熱量のある直筆で伝えなければならない。

思いを込めて岩立さんの目に留まれば分かるように書いた。何度も清書し直した。スマホで写真を撮りソーシャルメディアに画像として貼り付けた。

「直筆のお手紙を頂くのは嬉しいことですね。それもなん十年ぶりなら尚更ですね。変わらぬ筆跡やインクの色、そして何より筆者が触った便箋、書いた部屋の空気まで運んでくれるようです。それはデジタル空間では出来ないことですね。思い出した旧友に心を込めて手紙を書いてみたいですね」

投稿ボタンを押すとき直接彼女に手紙を出すような緊張感があった。あの日ポストの前で投函を躊躇したときのような。

部屋の隅から覗いているようなタバコ屋の婆さんの視線を感じた。

家内が来年の年賀状はどうするのかと、また訊いてきた。家内はいい歳をしても夫婦の写真を撮りたがっていた。年賀状に写真があれば文章を書かなくとも元気でいる事を伝えられるからだ。

少ない枚数でもいい年賀状を出そう。短くても手書きの言葉を必ず添えようと私は言った。

蓮城院の風は、哀しみの色

安西 悠子

物井村の蓮城院の、「富田文」（二宮文）の墓所からは、田畠を隔てて桜町陣屋が間近に望める。

父、尊徳は、愛嬢の墓をここに定めた。逝去した真岡東郷には、すぐ近くに、天台宗、円林寺があるのに、住居より離れた蓮城院の墓地に葬った。

「文」は、青春の日々を過した、桜町陣屋を望める所に葬られた。

二〇〇三年（平成十五年）、私は、「文」について冊子を上梓した。女学生の折、一級上で、下級生の私をよく世話を下さった、広沢幾子さんに送った。

或る日、電話のベルが鳴った。幾子さんからだ。音声は厳しく、私を責めた。

「あなたの書いた冊子、読みました。あなたは、間違っている。金次郎さんの娘さんは、「文」と書いて、「あや」というのだ」と。

先祖代々、物井村、阿部岡に住み、地主で、醤油醸造業を営んでいる広沢正氏に女兒が誕生した。正氏は、かつて、この地の桜町陣屋に住んでいた、二宮金次郎に女兒が誕生し、「文」と名付けられた。「文」は、非常に優れた女性であったので、この方にあやかっ、娘も聡明な女性に育ってほしいと願い、「広沢あや子」と名付けたという。「広沢あや子」さ

んは、私より三級上で、女学校でも活躍していて恐い上級生であった。

金次郎の娘は、「文」と名付けられながら、永い年月のうちに、「文」と呼ばれてしまうようになったのだろうか。

幸田露伴は、二宮金次郎を非常に愛し、明治二十四年（一八九一年）、木版で、「二宮金次郎」を出版している。そして、その令嬢に「幸田文」がいる。今となつては、露伴にも文にも、その名の由来を尋ねることもできない。

桜町陣屋での、田畑の復興事業は、苦難の連続であった。

この頃、金次郎と妻のなみが出会ったのが「不二孝」という宗教団体の人々である。「不二孝」は、富士講とも書く。創立者は、小谷三志である。

金次郎が、桜町陣屋へ赴任する以前から、不二孝の信者は、宇津家領内にも数名が住んでいて、陣屋の役職にもついていた。特別の思想をもった宗教である。

そして、桜町陣屋の「日記」には、「文政七年（一八二四年）二月二十四日夕方、物井村の金兵衛の案内にて、水海道 勘兵衛まかり出て、夜中、不二孝へ心眼講致し大雨大風につき勝俣氏の方へ、金兵衛、勘兵衛兩人泊る」

と、ある。大雨大風のなかを、「不二孝」の信者達が、遅々として進まない、桜町陣屋での金次郎の仕法に貢献できるか

もしれぬと、我が身の危険をも顧みず、全身を、大風、大雨に曝して、金次郎の仕法の援助をするためにやって来た。「不二孝」の教祖、小谷三志は、「男女平等論」を唱えた。即ち、「女には男と同等の力があり、同等の仕事が可能である。」と、考えるのが、不二孝の根元である。

三志は、その著書、「和漢草稿帳」に、
「なんでもできるおんなならを
せぬに居たのはなにごとぞ

これはおんなをつみ人に
いいならわしたむくいかな
これからなんでもいたします
ふうふそろいてはたらかば
みろくの御世とむつまじう

あさゆうわらいてくらすのじや

これほどもでたい事はなし
はいはいそうでございます

と、その持論を展開している。

金次郎は、この小谷三志の思想を尊敬し傾倒した。

後に、金次郎の子息、弥太郎の妻、鮫は、その手記の中に「陣屋のなかで、女たちが、縫い物をしているのを嫌い、書物を読んでいると機嫌がよかった」と書いている。

金次郎に女兒が授かった。金次郎は喜び、その娘に「文^{あや}」と名付けた。

長じては、学問を授けた。桜町陣屋で仕法の仕事をしている不退堂聖純を師とした。不退堂聖純は立派な学者である。

不退堂聖純が京から江戸に来たのは、天保五年（一八三四年）の四月二十七日のことであった。故あって、桜町陣屋で

の金次郎の仕法の書記をし、その傍、弥太郎と「文」との書道の教師、学問の師となった。尚、小谷三志は、不退堂聖純の弟子であった。

更に、金次郎は、「文」に、江戸在住の絵師、大岡雲峰に師事させた。雲峰は江戸在住であるから、所謂、通信教育である。江戸より桜町陣屋へ送られてくる手本をもとに練習し、再び江戸に送り返し、大岡雲峰の添削を受ける。「文」の絵は、上達し、雲峰は、「奇峰」という画号を与えた。「文」は、この画号を愛した。江戸の役所で仕法の仕事をする兄、弥太郎との書翰の往復に、「文」ではなく、「奇峰」とサインしている。「文」の絵は、今市、二宮神社に残されているが、花鳥を描いた優しい筆づかいのなかに、鋭く勢のある線が表現されていて、彼女の美に対する感性の非凡さに驚くのである。

「文」は、当時の女性としては高度の学問を受けた。「文」は、学問によって培った学力を、単なる教養としてではなく「有用の学問」とした。尊徳が幕府の下命により、日光御神領の仕法を行つた。日光御神領は、下野国の北辺にあり、気候は厳しい寒さで、土地は、山裾の地味の瘦せていて、この土地に米を増産せよ、という難題であった。復興の仕法は尊徳が樹で下書をする。けれど、幕府に提出する公文書は、「文」が清書する。父の仕事に缺かせない人物となっていた。しかし、「文」は、哀れであった。

弘化二年（一八四五年）十一月四日付けの、江戸在住の兄、弥太郎に宛てた書翰には、

「御父上様は、日光御神領荒地起返しの実施の下命は、一日一日と年月も終り、御住居もきまらず、日夜、御心配のなか、たとへ、わたくしごとなど、何年御捨て置れ、

高年に及び候ても、何ぞいとうべきこともこれ無く…」

と、書いている。更に、

「わたくしこと、いまだ、髪も直し申さず候えども、余り年だけ候間、直し申したく存じますので、一寸、お伺い申し上げ候」

と書いている。江戸中期以降の婦人の髪型の特徴として、未婚、既婚の別がある。法律による規定があったわけではないが、封建社会のなかでの位置を象徴する意味で暗黙の規制があった。年令別では、幼女から少女期の始まるまでもに多少の相違があった。一人前の娘となつて、嫁入り前の髪型は「島田髷」に結つた。更に、結婚すると「丸髷」に結うのである。「文」は、この書翰を書いた時は、二十二歳になつていた。当時は、十五歳から十七歳位が結婚適令期であるのだ。二十二歳の「文」は、まだ、少女期の髪を結つていたのだ。

「余りに年だけ候間、直し申したく…」

と、自分の髪型でさえ、父や兄に、伺いをたてている。

又、「雨引山に参詣したいのだが、きのことりかたがたに参詣してもよいだろうか」

と、兄、弥太郎を通じて、父に許可を求めている。住いのすぐ近くの処に行くのにも許可を求めている。

「文」は、又、兄の弥太郎に手紙を書く。

「桜町陣屋にては、好みの着物や帯を求められない。江戸ではやりの帯を送つて下さい」

と、頼んでいる。弥太郎は、早速、江戸で流行している栗皮色の帯、三筋を、「文」に送っている。仕法作業に明け暮れ、田圃の中で働いている「文」を気の毒に思った。日ねもす雲雀の歌をききながら、働いている「文」も、流行の着物や帯

が欲しいのだ。

父、尊徳の日光御神領の仕法は、困難で、遅々として進展しない。この様な状態のなか、「文」は、二十九歳になつてしまった。

尊徳の最初の弟子、相馬藩士、高田高慶、三十九歳と結婚するのである。嘉永五年（一八五二年）八月二十八日のことである。やがて、翌、嘉永六年（一八五三年）春、高慶は身重の妻、「文」を連れて、真岡東郷陣屋に着く。「文」の初産を、郷里でするためである。東郷陣屋で静養する「文」は元気で、江戸に滞在している夫や父に元気な書翰を送っている。産み月になつた。三十歳で初産の「文」には、体力の限界があつた。長時間の出産に耐えられず胎児は、胎内で死した。「文」も、体力を消耗し、死に至つた。

この時、尊徳は仕法の為、日光御神領内、町谷村名主、武兵衛宅に居た。幕府の仕事で、瀕死の「文」の手を握つてやることもできなかった。尊徳は、愛しい娘の死を弔い、十日間、武兵衛宅から一歩も出ることはなかった。

畦道を通る農夫たちが、「ペリーが黒船で浦賀の港に來た」と、不安そうに囁きあつていた。

尊徳は、相馬の富田家に遺髪を送つた。富田家では、蒼龍寺に立派な墓碑を建て、後に相馬市では、「富田文」の功績を称えた掲示板を建てた。

「文」は、今、蓮城院の墓地に、青春の時を過した日々を思い浮かべながら、吹き来る爽やかな風の中に眠っている。

和氣先生の現代文

丕内 七武

ぼくは、二十五分もかかって仁井田駅に行った。十二時三分発には三十五分もある。待合所には、どこかのオバサン二人とT高校の女子生徒がすでに座っていた。その間に座らせてもらった。ぼくは、元氣そうな彼女たちに声をかけた。

「きみたちは体調が悪いのか」「そう」と浅黒いほうが言った。「君らは帰ってから何をするの。寝るの」「うん。体調が戻ったらバイトよ」と、白いほうが答えた。

「そうなの。ところで、何年生」「二年生だよ」「ふうん」そんなやり取りの間に男子生徒がやって来た。

二人とも同時にぼくにべこりと頭を下げた。この二人ばかりでなく四人ともぼくをT高の先生だと思っているに違いない。教員稼業を五十年近くやっていると教員臭さが滲み出てバレてしまうものらしい。「君らも体調不良か」「はい」とやはり二人は同時に答えた。

四人にはすぐ同じ時間が自然に流れ始めている。ぼくにもオバサン二人にも。ローカル電車の待合室がそうさせるのだろう。

「どこに行くの」と手前の色白の女子生徒が訊いてきた。

「ぼくは、これから古河駅近くの文学館に行くんだ」

「何しに」「散文詩人の粒來哲蔵の詩集を読みね」

「ふうん」と四人は同じように頷いた。

「僕も下手くそながらも詩を書いているんだ。粒來哲蔵には程遠いんだけどね」「でもさ。何歳になるの」「僕は七十一になるジジイなんだよ」と、心にもないことを答えてしまった。

「七十一か。若いじゃん。まだまだこれからだよ。がんばるなよ」その言葉にショートカットの浅黒い女子生徒も相槌を打った。

後からやって来た男子生徒もこのやり取りに興味津々といった表情だ。授業中もこんな表情をしていればいいのにと思った。答えはおおよそ見当はついていたが、彼らに訊いてみた。

「君たちは、授業中はどうしてるの」「もちろん寝ているさ」

「現代文は今何をやっているの。教科書があれば見せてよ」

「たまたま入れ忘れたのがあったよ」とノッポが言い訳をしながら、薄っぺらなカバンから現代文の教科書を引っ張り出して見せてくれた。

「君たちは二年生だね。詩の単元をやっているのかな」

「そうらしい。ズボシに教わってるんだけど、訳わかんねえんだよ。オノサンがどうしたとか、ゆあーんゆあんなんたらかんたら」とノッポが言った。もう一人が補足した。「ズボシとは星渡のことだよ。でもおめえは大したもんだよ、寝

ながらそこまで覚えていなんて。おれは作者がマンナカノ
チュウタローしか覚えてねえよ」ぼくは笑いを堪えた。

「それはそうと、君たちの名前を聞いていなかったな。ぼく
は、和氣清太郎だよ。和氣清麻呂の五男坊の葉家の末裔とア
マチュアの郷土史家に聞いている」

「あんたがキョーマロか。俺は外藤だ。あんた、キョーマロ
と言われてんだよ。知ってるかい。学校じゃ有名だよ。変な
先公だつて。授業中、突然歌を歌い出したり、合唱部の生徒
に歌を歌わせたり、俺は太っちよのブランコ乗りだ、観客様
はみな鯛、君たちは鯛になってその動作をしてくれと言つて
教壇を上り下りしながら右往左往したり、肺がんで亡くなつ
た生徒の話をして悲しくなり大泣きをしたりするんだつて
ね。授業中寝ていてもそのときだけは生徒は起きてしまうそ
うだよ。迷惑な先公だと怒っていた生徒もいるそうだよ」
「キョーマロに会えるなんてラッキー。俺は佐藤。さつき鈴
木くんだったけなんてよく言うよ。あだ名がキョーマロとは
ピッタリじゃねえか」

浅黒いのが、言った。「私は深水あさみよ。深くて浅いな
んて変てこりんな名前だよ。キョーマロよりはましだけど
ね」

白い顔の長い髪の女子生徒も自己紹介をした。

「私は有坂あゆみ。私の名前も変だわ。坂を歩くよ。先生方
には覚えやすくいい名前だと褒められるが、馬鹿にすん
じゃねえってえの」

「オバサンたちも自己紹介しますか」と水を向けると、

「名乗るほどの者じゃないので遠慮しますが、みなさんのお
話が面白いので聞かせていただきます」と笑顔で答えてくれ

た。

「時を戻そう。君らが勉強しているのは、チュウタローじゃ
なくて中原中也の「サーカス」だよ。ぼくの十八番だから教
えてやろう。キョーマロの授業は一時間2620円するが、
ただでいいよ。袖振り合うも他生の縁というぐらいだから。
オバサン方もお代は結構ですよ」

オバサン方や女子生徒も面白がつて事の成り行きを見守つ
ている。

物事の流れとは恐ろしいもので大津波のように人々を飲み
込んでゆく。外藤は、照れくさそうに仕舞った教科書を取り
出してぼくに差し出した。佐藤も呆氣にとられてその流れに
身を任せていた。ぼくは、ごく自然に号令をかけた。

「はい、背筋を伸ばしてそのまま礼」二人のオバサンまで礼
をしてくれた。彼女らは、「こんな礼をしたの何十年ぶりか
しら」「そうだわね」などと呟き合っている。

ぼくが、外藤から教科書受け取り「サーカス」の載つてい
るページを開いてみると、インクの匂いが香り立つほど汚れ
ていなかった。詩人の略歴に掲載してある中では、寄る辺の
ない不安そうな表情を浮かべていた。この四人の高校生たち
もこの感情を、心の奥で感じることもあるのだろうかと思ひ
をしてしまった。

そもそもが生徒たちは、詩や詩人と聞くと自分たちとは
違った異次元の文学や生き物のように感じているので、詩は
縁遠い。国語教師も詩の指導を苦手としている者も少なくない。
ぼくもそうだった。だから、詩を書き始めたのだった。
でも、文学のなかでは主役で王道であるのだ。その理由の一
つに詩は音楽なのだ。中国の詩は曲が邪魔で独立したと言わ

れる。中也の詩はその特徴を兼ね備えている。

「佐藤君、読んでみてくれない」「ええ、何で授業中寝ている常習の俺が」女子生徒たちが、「先輩お願い、読んでみてよ」

佐藤は、気乗りがしない面持ちであつたが、外藤から教科書を受け取り朗読を始めた。

「サーカス 中原中也

幾時代かがありました

茶色い戦争ありました

幾時代かがありました

冬は疾風吹きました

幾時代かがありました

今夜此処での一般盛り

サーカス小屋は高い梁

そこに一つのブランコだ

見えるともないブランコだ

頭倒さに手を垂れて

汚れ木綿の屋蓋のもと

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

その近くの白い灯が

安値いりボンと息を吐き

観客様はみな鯛

咽喉が鳴ります牡蠣殻と

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

屋外は真ツ闇 闇の闇

夜は劫劫と更けまする

落下傘奴のノスタルヂアと

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

「なかなかいい声じゃない。素晴らしい」

たどたどしくはあつたが懸命な朗読だったので、ぼくは、心から褒めた。さらに続けて言った。「とてもいいんだが、もっと詩が生きるにはどんな読み方をしたらいいんだろうか」

オバサンの眼鏡をかけた方が思いがけないことを言った。

「わたしは藤田と言います。こちらの方は君島さんです。あら、つい名乗っちゃたわ。ごめんなさい君島さん。私たちはサーカスを見たことがあるわ。学生さんたちはあまり知らないんじゃないでしょうか。ねえ君島さん」

「まあね」と、相手のオバサンは当惑しながら合槌を打った。

「どんなふうに読んだらいいんですか」

「そうね。団長さんが観客に大きな声で語りかけるように読んだらどうでしょう。『ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん』は、団長さんの語りではないわね。ブランコが揺れていることを表わしているのね。歌の合いの手のようなものだから歌うように語るといいわね。そうだ、そこのお嬢ちゃん二人が声をそろえて語るといいわね」

「面白いことになって来たな。藤田さんに団長役をやつてもらえないですか。でも、なんで、ぼくが指導しているような

ことが指摘できるんですか。演劇でもやっているんですか」
「はい、若いころのめり込んでいたんですよ。団長さん役は男だから先生がいいんじゃないですか」

ぼくも深水も有坂も急に緊張した面持ちになってしまった。男子生徒二人は役を振られず安堵していた。中也の意図は藤田さんによって明らかにされたが、表記でも詩句の頭をそろえずブランコの動く軌跡を表現しようとしている。中也のこの詩に対する魂を込めた詩作の姿勢が改めて感じられた。

この詩は、行と行の間、いや、詩句と詩句の間の飛躍を見事に活用した行分けの名詩なのである。電車がもうすぐ到着する。果たして残りの時間でこの詩を読み解くことができるだろうか。

ぼくの両脇に深水と有坂を座らせて佐藤から教科書を受け取り、朗読を始めた。ぼくの広げた哀しいほど汚れない教科書を三人は一心に見つめる。ぼくはサーカスの団長となり切って語り始めた。二人の女子生徒も清らかな声で歌うように合いの手を入れる。ほかの四人はぼくらを注視している。中也の夢幻的世界の音楽が仁井田駅の待合室に響き渡る。

最後の詩句「ゆあーん ゆよーん ゆあゆよん」が歌い終わると同時に、電車は音もなく滑り込んできた。

マンボウと夜明け

鈴木 みずほ

二〇XX年、全ての企業ではマンボウを飼うことが義務化された。

食糧危機を脱するためとか、生物保護の意識を社会レベルで高めるためとか、回りまわって環境保全に役立つとか、陰謀だとか、多様性だとか。とにかく欧米はじめ世界中で取り組まれているので、日本も倣ってということらしい。もちろん反発の声も大きかったが、どの企業も補助金をたくさんもらって何も言わなくなった。五年も経てば、俺も何とも思わなくなった。

さて、マンボウは繊細で飼育が難しい。

ちよつとしたことでストレスを感じて死んでしまう。例えば水槽が小さすぎてだとか、魚の骨が喉に突き刺さってだとか、朝日が強すぎてだとか。それでいて二メートル以上に成長するのだから厄介である。

かといってぞんざいにも扱えない。先日とある会社の従業員が、マンボウを虐待死させたというニュースがあった。世の中は怒り狂い、どのメディアも連日トップニュースで報道した。企業は記者を集めて謝罪会見を開いたが、それでも炎上の火は消えず半年後に倒産した。

そんなこともあって、俺は基本マンボウには関わらないようにしていた。勤め先でも一匹飼っていたが、若い社員に面

倒を見させて俺は餌すらあげたことがなかった。明日だって明後日だって、関わるつもりはなかった。

その晩は飲み会があった。そこそこ大きなプロジェクトを完遂した打ち上げである。エンジニアとして初めてリーダーを任された事業で、俺も少々浮かれていたのかもしれない。午前零時をまわった地下鉄のホームで、あと二分で電車が来るという時だった。ついさっきまでは何ともなかったのに、強烈な吐き気に襲われた。

まずい。脂汗が吹き出し、急激に体が冷えていくのを感じた。ゆがむ視界に映るのは、終電を待つ大勢の人々。

さすがにここで戻すわけにはいかない。やつとのことでホームの淵まで足を動かし、しゃがみこもうとした。

あ、と思った時にはもう遅かった。

ふつと体が浮いたと思えば、強い衝撃の後、全身に痛みが広がった。手に冷たい鋼材が触れ、自分がホームから落ちたのだと気づいた。

「落ちたぞ！」

上のほうからとにかく人の怒号や悲鳴が聞こえたが、どこにも力が入らない。

逃げなきゃ。そう思った時には、あたりは轟轟たる地鳴りに包まれていた。やがて激しい警笛が耳をつんざき、白い光で前が見えなくなつて、俺は――――。

世間は仕事ができない奴には厳しい。利き手を失つた俺は、さつさと会社をクビになつた。

エンジニアという職業はフィジカルも資本であると初めて気づく。気づいたところで仕事は見つからなかった。

「どうすりゃいいんだよ……」

残った左手で求人誌を繰る日が続く。人類のやるべきことのほとんどは人工知能に取って代わられた。テレビをつければ、人は足りているけどマンボウは足りないというニュースばかり。

俺は悩んだ。三日三晩悩んだ。

そしてひらめいた。マンボウになればいいんだ。

役所で手続きを進め、俺は晴れてマンボウになつた。

そこからは早かつた。マンボウなら何でもいいので、ヒレの欠けたマンボウでもすぐに引き取り手は見つかつた。

案内されたのは、雑居ビルの一角にある不動産屋だつた。ドアを叩けばすぐさま若いスーツの男が出てきて、「ここがお前の家ね」と大きな水槽の前に連れていかれた。

「俺マンボウですけど、少しなら働けますよ」

「いや、いいから。そこ入ってて」

ぶっくらばうに半分だけ水の張つた水槽を指さす。しぶしぶ入ると、男はさつさとどこかへ行ってしまつた。

なめやがつて。片ヒレがなくなつたって営業くらいならできる

だろ。腹が立つたが、水槽の中は思いのほか居心地が良く、次第に怒る気持ちもなくなつた。

そして夜になつた。朝の男がまたやつてきた。俺は暇だったので「話さないか」と声をかけたが、男は餌を水に撒いてさつさと帰つてしまつた。

なめやがつて。腹が立つたが、まあどうせ働かなくていいならこのままでもいいか、という気にもなつてきた。

ここでの生活は、慣れれば案外悪くなかつた。

誰も話し相手にはなつてくれなかつたが、寒いと言えはお湯を足してくれた。西日が強すぎると文句を言えば水槽を北側に置いてくれた。青魚が嫌いだと言えばエサがイワシからマグロに変わった。

そして朝になつた。また夜が来た。朝になつた。夜が来た。……。

どのくらい経つたのだろうか。三年、五年、十年、それ以上か。

ヒトだったころの自分が何をしていたのか、正直思い出せない。たしかイスだかツクエだかにずっと座つていた気がする。それに比べたら、水の中はずっと快適である。

飼育下のマンボウの寿命は十年。たぶんもう、俺は長くないだろう。水槽にぶつかつてボロボロになつた俺の体を見て、皆顔をしかめたり、かわいそうと言つたりする。

べつに悲しくはない。第一、おれにはもうヒトとしての尊厳はないし、大体ソングンがなにかも分らない。相変わらず話し相手はいないけれど、とにかく水槽からの景色は、いつもあおくてきれいだった。

まほうびんのれきし

くぼかわ けんいち

「おかえりなさい。寒かったら？」

今のは、おばあちゃんの声だ。

「ただいま」

ぼく？ ぼくは五年生。ママと二人で暮らしている。

おばあちゃん？ ああ、おばあちゃんはママのママ。近くに住んでいて、ぼくが学校へ行ってるあいだにやってくるみたい。夜、ママが仕事から帰ってきたら自分の家に戻るんだよ。

一年前まで、ぼくのうちは三人家族だったんだ。

算数なら、奇数の3も2で割り切れるだろう？ 五年生は

小数点を使えるからさ。

家族はそうはいかない。ママとぼくは、そのまま元の家で暮らして、パパがアパートに引越して行つた。ママが仕事をするようになったのはそれからなんだ。

その夜も、おばあちゃんと二人で夕ごはんを食べた。おかわりはしなかったよ。ちよっと考えごとをしてたからさ。

ママが帰ってきたのはそのあとだ。一人静かに夕ごはんを食べているママも、おかわりはしなかったみたいだね。

ママとパパが、またいっしょに仲良く暮らすためには、ど

うしたらいいんだ？

おふとんの中で、そればかり考えていた。

なあんにも浮かばないぞ。あああ、はらへったなあ。

夕ごはん、おかわりしておくんだつたよ。

仕方ない。ぼくはベッドから出て、そつと階段を下りて行つた。明かりをつけないまま、薄暗いキッチン冷蔵庫をあけようとしたときだ。

「なんか、悩みがあるのかい？」

女のひとの声が聞こえたんだ。

ママの声じゃない。もつと歳をとつた女のひとの声だ。

おばあちゃんの声ともちがうぞ。おばあちゃんは、今日はもう帰つたもの。

「なにを怖がつてるんだい？ 男の子だろ、しつかりおし！」

声は上のほうから聞こえてくる。

「ほら、腰を抜かしてないで、椅子を持ってきてこの扉をあけてちょうだい！」

ぼくは、腰を抜かす、つて言葉の意味は分からなかった。だけど、なんだか上のほうから命令ばかりされていることだけは分かつたんだ。だから言つてやつた。

「おまえ、だれだ？」

「目上のひとに向かつて、『おまえ』とは、なんだい！ まっ

たくしつけのできてない子どもだよ」

流し台の上の扉の中から降ってくる声に向かって、ぼくは質問した。

「いま『目上のひと』って言ったよね。人間なの？」

「人間、ですか？ だろ。まあいいよ。人間じゃないよ」

ぼくはその返事を聞いて、信用してもいいかなって思っちゃった。だって、うっかり信じちゃいけないって教わったのは人間の大人のこともんね。そんなことを考えていると、また頭の上から声がした。

「あんた、お母さんとお父さんを仲直りさせたいんだろ？ だったら早く椅子を持っておいで」

ぼくは、その声の指示に従って、椅子の上に立ち、流し台の上の扉をあけた。

扉の中には、めったに使わないおなべや箱が入っている。

「あたしは、いちばん奥にいるよ」

声がすぐ近くから聞こえてきた。ぼくが手前のおなべを少し横にずらすと、奥に何か見えた。

「はじめまして、坊や。あたしはポット。ほんとうは魔法瓶で、呼んでほしいけどね」

それは、コードのついていないポットだった。この前、パパといっしょに行った食堂のテーブルに、こういうポットが一つずつ置いてあったな。パパとは、月に一度会うんだ。

「こんばんは、まほうびんさん」

『まほうびんさん』かい。なかなかいい響きだねえ。坊や、あいさつもちゃあんとできるじゃないか」

「あ、ありがとう、ご、ごさいます」

「いいねえ、気にいったよ。あつ、坊や、あたしがどうして

日本語をしゃべれるのかとか、余計なことは質問しないでくれよ。あたしは、打ち合わせの長いのが嫌いだねえ」

「わ、わかりました」

「素直でよろしい。頭の回転もいいんだね、坊や。いいかい、よくお聞き。結論から言うよ。今度、坊やがお父さんと会う日に、お父さんがこの家でお茶を飲んでいくようにし向けるんだよ」

「パパは、ぼくを送ってくるだけで、うちへは上がらないよ」

「そんなこと、坊やに教えてもらわなくても分かってるよ。あたしがこの家に何年いると思ってるんだい！ そこは、坊やの腕にかかっているんだよ。お父さんがキッチンまで上がってきて、そこにあんたのお母さんがいれば、いよいよあたしの出番さ。さあ、お母さんが起きてこないうちに自分の部屋にお戻り。しっかりおやりよ」

ぼくは素直に、まほうびんに「おやすみなさい」とあいさつして扉をしめ、椅子を片づけて二階へもどった。冷蔵庫の中のもの食べなかったけれど、ベッドに入ると眠くなっていた。

作戦決行の日。ぼくはパパと映画を見に行った。

パパはもともと、あまりしゃべらない。ドライブして遠くへ出かけるときは、ぼくがほとんどしゃべっていた。パパは僕の話に、「そうか」とか、「ふうん」とか返事をしていることが多い。

ほんとうにパパはぼくの話聞いてくれるのか疑ったこともあったんだよ。だけど、それは違ってた。先月、パパとドライブしたとき、わざとパパに質問してみたことがあるん

だ。「地球は太陽のまわりをどっち向きで回ってるの？」って。そしたらパパは、「公転も自転も、時計と反対回りだな。あれっ、たしか太陽系の惑星で、金星だけは自転が時計回りだぞ。おい、調べてみよう」って、それだけ言うと、その日の行き先を図書館に変えちゃったからね。

今日もドライブなんかすると、うっかり、まほうびんの歴史なんて質問しちゃいそうだったから、映画を見たいってリクエストしたんだよ。

映画を見ているとき、ぼくは何回かとなりに坐っているパパの顔を見上げた。ちよつとこわい場面るとき、パパはぼくの目を見つめて、そつと頭の上に手を乗せてくれた。

パパの顔はニッコリしていた。パパは大人だからこわくないのかな？ でも、ぼくはなんだか安心して、また映画の中に入っていたんだ。

おかしくて笑いながらパパを見上げたときも、やっぱりぼくの頭をなでた。

そのときもパパはニッコリしていたっけ。大人でもおかしい場面なんだなって思ったよ。

ファミレスで夕ごはんを食べているときも、パパはあまりしゃべらなかった。大人でもおもしろい映画だったのかな、パパは、ずつとパンフレットを読んでいたからね。

ぼくも、食べることに、しゃべることに、考えることを三つこなすのはむずかしかったから助かった。

ぼくは心の中で、一つのセリフだけをリハーサルしていたかったんだ。

うちに着いた。

ママが玄関のドアをあける。

そして、ぼくとパパの顔を確かめて、ママが「おかえりなさい」と言ったあと、パパが口を開く前に、今だ！

「ねえパパ、お茶飲んでいってよ！」

ママが困ったような顔をしている。

やっぱり失敗かな？ と思ったときだ。

「それがね、電気ポットが急にこわれちゃったのよ」

ママはそう言ったんだ。

「魔法瓶、どつかにしまつてあるんじゃないか？」

今度はパパがママに聞いている。

「そう、ね」

ママが答えた。ニッコリしているようにぼくには見えた。ひさしぶりだな、ママのこんな顔。

それから、どうなったかって？

ママは電気ポットを修理に出さないんだ。

キッチンテーブルの上には、まほうびんがでーんと乗っかってる。夜中に起きて行つても、もうしゃべってくれないけれど。ぼくは思う。まほうびんには、ママとパパにとって、たいせつな何かがつまつてるんじゃないかな。

少し傷はついてるけど、ママはいっしょけんめいみがいていたもの。もちろん、ぼくにとつてもたいせつな、まほうびんさ。だって……………

「おかえりなさい！」

今のは、ママの声だよ。

「ただいまー！」

初雁

鈴木 あぐり

庭の一隅に咲くチョコレート秋桜が風にそよぐ。昼下がり、内山由美子の住まいに、一人の青年が訪ねて来た。

内山家の三十五歳になる長男、孝之の同窓生だというその青年は、運転免許証を提示して大高と自己紹介を始めた。どこかで会ったような誰かに似ているような、そんな雰囲気を感じさせていた。

翌年一月に同窓会を企画していて、ハガキを出す前に名簿を作成しようと、卒業生の家庭を回っているらしい。詐欺事件が多発する現在、どこの家庭も個人情報には敏感で、なかなか思うように進まないと言う。

「決して怪しい者ではありません。孝之君にお尋ねして、よろしかったら、記入してください。お手数かけ申し訳ございません。近日中に再度伺います」

大高君は、書面を差し出して、足早に帰って行った。数日後のひるまえ、由美子が庭の草取りを終えて、手を洗っている、大高君がやって来た。

由美子は家のなかから書類を持ってくると手渡した。トレーには紙コップに入ったコーヒーが載っている。

「さっそく確認させていただきます」

大高君が紙面を見ながら、

「孝之君は所沢に住んでらっしゃるんですね」

「地方新聞の記者をしております、転勤が多いものですか」

「新聞社なんて羨ましいなー 文字に触れる仕事が僕のがれでした」

「そうですね、今は何をなさっているのですか。あら、不躰なことを聞いてしまいごめんなさい」

「大丈夫です。在宅でパソコンに向かい働いています。時間はたっぷりあります」

「今流行の職種ですね」

「そんなカッコいいものじゃないですよ」

由美子はコーヒーをすすめた。大高君はじつくりと味わうように口に運ぶと弾けるような笑顔で美味しいと言った。

「コーヒーって日本茶を飲むとき、ズブズブって音たてて飲む人いるじゃないですか。あれ正解なのよ。一見お行儀が悪そうですが、コーヒーと空気が混じりあい美味しくなるそうよ」

そういうと由美子はちいさな音をたて飲んでみた。

「やっぱりそうだ。思い出しました。内山さんって喫茶店やっていましたよね」

「ばれちゃったか……」

由美子は大袈裟な身振りをしながら笑った。

「孝之君とは小中と同級生なのに、一度も同じクラスになったことがなかったからか話した記憶もないです。でもすごく興味がありました」

「え？ 孝之に興味があったの？」

「たしか小五の作文コンクールで入選しましたよね」

「よく覚えているのね」

「校内放送で流れた作文、インパクトありましたよ」

「そうなの？」

「冒頭の一節が、『少し垂れ目の僕の母は、顔に似ずコーヒーを淹れる達人である』で、度肝を抜かれました。小五ですよ」

「アハハ、笑えるわね」

家に帰り家族に作文の話をすると、達人の淹れるコーヒーが飲んでみたいと母が言い出した。すぐに話がまとまった。そして翌日には家族そろって喫茶店に出かけた。

父はそれまでに何度もお邪魔していたらしく内山さんと親しそうに挨拶を交わしていました。

「ほんとうに美味しい！」

母はそういって、目を細めた。

「その日僕と妹は、ソーダフロートとアイスココアをそれぞれ頼み、楽しいひと時を過ごしました。父はそのあととも相変わらず通っていたようですね」

「そうでしたか。お父さんはいつも単行本を抱えていらっしやいました。懐かしいです」

「えー 家では新聞を読む程度で本は読みませんでした。雑事に追われていたのかな。意外な一面です。亡くなった父の話が聞きたいです。日を改めて来てもよろしいでしょうか」

「お父様亡くなられたのですか」

「五十一歳でした。父は胃癌に罹っても延命治療などする資格のない人間だと頑なに治療を拒み、家族を困らせました。痛みより何かを苦悶するような表情が今でも忘れられませんが、ご迷惑とは思いますが、どんな些細なことでも結構です。聞かせてください。お願いします」

由美子は少し強引だと思ったが、同意し翌週水曜日に会う約束をした。

大高君が帰ると急に疲れを覚え家に入った。由美子は、大高父子の顔を思い浮かべた。

由美子は三十代中ごろから十年ほど喫茶店を営んでいた。子育ての只中で多忙を極めた。特にランチタイムは近くの工場や事務所などで働く人たちが集まり、てんやわんやの日々だった。だがアイドルタイムといわれる二時から五時、そして夜は、コーヒーやケーキを静かに味わう客層が来店した。

そんな中に大高氏がいた。夕食後と思われる時間に単行本を抱えやってきた。小一時間ほど静かに読書し帰られた。

時にはコーヒーを供するときなど、言葉を交わした。

「奥さまは先生なので、僕がいないと仕事がかどつて助かると思っています」

由美子は自分の妻を奥さまと呼ぶところが微笑ましいと思ったものだ。大高氏の近所に由美子の従姉妹が住んでいるせいか、何度か話題に登った。「世紀の大恋愛」だと。二人は中学校の同級生で、県都の高校へ通う電車の中で親しくなったらしい。大高氏は工業高校へ進学し、卒業後はすぐに就職をした。中学時代を知る級友たちは、成績優秀だった彼の選択が意外だった。一方妻は女子高から国立大に進学し教員となった。二人の結婚にあたっては双方の親たちに反対さ

れたらしいが、辛抱強く説得し結ばれた。

結婚後も二人は相手を尊重しあい愛を紡ぎ誰もが羨む夫婦となった。

ある時を境に大高氏は本を持たずに来店するようになった。手にはビニール袋に入ったたくさんの十円玉を携えて。長電話をするためのようだ。こんな状況が続いたある日、磐梯熱海に十円玉を入れずに電話をかけたいと申し出た。十円玉が落ちる音は相手にも伝わる。自宅からはかけられない電話であることを寂しく思わせないせいでろうか。

由美子は、戸惑ったが今回限りと約束し電話を容認した。社員旅行と思しき外泊なのだろうか。数日すれば帰ってくるのはわかっている、遠方にいる彼女の声が聴きたくて堪らなかったのだろう……。

その日は突然やってきた。大高さんと妻、そして彼女の夫が来店したのだ。彼女の夫の知るところとなり、話し合いが持たれた。彼女の夫は興奮気味に、大高氏の妻は、感情を抑え冷静に話をすすめた。三つのコーヒーはただ冷めてゆくばかりだ。

やがて三者三様の思いを抱えながら店を後にした。外に出た由美子はもう大高氏は来ないだろうと思った。

翌週、大高君がコーヒー豆を持って訪ねてきた。由美子は話せることは特にないと伝えた。

「これはお父様のお気に入りだったカップです。どうぞお持ち帰りください」

由美子はそう言うと丁寧にタオルで包み小さな手提げ袋に

入れて手渡した。

大高君は深々と頭を下げ、礼を述べると立ちあがった。そして次の瞬間意外なことを口走った。

「また伺ってもいいですか。実は僕、月の半分は株を運用し、目的額が稼げたら、もう半分は売れない小説を書いています。内山さんと話していると、いい作品が書ける気がします。孝之君みたいに文章の達人になりたいと思っています」

由美子は哑然とした。

大高君を見送ると空を仰いだ。いつの間に青空を遠くに追いやり、白雲に薄墨を流したような空が広がっていた。北から渡ってきたのだろう初雁の群れが飛んでいる。

明日から研究すること

石塚 蓉子

公務員の村山徹は八歳下の幸子との二人暮らしだ。娘は結婚し息子はこの春社会人となって、二人とも家を出ている。幸子は結婚と同時に仕事を離れ、家事と程なく恵まれた子育てに専念してきた。

子どもが小さい頃には病氣や怪我、育つにつれて習い事や学校、進路のこと等、幸子からの相談を受けながら、家計のやりくりや離れて暮らす其々の親のこと等、どうにか夫婦で乗り越えてきた。一方仕事上ではスランプや不遇の時でも妻には一切語らずひとりで切り抜けてきたと思っている。

子どもたちが巣立って今五〇代も半ばとなり、時間的にも経済的にも急に余裕ができた。気がつけば定年はすぐそこまできている。定年後は何をしようか、休日などには時間をもてあまして考え込む昨今だ。

幸子は日々の家事はきちんとこなすが一人でいる日中何をして過ごしているのか、これまで殆んど考えたことはなかった。妻に対してあまりにも無関心だったと、徹はこの頃になつてやっと気がつく。

友人を招いたり誰かと出かけたりの様子も徹の知る限りではなかった。子どもが小さい頃はよく実家に連れていったり、大きくなってからは一人で老親の様子を見に行ったりはあったが、子どもや徹の帰宅までにはたいてい家に戻っていた。

徹の帰りは遅くなる日が多く家には寝に帰るだけという日々も少なくなかったが、幸子は文句を言ったり拗ねたりを直接夫にぶつけることは無かった。

思えばこれまで二人だけで旅に出たり何かを楽しんだという思い出が殆んど無い。これからは何か一緒に楽しもう、と徹はこの頃になって思うのだが、きっかけが掴めない。定刻に帰れるようになって夜のんびりしている時でも、夫婦の会話は弾まない。世の中の出来事やスポーツ選手の活躍話など妻に話しかけてみても大方は素通り、お気に入りドラマが始まる時間のほうが彼女には重要だ。所在なく徹は新聞などを手に取りソファーにゴロリか別室のパソコンに向かう。

何気なく開けたパソコンに大学からの親友野村からのメールが届いていた。「たまには近場の日光を歩いてみないか」という誘いだ。県内にいる他の二人を加えて男四人で年に一回か二回、日帰りできる近くの低山、たまに一泊で長野や新潟の山歩きを続けてきた。野村は卒業時は首都圏の一般会社に入ったが数年前に辞職して生家がある今市に蕎麦屋を構えた。この頃では彼が一番積極的だ。

今回はスペシャル版と野村はもったいつける。「初めて女性二人が同行してくれる、誰かは当日のお楽しみ」とある。「女性二人に無理のないよう、行先は馴染みの奥日光とした」と

日程と場所も勝手に決めてある。今年の暑さではもっと遅くにした方がいいのではくなんて、思ひはしても文句はつけられない。彼の誘いはいつもより強引だった。

九月最終土曜日、普段は駅待ち合わせだが今回は野村の店に集合だ。半年ぶりの再会に暑さに文句をつけながらも、互いの健康を確かめる。「他に誰が来るの？」と聞いてもまだ教えてくれない。

春の終わりにあった歴史民俗資料館の特別展の後、野村の蕎麦屋が近くにあると聞きつけて寄ってくれたと言う。男四人で続けてきた山歩きの話をして、思い切つて誘つてみたらなんと乗ってくれた。だから今回は御二人様の都合と希望が最優先だったとのことだ。

あれこれ野村をつついているうち二人が登場した。確かに覚えがある。学部は違いがサークルで一緒だった二人だ。二人ともすっきりとした都会的な女性になっていたが面影はしつかり残っている。徹にとっては卒業以来三〇年ぶりだ。

「お久しぶりです、お言葉に甘えてお邪魔しました」

女性たちには男たちの名前は野村からインプット済みらしいが徹たちには名前が出てこない。野村が得意顔で紹介してくれる。思いがけない再会をししばし喜んでから全員で野村がレンタルしてくれた六人乗りに乗り込む。最初から車頼みなんて久しぶりだ。

実は徹は片方の女性の下の名前はわかっていた。カオルさんだ。徹が初めて思いを寄せた人だった。サークル活動の中で、彼女の素朴な明るさに惹かれた。個人的な付き合いを望む前に、「彼女には既に特定の恋人がいる」と聞いて諦めたのだった。胸の中ではしばらく留まっていたが、卒業間もな

く彼女が結婚したと聞いてやっと完全に離れられた。

今本人を目の前にして、そんな自分の若さをふと思ひ出したが、彼女に対しての感情が今更掻き立てられることはなかった。それでも彼女の言葉や動きがいちいち気になる。

野村くん運転の車は人混みの明智平や華厳の滝を避けて半時間も経たぬうちに中禅寺湖へ。やはり下よりだいぶ涼しく、湖からの風が心地よい。湖畔を少し歩いて、少し早いけれどいつもより優雅に側のレストランでランチタイムだ。

女性に加わると話が弾み何となく華やぐ。それぞれの近況やらサークル時代の思い出話など、いくらでも話は尽きない。カオルさんは久喜で中学の先生をしているとか。こんな近くにいたんだと、何となく嬉しい。

食事の後は湖を左に見ながら奥日光へ進む。車は意外と少なくて、すぐに湯の湖へ。此処までくると湖畔に魚釣り人がちらほら、歩いている人は見渡す限り数人くらいだ。歩く気満々の軽装の彼女らの同意を得て、木陰続きの湖周りを一時間少々かけて歩く。他に人影なく、大声でお喋りしながらまるで二十歳の若者気分だ。

その後はさらに奥まった光徳牧場へ。牛乳ソフトを齧りながら低木の林の間を存分に愉しむ。

地元であつても徹にとつて日光は数年ぶりだ。山歩きではなくドライブの一日となつたが、連なる山々の遠景が懐かしく充分癒された。

いつもよりだいぶ親切な野村くんは今市ではなく宇都宮駅まで送ってくれる。連絡番号だけ取り交わして二人を見送つた後も男たちは誰も帰らず陽の落ちた街なかにくり出す。いつもの解散前のお楽しみタイム、今日は野村くんの慰労会に

なりそうだ。

男だけになって解散夕食会はいつも以上に盛り上がった。一人になって家に向かいながら初めてスマホを見る。珍しく娘からメールが来ていた。何時間も前のメールだ。「大変です、母さんが交通事故にあいました。すぐ帰ってください」

LR Tでと思っていたが、タクシードで急ぐ。幸子はベッドに横たわり娘夫婦が付いてくれていた。「どうして今頃？メール見なかったの」と娘に大声で責められる。

昼少し前に駅前の一つ手前の通りで後ろから車にぶつけられた。通りがかりの人が通報してくれて、警察が入り検査入院となった。娘と呼ばれたのはその後で、意識はしっかりしていた母は連絡先として娘の番号しか言わなかったらしい。

ちょうど娘の夫も家にいた時だったので二人で病院に駆けつけたが、検査の結果が出る間にいろいろ訊かれた。世帯主の所在を訊かれた時には言葉に詰まったが、婿さんが気を利かせて「仕事関係で今日は県外かもしれない」と口添えしてくれたと言う。

幸い幸子の負傷は骨にも内臓にも異常はなく全身打撲と言われた。一泊入院を勧められたが、帰っても宜しいのならとの本人の強い希望で、一休みしてから病院の車で送ってもらって少し前に家に着いたところだと言う。

「父さんに電話、と何度も言ったのだけれど、折角の楽しみの最中なのだから邪魔したくないと言って電話させない。父さん、休みの日くらい奥さん孝行しなさいよ」と言うだけ言って、娘たちはさっさと帰っていった。

両頬と後頭部を包帯で保護されて、幸子はぐったりと寝入っていた。顔をしかめて疲れ果てているように見えた。声

をかけても返事はない。痛み止めの治療が効いているのだろう、骨折でなくてまだよかった。徹は着替える気力もなく隣のベッドに座り込む。

今日一日浮かれ気分のまま、一度も幸子のことを思い出さなかった。以前から用のない電話は最小限にしている夫婦だったが、こんな時まで妻が最初に頼るのは娘だったのか。遊びの邪魔をしては悪いからうなんて、自分は幸子にとつて何なのだ。給料を運び一緒に寝ているだけの、頼りにならないただの同居人なのか。お互いこれからずっと一緒にいる価値があるのだろうか・・・。

夜も更けたが動く気にも寝る気にもなれずにぼんやりしている、ふと目を覚ましたかの幸子がこちらを見て呟く「あなたお帰りなさい」

途端に徹の堰が切れ涙が溢れ出る。「幸子、大変だったね。遅くなつてごめん。よかったよ、すぐ治るつて」徹は駆け寄りこわごわとカバーごと幸子を抱きよせる。

この声を聞くだけでいい。この声が聞けるなら自分は毎日元気に家に帰れる。自分はまだまだ幸子をわかつていない。明日からやることはまず「幸子研究」だ。

海女の筆筈

福富 陽子

主に手すき和紙や和紙細工を扱う店で私は働いていた。和紙を作る工房も店の裏手にあり、もともと私は和紙職人として雇われたが人手不足で店にも出ていた。小町通りに面していたその店には多くの観光客が訪れていた。

和紙細工の小物やインテリア製品などはとくに外国人に人気があつた。アメリカ人のビンさんは和紙を作品に仕立てる仕事をしていた。小さな作品だけではなく、時にはホテルのロビーを飾るタペストリーなども手掛け、外国では名の知れた和紙アーティストだと店主の椿さんから聞いたことがある。たまにビンさんも工房に来て和紙を作ることもあつた。

ビンさんが作り出す和紙は優しくて強くて、その和紙が欲しいという固定客もいた。でもビンさんは足が少し不自由だった。歩くのには支障はなかったが、杖をつくたびに大きな体を左右に揺らしながら歩かなくてはならなかった。昔、沖繩に住んでいた頃に船の事故で足首を骨折したのが原因だと誰かから聞いた。

椿さんから指示を受け、ビンさんに和紙を届けたり作品を受取りにくくするために私は自転車に乗り、鶴ヶ丘八幡宮を右手に感じながら観光客の合間を縫うようにして走つたものだ。

ビンさんは歳の頃なら五十くらいだった。ビンさんは日本語が達者で時には冗談を言つて皆を笑わせていた。

店主の椿さんもビンさんと同じような歳だった。店では、私と淳一君という二十歳の若者が働いていた。淳一君は椿さんの甥で、重たい和紙の原料を積んだ問屋の車が来ると意気揚々と工房に運び込んだ。コウゾやミツマタの皮を大釜で煮るのは淳一君の仕事だった。

ひとり暮らしのビンさんの家は、煉瓦と木が巧みに組み合わされた趣のある古い一戸建てだった。中古の家屋でビンさんが安全に住めるようにと、椿さんが改装の手配をしてくれたと、ビンさんが言っていた。

私が行くとたいいビンさんは庭に面したデッキに居て、大きな椅子に座り煙草を吸つたり新聞を読んだりしていた。呼び鈴を鳴らすと、「オーライ、カミン！」と、返事が聞こえてきた。

「百合さん、来てくれてありがとう」「百合さん、帰りは急ぎますか？」などと、まず名前を言つて話すのがビンさん流だった。

ある朝、椿さんから電話があつた。

「ビンさんが盲腸炎で入院したんだよ。百合ちゃん、様子を見に行つてくれないかな。夕べ遅く病院から電話があつて、すぐに駆けつけたんだが手術が終わった直後だったからビン

さんと話せなかった。僕も後で行くけど、今日に限って淳一も休みだから」

「わかりました。すぐ病院に向かいます」

「ありがとう。すまないね」

ドキドキした。とりあえず入院に必要なタオルやら歯ブラシやらを買って持っていった。

病室のビンさんは私の顔を見ると、子どもが母親を見つけた時のように嬉しそうな顔をした。私は思わずベッドの上のビンさんに駆け寄り、自然に抱き合った。

「百合さん、嬉しいです」何度もビンさんは言った。私は初めてビンさんのヒゲに触れた。

ビンさんは痛みのせいか顔色は良くなかったが、看護師の話だと術後の経過は良好だという。

二週間、私は仕事の合間に毎日病院に顔を出した。ビンさんの友人も来て外国語が病室に溢れていた日もあった。

ある時、ビンさんが聞いてきた。

「百合さん、アモノタンスという言葉を知っていますか？」
「アモノタンス？ わからないです」

「では、教えますね。沖繩にいたときに聞いた言葉です。海女さんが獲物を隠しておく場所のことです。その日の獲物が充分なときは、海の中の筆筒にその日に持ち帰らず仕舞っておくのです。海の底のチェストです」

午前中にビンさんを見舞にきた友人が沖繩に住んでいた頃の仲間だったという。その友人と沖繩の思い出話をしているうちに「海女の筆筒」を思い出したのだそうだ。

「海なのに筆筒なんて、おもしろいですね」

「ユーモアがあつて僕は好きです。沖繩では僕はマヤさんと

いう海女さんの家の隣に住んでいました」

一瞬、私の顔が歪んだのか、ビンさんは慌てて付け加えた。

「マヤさんは六十歳くらいでした。沖繩に慣れていない僕に毎日のように魚をくれました。でも、彼女を呼ぶ時『マヤさん』と伸ばして言うのと叱られました。沖繩ではマヤは猫という意味です」と笑いながら話すビンさんは「イタタタ」と術後の腹部を押さえた。私もつられて笑っていた。

「沖繩はハッピーな場所でした。でも、今はこの鎌倉が好きです。大好きです。なぜなら、ここには百合さんがいるから」ビンさんは照れた顔をした。

「私も、ビンさんが大好きです」と応え、顔を見合わせた。

私の「大好き」は本心だった。少し笑いながら言ったせいか、ビンさんへの告白は少し開けた窓から初夏の風に卷かれ飛んでいってしまった。そんな気がした。

その後も連日、ビンさんの友人が来てはしばらく雑談をしていく。ジョークも飛び交い、笑いが出では看護師に注意され、皆が一瞬神妙になる顔々が可愛らしかった。ビンさんは彼らに私をどのように紹介していたのだろう。

私が鎌倉を離れなければならなかったのはビンさんが退院してからすぐだった。

東京の下町で暮らしている父が脳梗塞で倒れた。ひとり娘の私が父を看ないわけにはいかなかった。父は言葉を失い右半身にも麻痺が出ていた。これからは父ひとりで生活するのは困難だとわかった。

椿さんが時々電話をくれる。

「ビンさんが百合ちゃんを心配しているよ。たまには電話を

かけてみたら？」と椿さんが言ったことがある。私もピンさんと話したい気持ちでいっぱいだったが、自分の現状を話したらピンさんにさらに心配をかけてしまうのではないかと、電話はできずにいた。

父を見るだけの日々。いつそ父を鎌倉に転院させる考えもあったが、現実的でないとなっていた。

その後、リハビリ施設も備えた病院に移ったが、容体が良くなることはなく、結局、八カ月後に父は帰らぬ人となった。私は混乱の中、墓のことや相続のこと、いろいろな手続きに翻弄されていた。

昔、都市開発計画が噂され始めた頃、子どもの私は不安だった。「家がなくなるの？」そんなことを母のエプロンを引っ張りながら聞いたことがある。思い出したら涙が出てきた。豆腐売りのラッパも聞こえなくなった路地には、もう野良猫さえいない。結局、都市計画地区からうまいことはずれて大喜びしていた祖父母、両親。「この界限は残る」と近所の人たちも喜んでいた。そんな周りの人たちも年月とともに命を枯らしていく。数年前に母も逝ってしまった。心の拠りどころとしていた父までも。家族がいなくなった喪失感と同時に、今度こそ故郷を失くした難民のような気持ちになっていた。鎌倉には戻らず、誰もいない実家であううつと日々をやり過ごした。生きる力さえ失くしていた。

父の四十九日を過ぎた頃、私は人の紹介で見合いをした。この世でひとりぼっちの感覚がじわじわと私を震えあがらせていた。無性に「家族」を切望した。

悪寒がするほど孤独が恐かった。

縁談はすんなりまとまった。父の一周忌が済んだ後、私は結婚した。区役所勤めの夫との間には、じきに双子の息子たちが生まれ、その二年後には娘を授かった。

三十年という年月は私を変えていた。変えられない想いは忙しきで紛らわしてきた。鎌倉での思い出やピンさんへの想いは、胸の奥底の筆筈へ。――仕舞い込んだまま。

子どもたちは健やかに育ち、すでに社会人である。

定年退職した夫が先日、鎌倉を散策しに行こうと言いついて。今までも鎌倉の町を妙に避けてきた私の胸の内を夫は察していたと思う。椿さんにも、淳一君にも、きちんと別れを伝えていなかった負い目もあった。そして、なによりピンさんに。彼は今もひとりで暮らしているのだろうか。

鎌倉に出かけた日は五月の風がやわらかく吹いていた。

久しぶりに見る和紙の店はカフェを増設して賑わっている。椿さんが仕事をリタイアした後、甥の淳一君が店を引き継いでいると椿さんからのハガキで知っていた。でもそこにはピンさんについて何も書かれていなかった。

「入らないの？」夫は聞いてきたが私は首を横に振った。店内を覗いたが淳一君の姿を捉えることはできなかった。

小町通りは私の知らない通りになっていた。

「行ってみたい場所があるの」私は夫の先を歩き出した。見覚えのある家並が記憶を甦らせてくれる。歩きながら思わず涙が溢れそうになった。住宅街をひたすら往く。あの頃のように胸が高鳴った。路地の突き当りを左に曲がればピンさんの家がある。――ある、はずだった。

そこはアスファルトで固められた駐車場に変わっていた。

天満月の肴

阿久 純

通勤の復路、二キロメートルほど真つ直ぐな道を自転車で通る。低い建物が立ち並ぶ屋根の上に現れる月は赤く大きく膨らんでおり威圧的だ。夜の帳に覆いつくされる頃には、レモン色のすまし顔に戻り煌々と輝いている。

道の途中の寂れたやきとり屋の駐車場に自転車を止め、ぼくは店に入らず香ばしいやきとりの匂いを肴に月を眺めていた。

「中秋の名月ね。元氣だった？ 七森君」

「中野？ 中野流花さん？ 憶えていたんだね」

「本日の月は暗紅色が一段と不氣味でいいね。こんばんは、安吾君、中野さん」

「奈良？ 本当に奈良なんだな。会えて嬉しいよ」

「ご無沙汰、奈良理久君」

中野流花さん、奈良理久君に会うのは十年ぶりだ。再会できる日を待ちわびていた気持ちを知られるのが恥ずかしくて、大人びた態度で挨拶を交わす。緊張した空気を一変させたのは奈良だった。

「ひとまず観賞といきますか。十年後の今日に感謝して、満月会開始！」そう言う奈良は右手のひらに黒で書かれた大きな丸をぼくらの目の前に挙げ開始の合図をした。

ぼくも中野さんも恥じらいながら手のひらに書いた大きな丸を二人に見えるように挙げ月を仰いだ。

中野さん、奈良君は中学時代の同級生で中二の時のクラスメイトだ。出席番号が隣同士だった為、係など一緒になることが多かった。仲が良いというわけではなかったが、ある出来事がきっかけで大切な仲間になっていった。

ぼくは十歳から父子家庭だ。もともととは父、母、妹が居た。九歳の時に版画家の父が版画を刷るための数千万もする最新の印刷機の契約に騙され、借金を背負う羽目になってしまい愛想を尽かした母が妹を連れて出て行ってしまった。それまでも度々、女性関係で問題を起こしたり、版画講師を短気が原因で度々辞めてしまったりと問題のある父だった。

母が出て行った当初は自分の好き勝手にできると楽しんでた。二・三日したら帰ってくるだろうと考えていたからだ。だが、一週間、一か月、一年たっても母は帰ってこなかった。父がぼくの面倒を見てくれる筈もなく生活は荒んでいった。好きな駄菓子ばかり食べて栄養失調になり死にかけた経験もある。衣服も薄汚れていた。ある日クラスの女子が「安吾の服汚れてるよ、なんか匂う」って言われて初めて洗濯をしながらいやいやと気付いた。

言われて傷ついたが、女子の清潔に敏感なところは衛生上必要なことだと思う。

父はたまにしか帰宅せず久しぶりに帰って来ても泥酔して

おり、ぼくが呆れ顔でいると、ぺたんこのスリッパを履いてふらふらと出て行く。酒を飲むと恥だらけの自分だと大声で自嘲した。毎度飽きずによくやるなあとぼくは無関心を装っていた。

忘れもしない中学二年の五月、全校生徒による合唱コンクールの予行練習が体育館で行われていた。当時ぼくは中野と奈良の三人で準備の手伝いの為ステージ端に居た。そこへ酔った父が現れ大声で喚き散らし先生たちを困らせた。

ぼくは「うわ！ おやじ」と声が漏れ、ぼくに気付いた二人が労わるように「危急存亡だぜ」と奈良がぼつり。

「うん、危急存亡だね」と中野がぼそり。

「危急存亡……」ぼくも最近習った四字熟語を鸚鵡返した。

この父親乗り込み事件後、ぼくは生徒や先生から避けられるようになったが、逆に中野と奈良との関係は親密になっていった。

中野流花は長く伸ばした前髪で顔を隠している。第一印象は陰気な印象を受けるが切れ長の目を持つ綺麗な女の子だ。母子家庭で、母親は何かの宗教の幹部だということだった。

全ての病気に効くという組織独自の製法で製造した石鹼を母親は売り歩いているとのことだった。石鹼は何万円もする高価なものだという。学校では「流花ちゃんに近づく」と宗教の勧誘を受ける」と噂が広まっており、ぼく同様、中野も先生や生徒から避けられていた。

奈良理久は三人の中では明るい存在だ。家族は父親、義母、義姉、弟、ばあちゃん、姉とは血縁関係がなく、奈良の父親と再婚した義母が連れて来たようだ。

奈良の義母といえどこんなエピソードがある。学校の昼飯

の時間に奈良の義母がやって来て、息子の弁当にデザートを入れ忘れたから持ってきたとのことだった。奈良は「うちの母ちゃん弁当作った事がなくせに、デザートへの執念半端ねえんだわ」と、面白いことを言っていた。

父親事件が転じて二人と仲良くなっていた。

それからぼくらは晴れた満月の日の夕方五時から九時まで近くの公園に集まっては他愛もない話をした。夜になったら満月の光が明るいからだ。この集まりを「満月会」と呼ぶようになった。

「マンマ・ミーア！ 赤い宵月だ。ドラキュラ伯爵が出てきそうだな」公園の遊具に登った奈良が言う。

茜色の異様な不気味さと丸く太った大きな月に息を呑む。月をただ眺める。公園の木々を揺する風の音とぼくらの呼吸がシンクロし始め、宇宙の生命の流れに溶け込む。魑魅魍魎が出てきそうな朱色の月はやがて見事な天満月になった。

「中秋の名月……。お団子食べるんだよね？」静寂を破ったのは中野だった。

「保育園の時のお月見会で食べたなあ」ぼくは昔の記憶を思い出していた。

「お月見の時ってやきとりじゃないの？」奈良が聞いてきた。

「お月見は団子でしょ。でも、やきとりも美味しそう。お腹すいたなあ」ぼくは答えた。

「やきとりっていえば、七森の家に行く途中にやきとり屋あるよね？ 七森は食ったことある？」

「いいや、いつも匂いだけでもらって帰る感じ。それにあそこは飲み屋でしょ？」

「そうだ！ 今日という記念に十年後の中秋の名月の日、七

森君の家の近くのやきとり屋で月を愛でながら成人のお祝い
ついでにビールとやきとり会しようよ。店で待ち合わせて
ことで！ 十年後の約束。どうかな？」

「中野、冴えてるねえ。十年後の約束、かっこいいなあ。良
いね！」と、奈良も賛成した。

「再会した時分かるように何か目印つけようよ」中野が言う。

「そうだな。満月会だから……。手のひらいっぱい黒のマ
ジックで丸を書いてくるのはどうかね諸君」奈良が言う。

「シンボルの満月だな。いいな」ぼくは賛成した。

「グッジョブ！ 奈良君」中野も同意した。

空の雲が勢いよく流れ肌寒い風が吹いてきた。夜空の月は
素っ気なくぼくらを見下ろす。

ぼくは次の満月会が待ち遠しかった。学校は相変わらず独
特の世界で毎日モノクロームに過ぎていった。

今も忘れないバナナ三日月の日。学校の先生や生徒が騒然
としていた。駐車場にはパトカーも止まっている。

「七森君、七森君、ちょっと」柱の陰から中野が手招きをし
ていた。

「中野、外が騒がしいね」彼女とは久しぶりだった。九月は
イベントが多く奈良も最近顔を見かけていなかった。

「大変。奈良君のお母さん捕まっちゃったんだって」

「え！ 捕まった？」

中野はため息をついて、「覚せい剤だつて。奈良君を生む
前にも何度か捕まった事があるみたい。先生と警察が話して
いるのを聞いてちゃった」

「奈良は？ 奈良に会った？」

「校舎に入る前に先生たちが連れて行った。奈良君は下駄箱
のところにいる私に気付いて、腕を高く上げ開いた手のひら
にマジックで大きな円が描かれていたよ……」

そこへぼくらの会話を邪魔するかのよう放送のチャイム
が鳴り響き「生徒の皆さんは各教室に集まって下さい。本日
はこのまま下校になります。繰り返します……」と、放送が
流れた。中野は少し俯き、真剣な眼差しで話し始めた。

「七森君、こんな時に自分事で悪いんだけど、私、転校する
ことになった。準備にすぐ帰らないといけなくて、毒母親と
離れる決心がついたの。十年後に話すから、十年後の約束忘
れないでね」中野はそう言う、手のひらに書いた丸を見せ
てくれ、ぼくらは握手を交わした。

奈良はパトカーが来た日から学校に来なくなり、中野もあ
れから本当に転校してしまった。

やきとり屋の駐車場でぼくらはしばらく月を仰いでいた。
店の入り口の軒先に十年前と変わらず「やきとり」の文字

が入った赤ちようちんがついていた。

「とりあえずお腹すいた。ふふふ」中野は微笑んでいる。

「店に入ろう」

ぼくは目頭が熱くなり、急いで二人を店の中へ誘導し、素
早くシャツの袖で擦った。頬をぼんっぽんっ二度叩き、両
手で頬を包み口角を思いっきり上げた。

やきとり屋の暖簾をくぐる瞬間見上げた月は地平線から頭
上にだいぶ昇り、いつもと変わりのない素っ気ない表情を見
せていた。

窓際の椅子

島田 トミ子

初夏の日曜日の朝、私はいつもと同じように目覚めた。薄地のカーテンにはすでに白く澄んだ空気が届いている。間もなく日の出だ。

今日は朝の七時から自治会の清掃の日だ。班内の道路に落ちている缶やごみを拾い分別をして袋に入れ、ごみ収集場所を集める作業である。一時間ほどで終わる。今回は夫の私が行くことに決めていた。妻の澄代はまだ起きてこない。

二十戸が一つの班になっているが、全戸が集まるわけではない。いつも六、七軒の家は不参加だが、それも仕方ない、病気をはじめそれぞれに事情を抱えているためだ。配偶者の介護で家を空けられない人もいる。

この日の掃除作業に私は精を出してやってはいたが、頭の中は再来週の日曜日に予定されているシルバーライフクラブの座談会のことになっていった。第二班の山下君と一緒に座談会の進行をする当番である。ふたりで打ち合わせをして、テーマを決めていた。果たしてどうなるか、心配しながらカレンダーを見ていた。

公民館では地域の各種グループの自主活動を積極的に育成してくれている。

私は、勤め先を定年退職した次の年から自主グループの「エンジョイシルバーライフクラブ」の会員になった。登録して

いる会員は三十名ほどいる。毎月一回の活動には休まず参加している。

活動内容は屋内のものだが毎年春には近くの公園までのハイキングがある。座談会も何回か計画されているが、要はおしゃべりの場である。当番は参加者が話し易いように最初に話題提供をする。山下君と私は終活のことの口火を切ることにした。会員の年齢は六十代後半から八十代後半までで、親子の年齢に近い人もいる。

自分の終末までどのように生活するか、精神的に、経済的にと、当番者としてはそんなことから話してみようということになりレジュメを作った。

私が住んでいるこの緑ヶ丘団地は、栃木県矢板市の郊外にある。高原山のなだらかで美しい稜線が手に取るように見えて、眺望の良い所である。元は広大な平地林であったが、近くには工業団地が集積していることから、それらの従業員のベッドタウンとして昭和六十年に民間の大手開発会社が造成した住宅団地である。二期に分けて造られたが私は第一期の売り出しの際に購入した。私はこのとき三十二歳、結婚して三年目で二十九歳の妻はちょうど妊娠中であつた。貯めたお金はわずかではあつたが、借金をしてでもよい、半年でも一年でも早く自分の土地と家を持ちたかつた。妻と二人それぞ

れが借りられる最上限の金額をローンとして組んでささやかではあったが自分の城を持った。

それは、私自身に課せられた命題があったからである。

「雄三よ、お前は兼治と同じように、学校を卒業したらさっさと家を出るんだぞ。そのあととはどこかに土地を買ってそこへ家を建てるんだ。この家は成一郎が後を継ぐ」

私が小学校へ入る前から祖父父母と父母と四人からそう言われながら育った。三つ違いの賢治あんちゃんと同じにということとは、長男ではなく、二番目、三番目の男児として生まれてきたからだ、いつの頃からだろう、深い意味は分からないが形だけは理解していた。

「ねえ、俺たちはいつごろ家を出るの？」

「中学校を卒業してからでも、高校を終えてからでもいいんだ。自活ができるならばな」、「ジカッ?」、「そうだよ、自分で働いたお金で生活することだよ」

「じゃあ大学へ行くとしたらそのあとでもいいの?」

「もちろんそれはいいのさ。雄、お前、真剣にそんなこと考えているのかい、偉いなあ。だって、考えてもみろよ、そんなことバカバカしいことだよ。自分で生まれる順番を選んだわけじゃないんだぜ」

中学生の賢治あんちゃんは、小学生の私が訊くたびにからかうように笑い、二人の歯車は全くかみ合わなかった。長兄の成一郎は七歳離れていたのでもそんな会話をしたことはなかった。

座談会当日、男女で二十四名が参加した。参加者の家族構成はいろいろだった。すでに配偶者を亡くした单身者、高齢の夫婦二人だけ、夫婦と未婚の子どもという人、三代代暮

らしている人、などである。

参加者それぞれが最近気になっていることを話せる範囲で発言した。

「俺は葬式費用だけ残しておいてあとは好きなようにつかうよ」、「退職したからと言って、生活を変えるのは難しいね」、「年金だけでは厳しいわね」、「かと言って子供に生活費をくれとはいえないからなあ」、「夫婦のことね」

ああ、誰もが同じようなことを考えている。私も共感しながら時々口を挟んだ。

「まだ自分のお墓を買っていないのでそれが目下の課題です。子どもたちも家を離れて行ってしまったしどうしたものか」、私は言った。すると発言が相次いだ。

「俺もまだだ。でもほら、樹木葬とか合同の墓とか後継者がいなくてもこれからは大丈夫だよ」

「遠いと先祖の墓参りも大変だなあ、行けないし」

「この前、樹木葬の場所を作ったと、観音寺が新聞にチラシを入れていたよね。今度見に行こうと思うんだ」

墓のことで話が盛り上がってきた。

部屋の窓側の椅子に座って、それまで黙って聴いていた八十六歳になる倉敷さんが発言した。

「何だいみんな、墓が大変? 墓が厄介なのかい。そりゃあ、さぞかし大変なことだな。俺は今八代目だから仏壇の中はご先祖様の位牌でいっぱいだよ。家を継いだ者の大切な役目だと思って守ってきたんだが」

みんな墓のことで熱くなった部屋の空気が一瞬にして冷め、流れが止まったようだった。みんなの口も閉じ暫くの間沈黙が走った。

「あれ、俺何か悪いことを言っちゃったかな。すまん、農家に生まれてしまったばかりに、自分の役目だと、今日まで生きてきたが」

「ご長男だったからでしょう?」

「本当は農業が嫌だったの? それを親には言ったのですか?」何人かが倉敷さんに質問をした。

「厳しく難しい質問だね。そうだ、確かに俺は長男だった。親ともいろいろあったよ。やりたい職業もあったさ。でも誰かがデンパタ守らなくちゃなんねえし、親も看なくちゃなんねえべ、墓守もしくちゃなあ」

私は複雑な思いでその発言を聴いていた。倉敷さんに対して何か言うべき?。そう思つて「生まれた順番は自分では決められないし。お前は三男だから学校が終わったら早く家を出ろ、と言われて育ちましたよ、私は」と、つい昔言われていた内容を話した。

那須に在る自分の生家の長兄、成一郎の姿が浮かんできた。長い期間、いつも黙つて、日焼けした顔をしながら義姉さんと一緒に働いていた。数年前から脚も腰も弱り甥夫婦が中心になつて営農している。私の目が潤み窓際の倉敷さんの輪郭が歪んできた。まずい。

両親と同居して家を継ぎ兄弟や親戚のことまで視野に入れて農業をやつてきた長兄。「新米ができたぞ、取りに來い」、大根が、白菜がと、いつも親族のことをも気に掛けていてくれる。自分の立場をどんな風に思っているんだろう。大学の四年間だけ家を離れた兄。高齢になつた成一郎に、なんだか父親にも似た気持ち湧いてきているのを強く感じた。そして今、倉敷さんの姿と重なつた。

座談会で、これといった結論はなかったが、誰もがよく喋つた。帰り路考えた。自分の墓をどうするか、候補地を見て歩こうと思つた。もちろん妻と話し、二人の子どもと相談するのが大前提であるのだが。

三人の女

永井 想

第一高校の担任、杉田と申しますが、加奈さんのお母様の携帯でよろしいでしょうか。加奈さん、まだ学校に来ていないのですが、どうされましたか。

は？ 娘はいつも通りに家を出ましたが……。

仕事中、カオルの携帯電話に連絡がきたのは、つい数分前のことだ。

家を出たのは確かなのに、まだ学校に着いていないなんて何かの間違いではないか。加奈の携帯に電話を試みたが繋がらない。登校中に何かあったのだろうか。血の気が引いた。カオルは会社に暇をもらい、急いで家に帰った。リビングにも、可奈の部屋にもトイレにも、何処にも加奈の姿はない。いよいよ不安に押しつぶされそうになる。事故なら連絡が来るさうだし、まさか連れ去り？ ネットでのトラブル事件も頭の中を駆け巡る。

加奈は一体どこにいるのだ？

玄関の外に出てみると、通学用の自転車が見当たらない。学校までの道をたどってみようか、カオルは再び車のエンジンのかけた。

公園にある大きな池に、突然、噴水が立ち上がった。留ま

らない水の動き。ボートとしていたときには、ちようどよい目のやり場だ。日差しを受けて煌めく水が、ひとつ塊となって水面から飛び出せば、落下するときには散り散りの飛沫となって再び池の水の一部になる。

この池は無数の水飛沫の集合体か？ そう思った途端、加奈は身震いを起こした。

制服のポケットに突っ込んだ冷えた手に、電源を切った携帯電話が触れた。驚くほど冷たくなっている。

昨日は遅刻しそうになりながらも何とか学校に行った。でも、今日は昨日よりずっと身体が重くて、公園のベンチからなかなか動けないでいた。

友達ともまあまあ上手にしている。高校は授業数が圧倒的に多くて大変だが、周りのみんなも同じように受けているし、文句を言うつもりもない。ただ、なぜこんなにも気持ちが悪くなるのか、自分でもわからないのだ。

「はあ、くたびれた」

加奈が座っているベンチの端に、杖をもったおばあさんが、よいしょ、と小さい声を漏らしながら腰を下ろした。

「もうこんなに日が高く昇ったのに、今日は冷えるわねえ」

「……そうですね」

おばあさんは自然に話しかけ、巾着の中から飴玉を出した。

「どうかしら、飴。舐めるといいの。気分転換」

手のひらにあるのは、葡萄味のシュワシュワするタイプの飴だった。（このおばあさん、飴の好きがかわいい）そう思いながらお礼を言って受け取り、口に入れた。おばあさんもひとつ取り出して口に入れる。

「寒いけど、いいお天気ねえ。今日は学校お休み？」

加奈は赤面した。平日の日中にひとり公園にいるのだから、不審に思われて当然だ。

「いえ、学校はあるんですけど……ちよつと今日は」

加奈は耳まで真っ赤になった。

「まあ、そうなの。行きたくない日も、あるわよね」

おばあさんはだからといってなんでもないように、今舐めている飴の包み紙を見た。

「この飴、リンゴ味。美味しい。あら？ 何だかシュワシュワするわねえ」

加奈は思わず吹き出した。おばあさんの好みが若くてかわいいと思ったけれど、何だか分からずに買っていたのか。

「そうですね、シュワシュワして美味しいです。わたしのは、葡萄味」

「まあ、そうなの」

二人は「ふふふ」と笑い合った。飴の炭酸が噴水の水飛沫と重なって、おばあさんと繋がった気がする。こういう「集合体」なら悪い感がしない。加奈は気持ち少し軽くなった。

カオルは運転しながら必死に加奈を探していた。学校までの道のりにはいなかった。もはやどこを探せばよいのか見当もつかず、途方に暮れながら赤信号で止まっていた。

「はあ……」カオルは凝り固まった肩を揉んだ。このところ仕事が忙しくて、気を抜く余裕がないのだ。

そのときカオルはフロントガラスの向こうに目を凝らした。間違いない、加奈の自転車だ。

口の中に飴が無くなっても、加奈とおばあさんは並んで噴水を眺めていた。何処の誰だかわからない、たまたま出会った人だが、隣で静かに座っていることが心地よい。

「こんなにゆつたりしたのは久しぶりです」

「まあ、そうなの？」

おばあさんの口癖の「まあ、そうなの？」は、いつも心からの「まあ、そうなの？」で、こちらに新鮮に届く。

加奈は、高校生活に順応するのに精一杯で、おばあさんのように素直に自分の心を動かすことが、最近ないなと思った。早足で公園を歩き回っていたカオルは、ついに加奈の姿を見つけた。

「加奈！ ああ、本当によかった」

安心して気が緩み、ようやく深い息が吸えた。次の瞬間、カオルはムツとした。無事でさえてくれたらいい。との思いは吹き飛び、（こんなところで呑気に何をやっているのだ？）と、怒りが湧いてきた。（わたしの貴重な仕事の時間を一体どうしてくれるのよ）と歩幅に怒りをぶつけながら乱暴に近づいていった。

あと一、二メートルもすれば可奈の背中に手が届きそうなとき、老女の声が聞こえた。

「まあ、そうなの。ゆつくりする暇もないなんて、いまの若い人たちも大変そうねえ。あたしが女学生の頃もね、大変だった

た。戦争中でねえ、授業なんて無くなっちゃって、戦いに行つた男の人の代わりに働かされたわ。防空壕作りに行かされたり、人手不足の農家の手伝いに行かされたり。だからね、勉強なんかはさっぱり。惨めな学生時代よねえ」
カオルは声をかけるタイミングを逃して、ベンチの後で立ち止まった。

「でも、こんなおばあちゃんになつてみるとね、時代はどうあれ一生懸命生き抜いた、と思うわけ。失敗しても、やりきったことには後悔ないのよ。あなたもね、毎日の大変でしようけど、気にするのは自分の声。ちゃんんと聞いて、やりたいことをやればいいのよ。あなたの人生だもの」

おばあさんの言葉は、カオルの心にストンと落ちた。

そうだ。たとえ親子だとしても加奈とは別々の人間だ。カオルがいくら仕事で忙しく余裕のない日々でも、加奈の人生は関係なく進んでいく。加奈なりの歩み方で。

カオルは思った。母親って、何をしてあげられるのだろうか。逆に加奈が望むことは何なのか。考えれば考えるほど、加奈はもう幼い加奈ではないという現実を突きつけられる。張り詰めていた思いと、加奈が遠くに感じる気持ちとが混ざり合つて、カオルの目から涙がこぼれ落ちた。溢れた涙は収拾がつかなくなる。

「お母さん！」

驚いたのは加奈だ。背後ですすり泣く声がしたので振り向くと、そこで母が泣いていたのだ。

少し落ち着いたカオルを挟み、三人はベンチに座った。

「お母さん、名前は何とおっしゃるの？」

「カオルです」聞かれた加奈は母の名を伝えた。

おばあさんは鼻の頭を赤くしたカオルの顔を覗き込んで、「カオルさん、あなたもきつと、大変なのねえ」
気の毒そうに言う。

「でも、あなた若いからいいわ。歳をとるとね、不自由なことが増えていくから。……だけど、不自由さの中で生み出す自由って、格別なのよ」

おばあさんは少女のような笑顔をしてみせた。

加奈は、母がこんなに泣くのを初めて見た。他人に「カオルさん」と言われているのも珍しかった。

ここにいるのは、それぞれ「三人の女」。客観的で不思議な感じがした。三人とも、自分を個々に生きて、今ここでシュワシュワした飴のように繋がって「集合体」になっている。人の心は、いつでも繋がったり離れたり繰り返すのだ。

こちらに向かつて、またひとりの女が歩いてきた。髪を振り乱し、ものすごい剣幕をしている。

「お義母さん！ んもう、勝手にいなくならないでください。心配したんだから」

「……まあ、恭子さん、ごめんなさい」

「あらいやだ！ 飴は喉に詰まるから危ないって言っているでしょ」おばあさんは、あれよあれよという間に連れていかれてしまった。

「確かに……不自由の中の自由は格別だね」

二人はベンチにもたれかかった。

加奈はおばあさんとのシュワシュワな「集合体」を思う。おばあさんは離れていき、いまは母と二人の「集合体」だ。大人同士のちよつとした距離感を母の「カオルさん」に感じる。悪くない。

遊行柳

寺崎 暁生

それまで騒がしかった蛙の鳴声がふと止んだ。誰かの呼ぶ声で芭蕉が床から起き上がると黒い影が部屋の外に蹲っていた。

月が差し込む障子の明かりに浮かび上がった人影は、墨染めの衣で菅の小笠を被った僧形のものであった。徐に障子が開けられた。月が人影を闇の中に浮かび上がらせた。

「もしや西行法師では？」

芭蕉は己の言葉を半ば信じられずに上擦った声で尋ねた。僧は小笠を外し脇に置くと縁に座ったまま徐に口を開いた。

「芭蕉よ、お主が私の跡を慕って旅に出たとは風の噂で聞いたが、私の旅がどのようなものであったかお主に分かるのか？」

「法師が二度みちのくの旅に出たと承知しています。若い時分の旅は出家されて間もなく、先人能因法師の跡を慕ってその歌枕を訪ねられた。年老いてからの旅は源平合戦のみぎり、平清盛の命を受けた平重衡らの軍勢によつて焼かれた、東大寺大仏殿の再建のために重源上人の約諾を請け、東大寺料の砂金を勧進せんがためと聞きました」と芭蕉はやつと答えた。

僧は目を閉じて感慨に耽っている様子であったが、再び徐に口を開いた。

「表に現れている事柄は確かにその通りじや。だが、心の奥底にはもつと必死なものがあつたのじや。そうでなければ何故生きて帰れるかどうか知れないみちのくへ二度も行かれようか」

「もつと必死なもの」と芭蕉がなぞると僧は、

「それはわしの口からは言わないでおこう。この旅でお主が何を掴むかをわしは見守っている」とふつと月明かりにかき消えるようにいなくなつてしまつた。

僧の座っていた場所にはただ風が通るばかりであつた。芭蕉は夏だというのに身震いがして立ちあがつた。

隣の部屋に寝ていた弟子の曾良が眠そうな目をして、

「お師匠様、どうされました？ 何やら人の声がしたような」と部屋に入ってきたが、ただならぬ気配を感じたのか、

「何か曲者でもおりましたでしょうか？」と身構えた。

「いや、曲者ではないが、不思議な僧がいたのじや」と立つたまま芭蕉が今の出来事を話すと、曾良は恐ろしげに後退つた。

「お師匠様、お氣をつけくださいませ。今日見物した殺生石、元は金毛九尾の狐とのよし、その祟りではありませんか？ 石の毒気で蜂や蝶が夥しく重なり死んでいたのがまだ目に残っております。明日、お祓いをして頂きませんか？」

「そなたの心配は尤もなことだ。だが、私の先達西行法師に会えたのだ、地獄に落ちても悔いはない。うん、何やら心が騒ぎ眠れなくなってしまった。一風呂浴びてくることにしよう」

芭蕉が手拭いを手に温泉にいくとすると曾良がすかさず、

「物の怪がいけないとは限りません。私もついて参ります」と後に従った。曾良は既に二度湯に入っていた。

いつの間にか蛙がまた鳴き騒いでいた。

元禄二年（一六八九）三月二十七日（陽暦五月十六日）、四十六歳の芭蕉が五歳年下の弟子の曾良を伴って『おくのほそ道』の旅に出てから既に二か月が経過し、その日は那須温泉の宿、五左衛門方に宿泊していた。

湯から戻り、江戸から携えてきた西行の『山家集』を行李から取り出し正座した。行灯の灯はまだあった。

芭蕉は文字を指で辿っていったが、それが『恋歌』の部で止まった。夥しい恋歌が綴られていた。それは芭蕉も知っている待賢門院への秘められた思いを詠んだものに思われた。

その様子を行李の中身を整えながら見ていた曾良に向かつて芭蕉が語り始めた。曾良もその前に正座した。

「西行法師が一度目のみちのくの旅に出たのは二十七歳の頃で待賢門院が崩じた年らしかった。多分法師はひたすら悲しかったに違いない。待賢門院は幼いころ、白河法皇の養女として溺愛され、鳥羽天皇に入内した時には法皇の胤を宿していたと噂された。この秘密を知った鳥羽天皇は血の繋がらないと思われたその皇子を「叔父子」と呼んだという。皇子は法皇の意向で五歳の時、二十一歳の鳥羽天皇の後を受けて崇

徳天皇として即位した。だが、法皇が世を去り、美福門院得子が鳥羽院に入り寵愛を得て皇子を生んだことを契機として、待賢門院は鳥羽院から遠ざけられた。その頃だ、法師が出家したのは」

「何故、西行法師は出家したのですか？」と曾良が尋ねた。

「そう。若き法師、俗名佐藤義清は鳥羽院の北面の武士であるとともに、待賢門院の兄である左大臣徳大寺実能に仕えてこれら醜い争いを間近で見てきた。そして右するも左するもままならない立場に追い込まれていったのではないだろうか？法師の出家の原因の一端はこの争いにあると思う。その後、鳥羽院に疎んじられた崇徳天皇は諂られるように弟の近衛天皇に位を譲った。間もなく待賢門院は仁和寺法金剛院で落飾した。

法師はそこにしばしば訪れて待賢門院を慰めており、その女房たちと歌を詠み交わしている。待賢門院は三年後崩じた。その十一年後鳥羽院が崩御すると崇徳院は兵を挙げたが敗れて讃岐に流された。保元の乱だ。崇徳院が敵方に投降した仁和寺に馳せつけて院を見舞ったのが他ならぬ法師だったのだ。僧形なら味方にも敵方にも行くことができたからな」

芭蕉の語りで曾良の眠気はいつしか吹き飛んでいた。

四月二十日（陽暦六月七日）、霧の朝、芭蕉と曾良は五左衛門方を辞して芦野の里へ向かった。漆塚まで三里余り、そこから芦野の里まで二里余りあった。湯本からの下り道には難渋したが、西行の詠んだと謂われる遊行柳を見ることができると思うと芭蕉の気は急いた。それに比べ、三度も温泉に浸かった曾良はやや湯あたり気味で遅れがちであった。

「お師匠様、待ってください」とやとついで来た。

「曾良、わしも昨夜はなかなか眠れなかった。だが、遊行柳を見ることのできる喜びが勝つてこうして歩いている」

「それはこうしておられませんか。何とかついて参ります」と曾良は歩を早めるのであった。

芦野の里は那珂川支流の奈良川の東岸にあり、北に奥州街道が続き、東南に芦野城が立つ開けた所にあり、街道の宿駅として旅籠なども多数あり、芦野氏の城下町として栄えていた。

遊行柳はほぼ真北に位置する鏡山の麓にある温泉神社の参道の中程にあった。二人は昼前にその前に立つことができた。

柳は、芭蕉の来訪を待ち焦がれていたかのように風に枝を打ち鳴らしていた。芭蕉は西行の和歌を口ずさんだ。

道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちとまりつれ

曾良よ、これが西行法師が詠まれた柳じゃ。我等を待つてくれていたようではないか」

「見事な枝振りですね。やはり噂どおりの柳です」と曾良も目を見張った。二人は側の石に腰を下ろした。

「室町時代、時宗十九代尊酷上人がこの地を訪れた際、柳の精の老翁を念仏で成仏させたという伝説があり、それが謡曲『遊行柳』になつたのだ」と芭蕉は曾良とむすびを頬張りながら説明した。

東に田植えをしている若い女たちの姿が目に入った。女たちは膝下まで泥水に浸かり一列になって苗を植えていた。芭蕉の目には一心不乱に苗を植え続けている女たちの姿が眩しかった。女たちの白い脛脛に泥が跳ねたのか黒い点々が見えた。

「もう少しで昼だ。気張つてな」と年配ぎみの女が皆に声を

掛けていた。女たちに騒めきが起こった。芭蕉は軽く微笑んだ。

「法師がどのような思いであの歌を詠んだのかやつと分かった。それに武士を捨ててもなお雅な世界に留まり続けた法師の歌と私の俳諧では進む道が違うということも分かった」と芭蕉は曾良に語りかけた。

世を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ

世の中を捨てて捨てえぬ心地して都離れぬわが身成けり
世の中をそむきはてぬといひおかん思ひ知るべき人はなくとも

「法師の歌だ。世捨て人であるにも関わらず都に未練があることを歌い続けた法師のなかには終生待賢門院への思いがあったのだと思う。若い時分のみちのくへの旅は待賢門院鎮魂の旅だった。そして年老いてからの旅は東大寺再建に言寄せた待賢門院追憶の旅だったのではないか。例えばこの柳の歌だが、道の辺とは京の都、そして清水を待賢門院、柳陰を待賢門院が鳥羽院から疎んじられて寂しく暮らしていた法金剛院だとすればどうだろうか？」

「成程、さすがはお師匠様、説得力があります」と曾良。

「しかし、不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず、そのためには、万物三川草木人倫の本情を忘れず、飛花落葉に遊ぶことが肝要、それが私の俳諧だ」

芭蕉は短冊に書き留めると曾良に見せた。

田一枚植えて立ち去る柳かな

「お師匠様！」と曾良がやや高い声を出した。

「さて参ろうか」と徐に立ち上がると芭蕉は既に歩き出して

いた。慌てて行李を背負った曾良が追いかけてきた。かなり前方に、菅の小笠を被り墨染めの衣を纏った人が歩いていた。

参考文献

- 西行全歌集 久保田淳・吉野朋美校注 岩波文庫
人物叢書〈新装版〉西行 目崎徳衛 吉川弘文館
西行論 吉本隆明 講談社文芸文庫
新版 おくのほそ道 現代語訳／曾良随行日記付き
 穎原退蔵・尾形仿訳注 角川ソフィア文庫
芭蕉と門人たち 楠元六男 NHKライブラリー

手紙

旭 英幸

再び郵便料金の値上がりニュースを目にした。再びというのは、消費税が上がると1円もしくは、2円の上昇でありそのたびごと1円切手や2円切手を購入していた。私の子供時分、郵便は安い伝達方法の一つでもあった。電話では通話時間と料金が増し公衆電話で友人に連絡とる場合、10円玉を大量に用意して、コインを一枚ずつ投入していた記憶がある。まして県外の知り合いとの連絡には、10円玉を10個や20個では途中で足りなくなることもあった。その点封書なり葉書でかなり長い文を綴っても追加料金を請求される事はなかった。今回封書が84円から110円となり、葉書が63円から85円となるらしい。郵政省否総務省では手紙を書く人間が減少し、更にダイレクトメール便も少なくなっている。其の上ポストより郵便物を集めそれぞれの家庭に配達する人が、減少が主な要因らしい。郵政行政とは国で支配しているが、郵政民営化によりヤマト運輸や佐川急便などの民間事業で充分に、成り立っているのも原因の一つかもしれない。今の時代他者との連絡は手紙でもなく、電話でもなく、メールやラインを使うことが多い。私もＩＴには弱いながら、知人との連絡に使うようになっていく。だが随分と味気ないものと感じている。中学生の頃国語の授業で手紙の書き方についてのセクシヨンがあった。相手に連絡するのみであるならば、前略で始ま

り草々で終了し、男なら不一で女性ならかしこで終わる。また儀礼的で目上の方に連絡する場合、拝啓や謹啓で始まり時候の挨拶相手への気遣いを表し、本題に入り敬具敬白で結ぶことを教わった気がする。そこで国語の教員が夏休みの宿題として担任の先生に、8月15日まで自分自身の夏の出来事を手紙として郵送する事となった。私は友人との話やら家族の事をなんとか創り出し郵送した覚えがある。今の学校でこのような宿題があるか否か不明であるが、昭和37、38年頃、中学生が夏一斉に手紙を書いたとすると随分の量となったであろう。また図工の先生には、正月必ず年賀状を書く事の宿題がでたし、それも必ず版画で出すこととかなり私としては嫌な思い出でもある。

またそのセクシヨンの中に世界で最も短い手紙についての話もあった。一つはピクトル・ユーゴーが、編集者に「レ・ミゼラブル ああ無情」の売れ行きについて問うた手紙は「二編集者からは「一」であり、よく売れているとの答えである。これは現在のメールのやり取りでの絵文字一つで互いに意思疎通が出来ているようなもので、すでに19世紀に同じやり取りがあったのである。日本での、一番短い手紙に挙げられるものとして、「二筆啓上 火の用心 おせん泣かすな 馬肥やせ」であろう。江戸時代本多何某が、戦場より妻

に送った文である。確かに火事を起こしてはいけない、子供を大事にしる、馬を大事に飼育するよう、という意味である。確かに自分が留守の間に問題が起こることを、心配しているのである。だが妻に対する労り愛情のない文でもある。今の時代では問題なる文であろう、たとえ軍事に従事していると雖も、年齢が上であろうとも下の者であろうとも手紙を出す相手への気遣いが無いようである。また三行半という手紙もある。夫から妻への離縁状であるが、妻から夫への離縁状が見当たらない。將に江戸時代は男性優位であるが、その文を読み理解し納得する、女性がいいたのもまた事実である。昨今日本の識字率は99%以上であり、にもかかわらず手紙を書く習慣が減少したことはやや悲しいものである。

私の子供頃、親類や知人から贈り物を頂いた時、必ず父もしくは母が手紙あるいは葉書でそれなりの令状を書いていた。電話がなかったわけではないが、父は「電話である」と礼以外の話をする必要あり、よけいな面倒が増える」との理由であり、そのことを知って私もそれに倣って葉書を出すようにしている。確かに葉書一枚書くのも、一筆啓上ありがとう程度のものでよいのである。私が父と離れて暮らすようになって、私が父母に子供の写真を送ると、孫の成長を喜ぶような葉書を送ってきていた。先日私の孫が少し字を書けるようになり、一所懸命に鉛筆で書いた手紙を送ってきた。宛名もひらがなで心が通じており本当に嬉しく孫の成長を肌で感じた。当然私の返事もひらがなで書いた。現在のメール文化を否定するつもりはないが、指先のみで発信可能で大変便利である。手紙を書くということ、文を推敲し相手にどのよう伝わるかを考え悩みながら、そして手紙をポストに投

函しなくてはならない手間がある。そして投函するまでこの文でよかったか否か反芻しながら歩いてポストまでたどり着くのである。このことが手紙の良いところでないであろうか。昔私がある人に人間性否定されたため、私は大変立腹し相手に謝ってほしい旨伝えたところ、新聞チラシの裏に「申し訳ない、誤解だった」と殴り書きでの投函には更に立腹したのである。手紙はそれなりの形を整えて書くべきであり、相手に真の誠意も伝わらないのである。それほど自筆なりで文を綴るとは、大事な行為である。指先ひとつで発信できるメールとはずいぶんと違うのである。私の甥は古典芸能の仕事をしている。時々我が家で食事などを提供する機会があり、彼の礼状は必ず毛筆封書で送って来る。私は其の礼状を期待するあまり、自宅や外での食事を共にするのである。

ところで、手紙の文化として文人たちのやり取りが本になっている。太宰治が川端康成に芥川賞への推薦をおねだりする文は有名である。ここでは2組の小説家の書簡について、述べてみる。まず辻邦生と北杜夫とのやり取りである。二人は旧制制本高校で同級であり年齢は辻が2歳上であり、よって友人であるため互いに知った仲である。辻が卒業することが遅れた時も北は辻にフランス文学を極めるように進言し、自分は親の職業を継いで医師になったことも述べている。北が芥川賞を「夜と霧の隅で」で受賞したが、同時に「ドクトルマンボウ航海記」を上梓し何しろ航海記の方が売れたようである。北にしてみれば「夜と霧の隅で」で随分力を入れたかなり疲労したが、マンボウには嘘を書いてないのに、世間ではほら吹きの評が出ていた事にも、喜びを感じた旨辻に文を送った。その返事に「ドクトルマンボウ航海記」を読み、

辻は、涙を流して笑った、笑った。そして杜夫が近くについて、知的な視覚があると、表現していたのはさすが小説家の手紙文である、私は感じた。またバリーに「幽霊」を持つてこなかったことも残念であるとも述べていた。この様に学生の頃より文学に傾倒し、共にトーマス・マンにも互いに憧れ二人の書簡は確かに立体的に映るのである。これが北の「輝ける碧き空の下」にそして辻の「西行花伝」に繋がったのかも知れない。

もう一つ立原正秋と小川国夫との書簡やり取りがある。私は若い頃立原に随分傾倒し、立原の女性描写そのものの観察眼には憧れたのである。また「舞の家」や「冬の旅」などに綴られた中に、花伝書の一説が気に入っていた。「二代一人の相伝なり、たとい一子たり云うとも、無器量の者に伝うべからず。」に感動し何回も風姿花伝を読んでみたが、未だ門に至らずであり随分と狭い門であると感じた。立原が小川国夫を知ったのは、本多秋五を訪ねた時である。「青銅時代」という雑誌を本多より寄贈され、その中に「アポロンの島」を読み、その文体に興味を示し小川に手紙を送ったのであるが、すぐに返事が来ることなく、返事は4年後であった。その後文芸の会の発刊により二人の関係が少し近くなるのである。二人の手紙の中は「青銅時代」や「文芸」の内容のはなしが多く綴られており、そのうち立原の食通により食事の誘いや酒の話と話題が広がり、それぞれの子供に対する話もあり手紙に優しさが出てきているように思われた。既に小説家としていた二人には、辻と北とは随分と違う手紙のやり取りである。

この様に手紙はその時その時代が残るのである。私ども残

すものではないが、親からや孫からの手紙は写真アルバムを見るよりはるかに楽しみではなからうか。

花手水

岩本 久美子

心を清め参拝者の癒しに始まった

季節の花を浮かべる花手水

青紫 薄紅色の紫陽花や白ダリア

トクサも浮かばせ

青紅葉で爽やかさを演出する

シマススキを龍様の立髪に添えて

神社の境内で災厄を取り払う

茅の輪くぐりの夏越の大祓で

神職 氏子総代 参拝者が

花手水舎で清め

荘厳な雰囲気の中

肅々と儀式は進む

誰もが安寧な日々を祈って

蒼き水の記憶

花には命がある

インスタ映えする姿は

日本の伝統と新しい文化の融合に

翌朝静寂な中花の手入れに赴くと

リュックを背負った若者が

花手水舎で清め本殿に向かい

一心に手を合わせていた

今日一日の仕事への決意なのか

清廉な朝の空気が漂う

神社の境内

流動の一滴 花手水

見ていてください

村上 周司

見ていてください

私のことを

どんなちいさなことで

見ていてください

私のことを

みがってといえるかも

しれないですが

きっと光も守ってくれるでしょうか

新しい時代からとり残されるかもしれないですが

咲いた桜も

見てくれるでしょう

私の仕事を――

私は光の炎の中で

一人もがいて

時を過ごすでしょう

私の笑顔は

光の炎に

うつしだされているかも――

墓参り

松本 ミチ子

墓地までの長く緩い坂道は
あの人が最後に行きついた
淋しい場所です

あの人はわたしの連れ合いで
ある日突然別れたいといって
昨日と同じ笑顔を残して去って行った

二年が過ぎた

その日は

雨こそ降ってはいなかったが

誰も思いもしなかった姿で

近所の林で発見された

家を出て何処でどんな暮らしをしていたのか
こんな姿で戻ってくるとは

閉じた瞳から零れ落ちていた一滴の涙は
孤独感を抱えていたのだろう

ふっ と息を吹きかけてまつ毛を
揺らしたくなる

あれから

幾つもの季節が通り過ぎ

届かなかった夢も

裏切られた悲しみも

あっけない死も

わたしの記憶を横切っていく

好きなブランデーをコップに注ぐ

さあ遠慮せず飲んでください

墓参が済むと雨が落ちて来た

「さあ 帰りましょう」

娘の口がそんなふうに動き

二人肩を並べて歩きだした

百日紅

吹木 文音

くぐもった紅^{あか}は

夏の果てを飾って、無口。

忍び寄る暮色

悄然・・・虫の音は、挽歌だ。

若さの迸り

浮かれた季節の代償は

いのちの十字架

薄い皮膜に包まれた

澄明な水は

確かな鼓動を刻んでいた、という

僕には、ついに曖昧で

君には、揺るぎぬ傷みだった。

取り残された 魯鈍は

モノクロームな、夏草の繁り

無作法で

無遠慮な

さるスベリ・・・

地に堕ちた病葉^{わくらば}を

この、くぐもった紅は知る

青春の残像

螺良 君枝

明け方夢を見た
長身の青年と
親しく話していた

村の青年団活動のリーダー
資産家 大学卒業の貴公子

郡の青年団 宿泊練成会
作詞された団歌

誇らしげに胸張って
頬染めて歌った夜
壇上のあなたは
ひとときわ輝いていた

あの日から

茫茫と流れ去った歲月
数え切れない 哀樂の日月

功成り名遂げて

幸にお過しですか

家族の笑顔に囲まれ

優しい祖父として

私は 人生の終着駅に

一人佇み 巡り合った

すべての人に感謝し

生かされている日々を

こよなく愛しんでいます

青春の残光に

明日への心に糧を

ひそかに求めて

憧れたあなたは 何故か

今でも 遠くて眩しい

閉じ込められた風景

こやま きお

きりつと一輪 菜の花

そこは海を一望できる

小高い丘であつたに違いない

土地の人からお花畑と慕われていたと

きみの話を思い出す

かつては多くの人が訪れ

晴れた日

丘に立つと

ゆるやかなアーチを描く水平線が

輝いて見えたという

いくつもの重機のアームが

獲物を狙うカマキリのように丘を抉っていく

土壌汚染の除去だというが
遺跡のように残されていた家々の礎石も
たちまち茶色の土に均され埋められていく
記憶の拠りどころがまた一つ消える

鈍く照り返す無数の黒い袋
この地で暮らしてきた

人々の

喜怒哀楽を詰め込んだまま

失われた町に積み上げられていく

きみの眠る彼方の海を遮り

逝った人たちの無念をも塞ぐ

いつまで

街の風景を閉じ込める

夢

戸井 みちお

かなうも夢かなわぬも夢

夢は夢 夢であるから夢

夢を夢みて過ぎし来し方

もはや夢を夢みる力萎え

吐くは溜息

しかし 待て 所詮

夢はまぼろし もしかして

今が夢 夢の中

居ること 在ること 生きていることすべて夢

この世は夢

人は夢の中で生きている

夢は儚く頼り無く

何時かは潰え消えていく

憂きこと善きことありしこと

親子同胞はらから友垣と交わりしことあれこれも

すべて夢夢 夢の中

夢は幻所在なく

いつかはどこかへ消えていく

いつとは無しに

無しの世界へ

無無無無 無無無

何も無し無し何も無し

無し無し無しの座に坐して

目をつむり 深呼吸

肩をおとしてもう一つ 深呼吸

無無無無 無無無

夢 想

森 秀夫

あなたは今

なりたい自分になっていますか

飛ぶ鳥を見て空に憧れ

月を見て未知の世界に夢を

先人たちは

想いに火をつけ

汗を流し英知を集め

夢を叶えてきた

人は皆

天命を持って生まれてきている

だから

誰もがなりたい人になれる筈

ひたすら想いひたすら歩く
そこに必ず道は拓ける

そう信じて生きてきたが

私は未だ道半ば

想いの果ては遙か彼方

胸に燃える炎を抱いて

立ち止まることなく歩いている

ここで終わるわけにはいかない

利他の心を友として

高い夢の頂きをめざして

自分を奮い立たせている

あなたは今

自分自身に満足していますか

幸せですか

サイの化身草原のサハスラブリヤ[※]

貝塚 津音魚

古名はキササ

シラミはその形から千手観音という異称がある

その字（虱）から半風子^{はんふうし}と称す

ノミとシラミはともに人間に寄生して吸血し

戦後の大発生期にはホワイトチイチイと呼ばれた

ノミは最も進化した

シラミは最も原始的な形をした昆虫である

権化して千手観音となり人々を 動物を救う

千手観音は限らない慈悲を宿す菩薩

千の慈悲の眼と 千の仁恕じんじょの手をそなえる

獣達にも千に勝る苦悩と困難があるのか

千の手の救いと助けを求めて

サイの化身は

今日も草原を 荒野をさまよう

※「サハスラブジャ」とは「千の手」あるいは「千の手を持つもの」の意味である。

『雲を掴むような話より―不確かな暗雲に突き進む研究者、或いは追夢の男』

彫刻・・・日原公大より

文芸部異聞

高田 太郎

昭和二十年代、滝の原にあるぼくらの新制高校にもまだ少しは旧制中学時代のバンカラ気風は残っていた。新入生には先生よりも上級生のほうがおそろしく大きく見えた。上級生とのつきあいは部活からはじまる。そして人間を知ることになる。たとえば文芸部だ。今の高校にほとんどなくなつたがぼくらの頃はけっこう人気があり、ヒトくせありそうな連中が集まっていた。本校で戦後いち早く文芸部を立ち上げ、名を高めた先輩として工藤信彦と小川和佑をあげておこう。

後年ともに文芸家として一家を成し著書も多く、ぼくらの世代なら現代詩研究分野では知らぬ人はいまい。ぼくも長年のおつき合いでたくさんの本や書信をいただいたが今や資源ごみ待ちか。

ぼくは入学式後、部紹介を待たずしておっかなびっくりして本館二階にある文芸部室の戸をたたいた。時の部長は三年の田村亘という人でどこか芥川の風貌ににっていた。あとで知ったことであるが、ある雑誌の学生小説に応募し時の流行作家井上友一郎に激賞されたという。入部後のはじめての

部誌『表現』が出た。ほとんどが創作で彼は「ひまわりの花咲く家」という三十枚ほどの小説を巻頭にのせた。引揚者だった彼の太連での少年体験を書いたものであるが、後の清岡卓行の「アカシヤの大連」と場を同じくして興味深い。その人物や情景描写、大人っぽい書き方にぼくはドギモをぬかれた。ぼくには作文しか書けない。小説はやめた、ときっぱり心に決めた。中学時代から好きだった詩一本でいくことにした。『表現』には自分でも分からないような詩を書いて仲間をけむにまいた。それでも『学燈』や『蛍雪時代』など受験雑誌の文芸欄に投稿、入賞掲載され仲間の目をみはらせた。

当の田村先輩は書きすぎて無理がたたり胸を病んで休学、卒業年はぼくと同じだった。それから交流の空白部分はかなりあったが、彼の創作意欲は止まらなかった。『新潮』や『群像』にも小説を書いたし、圧巻は何といっても七百枚の大作「桃の宿」三部作であろう。滝の原時代の親友馬場宏仁事件、宇都宮の地理がふんだんに描かれている。

小石

唐澤
るみ子

手をとりて別れを告げきみつめつつ不意にあなたはわたしを抱きぬ
夕焼に身を焼くやうに飛ぶ鳥よ語れぬ思ひはあはれ鳥にも
老いゆけば静けさとなるものごとのそのしづけさが揺れる日もある
忘れじと思ひし人にもあらざるに老いてわが身の奥に佇つ人
若き日のつまづきの石なつかしき老いの小石も三つほどもたむ
訪ねゆかむ人ももうなしとけるごと思ひたどりて終りゆかむか
疲れたる夜に書く文悲しみもありありと書くすこし楽しく
水滴と雨はちがふわ遠く遠くさみしい道を来たのは 雨よ
そのことはもういいのです沈黙はしづかに香るものがたりです
いつの日も花を求めるさみしさを終りにしませう自分を花に

ふるさと

神野 規子

若みどりの羽をひろげてめじろとぶ如月の庭あかるくなりぬ
九十路生きてしきりにしのばるる父母すみしふるさとの家
小倉川鉄橋わたれば見えてくるおのづ車窓によりゆく吾は
ふるさとの広いたんぼの積み藁も稲架も見えぬさみし野の景
緑なす田畑を流る川に沿ひありし水車小屋も消えたり
歩調を変へ歩みて行けど遠廻りする時間など吾にはなくて
九十路生きてしきりにしのばるる阿修羅を恋ひてゆきし倭路
桜色に染まる吉野の山道を登りてゆけり春となる日に
山水もすがしく流る西行庵こぼるる陽差しもあたたかかけり
思考する行動する事軽くなる九十路生きる吾のすがたか

洞窟酒蔵（昭和の遺構）

高橋 淑乃

洞窟酒蔵烏山市の山かげにひっそりと今息づきてゐぬ

南京錠かちやりと解きて木の扉開ければ冷気流れ出でけり
ふる里の山をうがちし洞窟にあまたの古酒の息づきを聞く

伝統の東力士の名柄の古酒の貯蔵を見学すなり

ふたたびを訪ねて入る洞窟の山の靈氣に夏を忘るる

凝灰岩の壁面ぬらす山清水洞窟内の気温は十度

説明によれば昭和の十九年学徒がつるはし振りし洞窟

手掘りせし跡あらあらと照らし出す裸電球が語る戦時下

山裾を穿ちて作りし地下工場戦車製造の場所と知らさる

戦争を勝ち抜くためにとうら若き学徒が流せし汗を想ひき

戦時下を動員学徒が掘り下げしつるはしの音幻に聞く

山かげの古酒の貯蔵庫戦争の遺構なりしと胸熱く聞く

洞窟は昭和四十五年より古酒熟成の場所となりける

洞窟に縦三本と横六本裸電球の照らす道あり

水の神・山川の精・木石の怪・魑魅魍魎に背筋冷える

熱露^{うろこ}枯とふブランド品は大吟醸^{しやれ}洒落たボトルの人気商品

戦争を風化させずと洞窟は語りつぎつつ遺構を守る

洞窟を出づれば外は七月のみどりの山に暑き風吹く

銘柄の貯蔵の古酒をいただきて老舗島崎酒蔵をあとにす

烏山はわが母の里 看板の〈東力士〉を親しみ仰ぐ

葵 祭

田村 世津子

路頭の儀いまし御所より出で発ちぬ平安の代へとタイムスリップ
シンボルのフタバアオイの自生地は絶滅せしとふ哀れ秘めつつ

検非違使のまなこ險しく永却の国を見据ゑし形をまとひぬ

腰輿およよ乗る齋王代は凜としていつきのみやの品位つらぬく

束帯の騎乗のひとつは道長かこの世をわが世と誇示せし威厳

恋ほし恋ほし君に会ひたき愛かなしみを曳きし式部のまぼろしを追ふ

青葉風に揺るる藤浪めぐらせし牛車の軌み時間ときをゆるがす

丸太町埋めるひとらの撮りきそふシャッター音に夏日ふくらむ

せめぎ合ふ世はなきごとし優雅なる列は皐月の光かけを集めて

平安と令和の上下に紛れなく平和はあれど　いくさ止まざる

花ありて

虫たちもけものもひとものちあるもののほほゑみ花ありてこそ

コロナ禍も戦禍もとほきものとしてさくらさくらと舞ひし風の音

舌戦の火花散らせし花ふたつ百合と蓮との勝ち目はいかに

さるすべり炎暑の日暮れ散る紅のほつりほつりと何かつぶやく

とむらひの白菊にほひさむざむとここに集ひしひとら清めり

いくたりの喪に連れ添ひし数珠入れの刺繍の蓮花のほつれ増しゆく

花ばなを遊ばせ無限の美を謳ふ花人^{かじん}とふ赤井勝の宇宙

しぐるるやしぐるる墓の母に会ふ秋海棠の白もしぐれて

乱気流いくつ乗り越えきただらふ番の鳥は薔薇^{ばら}をくはへて

ガザアカザ ハマスハマナス 花の名に似れど花無き瓦礫のみ地区

櫻 杜

増田 律子

満開の櫻花びら翳を生し木蔭にひとり汝を待つなり

ひそやかに錦織りなす夕光を身に纏ひつつ刻を過ごしぬ

櫻杜にただひたすらに汝を待てばいつしかわれは花喰ひ鳥に

喰れがれの啼くこゑ天に飴すを迦陵頻伽が耳欽てる

とめどなく花散る里にすぎ去りしうすずみ色の夢の儚く

をみなわれは五月の里に生れしゆる緑の風を食みてうたはむ

草萌ゆる野司に立ち呼びあへる友の名愛し惜春の里

蒼き杜にこころ奪はれ彷徨へる木霊となりて老いゆかむかな

杳いとはいふ大夕焼の野に果てる風の葬りは叶はざらめど

葉櫻にかかる残月白じろとわれの一生の余白の如し

風にならばや

ゆくりなく娘の部屋覗き眼にしたる大きな鞆と外つ国の地図

唐突に旅立ち告ぐる娘を見つむさみどり色の声も明るく

勤め先の旅行会社はさておきて余りに急きたる計画と夫

自らに責任課せし旅なれど危険伴ふリスク言ふわれ

人生の坂径いくつ越えゆかむ親の示唆する方向見ずに

旅に出でて多くを学ぶ吾娘なるや机上の論は当てにならぬと

旅なれば気儘にと娘はわが援助一切受けずの文無し旅ぞ

その姿哀れむほどに粗末ゆゑ女子でありしを忘るるかと問ふ

夕されば不安の募る胸の裡 宿に安寝の吾娘なりしやと

ひとり旅の吾娘が宿りの丘に吹く青葉隠れの風にならばや

命の連鎖

福澤 悦子

朝明けの鏡にむかへば暗きより出づるがごとく映るわが顔
老いふかみ輪郭ゆるむわが顔に二重写しの面輪笑まへり

夏疲れの物憂き我に微笑むは父なりや母なりや懐かしき貌

朝明けの鏡面をつと横切りしは在りしながらの父母の面影

我が裡に父は存はせり目つむれば在りし日の父我に微笑む

我がうちに母は在はせり涙する我を抱きしめし母の温もり

我がうちに亡き姉は生く『一年生』の本を土産に帰省せし姉

我がうちに在りし日のままに父母同胞^{はらから}在はしますことただ有難し

命を命に繋ぐものは何DNAゲノムは我には永遠の謎

御祖^{みおや}より我が承^うけし命子に孫に継がれむ命の連鎖はるけし

楡の巨木

沈黙のひとつときの後をひむがしの空ゆるやかに光帯び来ぬ

薄墨の空に茜の色差して楡の巨木の影は浮き立つ

黒きマッスとなりて揺らがぬ楡の葉の間より蒼穹の色透きて見ゆ

うつさうと枝差し交わす楡の木の梢より朝の光差しそむ

朝明けの光を浴びて楡の木の暗き葉群に緑甦あをる

朝刊にて友の死を知りし朝明けの窓より楡の巨木を仰ぐ

生の光死かげの影を潜め蒼穹に枝張りてそびゆ楡の巨木は

地にふかく根を張り空に向き枝を伸ばす楡の巨木の命愛しむ

わが窓の視野いつばいに聳え立つ楡の巨木のいのち深しも

楡の樹を吹き過ぎる風の音澄めり夏から秋に時はめぐりて

雲母坂

石井
光

しやぼん玉はじけて泪目のピエロ

昭和の日博物館に黒電話

夏草や妻の手を引く雲母坂

ひよいと出す遺産目録ソーダ水

島巡る移動図書館大夕焼け

タクシーに乗り込む四人秋暑し

遠かなかな一人乗り込む始発バス

終電を降りて星見る寒さかな

語尾訛るままに老いたり福寿草

二拍目は二人揃へて初詣

稲の秋

渡邊 公之

葉を加へ青あざやかに七日粥

福豆や福もてあますほどの数

境内の一角染めて八重桜

大きめの制服幼な入学児

那須岳の植田一枚づつに影

てんと虫葉を揺らさずに飛び立てり

那須岳の裾がふるさと稲の秋

雲切れてひと目まみえし今日の月

うぶすなの甘き香りの今年米

農機具を洗ひ上げたり冬うらら

マイペース

水上 義明

ライバルの目星をつける入社式
年金の上積み望む新年度

待ったなし孫の身長まだ伸びる

雑草に生きる強さを教えられ

カラオケに春呼ぶ歌を探し出す

街に出る熊も言い分あるだろう

山菜の名前知ったら春が過ぎ

夜更けまで延延つづく旅プラン

胃袋が時計と競うバイキング

待ち侘びる春は牛歩のマイペース

元氣は正義

三上 博史

愚者は愚者なりに老いゆく日向ぼこ
赤ちゃんはみんなデベソだ露の臺
庭先に咲けば引き抜くホトケノザ
反抗期空の青さを見たがらず
コケコッコー星が素直に消えていく
窮屈に暮らすのが好きコルク栓
見事咲き見事に乱れ散る牡丹
ここは深海真夜中のもの思い
テッセンの輪郭揺れている思い
大往生蟬はいつでも仰向けに

ニッポンは無邪気な国だ夏祭り

かき氷地球温暖化は進む

血圧を宥めてみても老いは来る

フルート奏者キスも優しくするだろう

忙しなく煽ぐほかない渋団扇

あまりにも不精じゃないかりユウノヒゲ

手の込んだ調理はしない焼肉屋

帳尻を合わせカーボンニュートラル

干しシイタケ翁と媼たちの影

元氣は正義アンパンマンは不滅

下り坂

あおい
七海

相性がいんだ卵かけごはん

五十年朝一番の水を飲む

特別な時間ではないしじみ汁

腕時計はずしてからの自由人

ここち好いリズム人生下り坂

過去未来何してきたかしたいのか

昭和の真ん中に父の飯茶碗

気がかりは散り際のこと花のこと

ふっきたらしい焼き芋食べている

花びらを浮かべ私の仕舞風呂

思案

柳岡 睦子

わたくしは年女です吠えましょう

両の手は平和を掴むためにある

青空を縫い合わせてる災害地

避難所を案じる星が眠れない

地図記号持たぬ私は風任せ

イラストの椅子から温い詩が生まれ

何回も何回も言う母だから

それじゃ駄目そんな事ないこれでいい

解答はひとつ命の替えはない

原爆のドーム百年後も叫ぶ

夕焼け小焼け

松本
とまと

日本酒で昔話をしませんか

我武者羅に働きました皆むかし

働きづめだった背中が懐かしい

親ガチャだなんて知らない囲炉裏端

れんげ菜の花耕作放棄なんて無い

耳底へ父の十八番のビブラート

夕焼け小焼け十五で姐やは嫁に行き

そのむかし子供十人ざらでした

働き方改革甘くなりました

子供には今は令和と言われます

未収録詩篇と筆名について

森 羅一

雲の略圖

見給へ。不毛を極めた読本の中、全体に白く露出して君は、何をそんなに顛倒してゐるのか。日々の、海綿のやうな収斂の後を、その血暈む泥酔の底に堰かれて、おびたごしい困憊のなんたる巴蜀であらうか。君の鰓！

かの殷賑たる街衢奔り、吹きおとしの風に捲かれて、その読本を放棄せよ。盲ひたる家畜の扁平に似て、君の遽しく伶俐な官吏。ああ蒙昧なる辭令のもとに鴉をして、不備なる脳漿を啖はせ給へよさらにその内部の昏さより、歌はざる商標を剥ぎとらしめよ。君の出發！

色情であり、幾何学であり、死であり、斯のごときレアリティを実践せよ。それらの純粹に投身せよ。それら純粹のわづかな偏差に、美の恐るべき極限が在るのだ。煌めく危機を捕へよ。しかも次第に象徴に陥る、なんたる暴挙！君は言葉なく己を見据ゑる。

（裏町の傾ける溝渠の下を、女が口惜しさうに目を配つてゐた。石炭の冷たい臭氣に噎せて、己は十九歳。女は恐れげもなく己の額に手觸れて、口ぎたなく罵った。沸きあがる熱氣に灼かれて、己は不遜の十九歳に反撥したのだ。弛みなく女の項背に潜んで以来、肉體こそけいれんする夢想と騷擾性を

増量した。諸々の饗宴を、燦々たる愛を、蒼白の知己を離れて、北方の目覺めざる樹々に索引された己は、惡と自爆の科学に没頭し、時飽くなき日々を屠つてきたのだ。だが忘れもせぬ。時空圏一點に極微のの秩序を極めた線の、密集と離口*1に驚異した己が、知性の極りない悲みに觸れた刹那、この内に擦火したエーテルを誰が知らうか。終日、裸の臺地に発つて、雲を測り、レンズを逆にして、この心臓を燃焼した。群青に裂かれた氣を喚んで、みづからの擾亂に火を點じの。殺到する死の、なんたる非浪漫！

年々に堆積し消滅する、むげんの有毒なる瓦斯體。かなり密接した體格を透して、つねに露はなる昇華は凄まじく。満ち溢れて、十九歳の戦慄を纏つた己は、自然により、機械により、すべて暴政のむざんに布かれる所、死が最早、悅樂の愚劣な時代を蹂躪するのを視たのだ。美の恐るべき極限とは。煌めく危機に生きるとは何であらうか。死こそ求心するアトムであらうか。

來給へ。今は寡黙の時、無數の眞實。悍馬で可し。さらに鐵車で可し。君の胸盤を茨に洗つて、それらを無邊に飛翔せしめよ。己が躊躇する所ではない。すべて潑刺を快く惡の領域を蹴立つた己は、火酒の一盞に雲の略圖を深く映して、愛

する妹の髪を撫でて呉れやう。

※『セルパン』昭和6年10月 掲載。

※2節13行*1・離の後の一字が欠落。欠落部分を調査する。

*1・□は「解」（日本近代文学館で確認）。A「離解する」
「解」は「離解する」の誤記か。B「離解」は理解の誤記か。
は無い。離解はメールで確認。）

※『セルパン』第一書房昭和6年10月1日発行。（第七号と思われる）

※第一書房、昭和六年〜昭和十九年（途中『新文化』に改名）。
昭和六年に創刊された月刊誌。昭和十九年版元の第一書房の
廃業とともに廃刊。創刊当初は翻訳文芸、詩、小説、芸術等
の小冊子でスタートしたが、その後時事評論、海外事情等加
え総合雑誌の形態になった。昭和前期の戦争に至る過程を讀
み解くために不可欠な一次資料といえる。所蔵年・昭和六年
〜昭和十九年。（奈良県立図書館情報館）

この未収録詩篇は那須烏山市の小幡和子さんから提供され
たものです。

未収録作品（詩、エッセイ、童話）は『逸見猶吉の詩とエッ
セイと童話』二十三篇、『逸見猶吉 谷中から満州への軌跡』
三篇。今回の「雲の略圖」を加えると二十七篇となる。逸見
猶吉全集の刊行が待たれる。

昭和6年発表とある。大学を卒業した年である。この時期、
「高橋新吉論」「童話（翻訳）」「無題」「裸身」「エッセイ」未
収録詩篇（2篇）などを発表し活発な詩的活動をしている。

この作品前半にある君は高橋新吉をモチーフにしているよ
うに読める。逸見はこの年に高橋新吉論を書いている。作品
を追ってみる。

中編にある「象徴に陥る、」が興味深い。これ以下の条文
にウルトラマリンに象徴される精神との苦闘が窺える。

筆名の由来（追補）「亦猶斧斤之於木也」について

小幡さんから未収録詩篇「雲の略図」と一緒に筆名の背景
になったのではないかと言う次の言葉が送られてきた。非常
におもしろいので調べてみた。

言葉は「亦猶斧斤之於木也」である。この言葉は孟子の「告
子章句上」の中ほどにある言葉で、小幡さんはこの言葉は「良
心を放つ所以のものは、猶、斧斤の木に於けるがごとし。ど
んな悪人でも、本性としての良心をもともと持っているたと
え。」と添え書きしている。

孟子解説を読むと

「人の心に存するものについて考えてみても、どうしてそこ
に仁義の心はあるのである。ただひとがその良心（仁義の心）
を放ち失うわけは、やはりちようど斧や斤（まさかり）が牛
山*1の木を伐つてなくしてしまったのと同じなのである。
云々」*1 齊国の東南にある山。

「亦猶斧斤之於木也」この言葉は牛山の木を伐採してしまっ
たの意である。つまり、自然破壊を指しているように読める
が、孟子の「性善説」はこれを糾弾するのではなく「人本来
の良心」を信じ、擁護している文意になっている。

以下、推測でこの言葉について考えてみた。

この言葉が何故面白いと言うと以下の二つの事例がある

ことである。

逸見猶吉 逸見斧吉をながめていろいろな推測が浮かんできく。

①《猶と斧》が初めに位置していること。②牛山の木を伐採したことである。

①猶はここでは「やはり、ちょうど」にあたるのか。「斧や斤」は伐採の道具であるとともに人の欲得と繋がるアイテムである。我流で解釈すればこの欲得は悪しきものであり、善と相對するものとなる。

斧や斤が悪しきものとするとその反対の善が考えられ、「吉」が想定できる。つまり「猶吉」になる。

逸見斧吉の斧の改編Ⅱ吉の背景資料なのであったのだろうか。と考える。

②私はこの牛山を足尾と並記してみた。鉾山開発を優先した結果、足尾の山も牛山同様禿山になったことは衆知の事実である。性善説では片づけられない歴史でもある。

この言葉「亦猶斧斤之於木也」（孟子）を逸見は読んでいたのだろうか。読んで筆名の参考としていたとすれば、先の「猶予狐疑」（呉子）と共に逸見の漢籍への精通の深さが窺えるのである。

「谷中を捜す」で追跡したが、逸見の鉾毒事件や谷中への意識がどれほどのものであったのかは明確に把握できない。

「筆名由来」も同じである。「亦猶斧斤之於木也」を追補として付け加えたい。

更に読み込んでみた。この言葉の「斧斤」は牛山を破壊したアイテムであり、人間の欲望であり、禍々しいものであり

兇に繋がる。凶の対は吉であり、逸見が孟子を読んだとすれば、私の中で筆名のエピソードとして斧斤Ⅱ兇ではなく、善Ⅱ吉をおもったにちがいない。と言う仮説として推測が生まれた。原文と解説を引用する。

・雖存乎人者、豈無仁義之心哉。其所以放其良心者、亦猶斧斤之於木也。旦旦而伐之、可以為美乎。

・人の心に存するものについて考えてみても、どうしてそこに仁義の心がなかるうや、必ず仁義の心はあるのである。ただひとがその良心（仁義の心）を放ち失うわけは、やはりちょうど斧や斤が牛山の木を伐ってなくしてしまったのと同じなのである。

ここまでは牛山の森林破壊が人の善に非ずの行為を述べているが、この後に孟子は人本来の性情はそうではない。と性善説で結んでいる。逸見がこの条文を読んでいたとすれば、孟子の願いである「善」を逸見もまた一縷の望みとして求めたのではあるまいかと考える。猶吉、吉に躊躇いながら凶でなく吉Ⅱ善に己を託したのではないか。

※参考文献・新釈漢文大系4内野熊一郎『孟子』（明治書院）

中世ミンネザングについて

名村 忠

I リート(歌)

男達は美しい女達を仰ぎ見て歌(ミンネザング)を歌った。モルンゲン(1222没ドイツ)の歌を翻訳することですの意味と時代背景を解説も参考にして明らかにしたい。

33 (歌番) (1) 軍隊に入りたい。自分の目標に達することが望まれる。そこには多くの孤児がいて、一緒に戦って領土を焦土と化すだろう。私の女主人の領地からたとえ何を得ようともそれは零落の定めにある。彼女が私の怒りに宥めてくれないなら、そうなる運命だ。(2) 友よ! 私にすっかり歌わせてくれ! 彼女が聞くように甲高い呼び声で進もう。私の悲しみが私の女主人の心に届くように叫べ。そして彼女の耳元に届かせろ! 既に長いこと彼女は私を苦しめてきた。(3) 女主人様、あなたの同意を前提にして私はちよつとだけでも君と話がしたい。君はそれを受け入れることであろう。それが君を怒らせるというなら止める。君が人生、青春を最高の完全さで飾ろうとするなら、甘い被造物よ、聞け、君の美しいやり方に叶った方法でいいから聞いて欲しい。33 [2] (1) 私は常に君の華麗なやり方を歌いすべてのことで君に没入することでしょう。女主人様、君から私は逃れられないのです。君が潤沢に優雅さと威信を持っているが故に、歌うことに没入するのが私の望みなのです。常にそうなのです。

(2) 女主人様、君の全長所がそこに解放されて横たわっています。夕方、明け方長所は君がすることを告げてくれます。君が語り合う人々も私たちが望むのと完全に同じように良き名声と良き生活の仕方を所持しています。君は人々に接することでお君の名望を増加させるのです。(3) 女主人様、君の同意が前提されれば私はちよつと君と話がしたいのです。君はそれを引き受けるでしょう。それが君を怒らせることがあればその時は止めます。君が若年で既に最高の完璧さに達したいなら、その時には友人には心地よいだけの充分な友情ある思いを示すといひのです。(4) 私が楽しい言葉も語っても、誰もそのことで私を罰することはないはず。そんな高度な娯楽も楽しい気分も得たことのない人は一体その他の何について話すのだろうか? 私は喜ばしい気分です。女主人様、初めて君の善意を知って以来明白にいままで何について話して来たかを理解しました。これら残っているモルンゲンの歌についてある評論家は次の如く解説する。

彼(モルンゲン)、ミンネの英雄に法螺を實現に移す段になると謙虚になる大口たたきの揺れ動くという動機が乗り移った、と。

34 甘く優しい女殺人者よ、君は心から傾倒している私を

殺そうとしている。女御主人様、どうか信じて欲しい。君が私を殺してしまえば私は二度と君の顔を眺めることはないとお考えですか？ それはない。君への愛は私を責めて君の心が私の心の女主人になるようにさせてしまふのです。ここで君の聞き入れを持たないことになれば、高貴なる婦人よ！その時は私の心は欠点のない一人の婦人に仕えるよう君の心に仕えることを保証しなければなりません。

これはモルンゲンの辞世の歌となり彼の体系の終着点を見る。死は救済でなく詩人にとって死は愛を霊的なものにし、終了させるものではない出来事とする。前節と後節の緩い撞着（矛盾）が見られる。女主人を殺人者としている描写はまるであるが、悪意ある純粹な甘い優しい女殺人者という余韻がそうである。愛は欲求を含むこととはない純粹な観照であり、至高の神聖さの幸福の像に例えられる形である。彼岸でもモルンゲンと一人の女性との関係は奉仕の関係として描かれている。しかし天の聖者の中では教会での愛の冥想の後確かに聖職間に序列階級はあってもどんな奉仕の関係も存在しないはずである。例外はある。天使と聖者の合唱隊は天の女王（マリア）に仕えるのである。この像を興奮して把握する。モルンゲンは愛人を聖者、純粹な女性として描く。純粹汚れなしは神の子の母マリアの最も好まれる形容詞である。ミンネザングにある彼岸での奉仕の図は14世紀まで影響を与え続けた。

35 長いこと私は物思いに沈んでいた。そして真の愛の喜びを持たずに過ごしてきた。今私の心が内奥で喜びに溢れる報告を人が私に齎してくれた。私は女主人様の所に御目通りを得ることになった。どうしてこの状況で曇ってなんかいら

れようか？ 君が赤い口元をして私に喜びをくれる時、私は決つてもう悲しんでなんかない。しかしそれは済んでしまった。それが私を悲しくさせた。

ミンネザングの力はシュタフェン王朝時代（12〜13世紀）王位帝位とも言うべき位を得、中世皇帝時代に全盛期に達した。愛人は作家より高位の地位を持ちミンネザンガーは彼女の前で距離を取り固くなった。手も足も出ない成就しない愛こそ最高の愛であった。肉の交わりは罪であり死であった。

II 時代の教育

作家にはパラドックスが必要となる。力は感性と知性の緊張、衝動と精神、男と女、下男と女主人、希望と幻滅、喜びと悲しみ、現実と狂気、思弁と涙、反省と夢、永遠の安らぎと永遠の振動の中にある。その中の充足統一が目標となる。

詩人と愛人との間には橋をかけられない距離がある。橋を架ける常なる試みがミンネザングの傷を構成している。その特徴を持つ求婚は作家の宮廷への憧憬の仮面である。イタリヤのカンツォーネ、日韓の歌謡曲に人は社会構成の基となる思考感情、芸術的形式への投影を見るようにミンネリートに当時の社会構成の姿を見る。地位低い騎士階級の統合努力という構造が投影されている。ある批評家は男女間の関係の中にいわゆる低位の騎士階級の社会状態や緊張の美的模像を見ようとした。ヒエラルヒーを写すものではあるが格言（箴言）詩というものではない。「騎士と姫」という関係は時代に色取られた奉仕の形として造形された。つまり歌い手は自分と主人との間に妥当する人生の関係（封建制的社会構成から条件付けられた形）を愛人（女主人）との間に転写した。彼女は封の女主人であり、彼は封臣であった。

こういう歌の形は騎士文化の一般的表現手段であった。出世のチャンスを切り取られた官僚の内省あるいは昇華であるのかどうかは上述のテーマとの関連で説明されねばならない。彼女らのあらゆる願望を満たす用意を供えている。しかし騎士たる男にはこれは自明の経過ではない。屈従謙遜断念は男らしいというより女々しい徳であり、マゾの体験、憧れの人生形を転換しようとした。男は同時代のある神学潮流が、女の中に必要悪を飲み喰いと同等に、礼儀保持のために屋敷や野原での労働のために認識することを主張した。女は低い価の人間、世界に罪を齎したとされる潮流であった。これは女を神の子の母と見るマリア崇拜とは真逆のものであった。古代のまた初期キリスト教時代の女性蔑視の影響であり、性欲の捌け口、セックスで煩悶を抜く対象としての存在とする反潮流が観察された。ビーナスはマリアの前の女性像ではあったが何人かの女性に捌け口としての女性観察を流神とした。しかし根本的状況を変えることはなかった。

一方リートは詩人の叶わぬ数知れぬ呪い、罵りの言葉で満ち愛を邪魔する制度上の敵に向けられた。例えば監視者、見張り人がいた。現実では感じづらいものではあったが、愚かな彼らを騙す必要があった。監視人は道徳的社会的タブーの具現された者であり体制の護持者であった。詩人と愛人の実際の柵は婦人の高い地位であった。憎き監視人は哀れな騎士が自己主張する際、衝突する環境の中全抵抗を擬人化していた。同時に競争する仲間を擬人化している。

ミンネザングは統合作品である。特徴は文学と音楽との統一である。歌には楽器（バイオリン、ハープ、クラリネット、太鼓等）による前奏があり、歌い手は解説者、表現者である。

リートは音楽なしで完成成立している。楽譜は補充品であり、リートは言葉の芸術品であり単純にして多様な形式韻の構成により魅力を付与された詩である。音節は二つに前節と後節の音楽的に部分に分けられ、前節は更に二つの段階に韻律的に分けられる。歌手はそれに誇りを持って新しい小節と思われる音節形を創造する。玄人芸の才能である。歌手は詩と韻律から、リズムと韻から新しいメロディを作り上げる芸術家である。才能が音節を詩、言葉と韻の響きの応酬で一流のリートへと仕上げていく。

叙情詩を目で受け取ることに慣れている近代のある読者にとつてリズムと響きへの耽溺は気取っている、余所余所しいと思われるかもしれないが中世の聴衆をそれが魅了し引き溜った。

女性蔑視とマリア崇拜の二極性に揺れつつも中世の西欧は次第に女性の霊的力を信仰する方向に傾きつつあった。美と強さの価値がミンネザングを通して高められて行く過程でもあった。

宮廷中のミンネザングの課題はホラチウスが言う如く封臣として役立つこと、教育することにあった。宮廷と貴族の世界観は祭りに現われた。祭りには歌、踊り、武の演武競演が参加した。ミンネザングは宮廷での自己表現を使い、明るい信仰心のある社会遊戯となった。それは美的思弁の自己目的ではなかった。戦うことを時に強いられた領主と貴族を補強する騎士階級を教育し宮廷を完全で安定したものとする奉仕的愛の表現であった。しかし自己の価値を高め、高揚した自己感情を制御する文化であった。新しい時代前の西洋の一つの姿であった。参考文献：Heinrich von Morungen Lieder Redam

名もなきナス料理

松林 厚子

ここ何年か夫が夏野菜を育てている。庭の一角を一坪ほどの畑にして、今年もそこにミニトマト、キュウリなどの苗を植えた。

ある朝、「はい」と渡されたざるに、長ナスが三本入っていた。前日に収穫した長ナスが二本冷蔵庫の野菜室に入っていることを思い出して、さて、どうやって食べようか、と考えた。夫も息子もナス嫌いで、我が家でナスを食べるのは私一人しかない。

「そうだ。醤油で煮よう」

ナスを多めの油で炒めて、醤油と酒、みりんを味をつけて軽く煮込む一皿は、母の好物だった。往年の料理研究家、村上昭子が『田舎煮』として取り上げていたレシピに似ていた。醤油で煮たナスは、濃い群青色というか、黒っぽくて、いかにも「田舎」で作られていそうで、いいネーミングだな、と感心した。

料理名は知らないままに子どもの頃から繰り返し食べた。時には醤油が味噌になったり、ピーマンやシシトウが入ることもあった。

小学校の高学年になった頃のこと。料理番組で「焼きナス」を知った。ナスを皮つきのまま丸ごと焼いてから、パリパリになった皮を手で落とし、実をだし汁に浸して、おろししょ

うがと鰯節をパラパラかける。なじみのある醤油煮と比べて、上品で食べてみたくなった。

「お母さん、次は焼きナスを作ってよ」

母に頼んでも、面倒なのか焼きナスが食卓にのぼることはなかった。それでは、と自分で作ることにした。ナスを買ってきて、魚焼き網に載せてころころと菜箸で転がしながら焼いた。思いのほか時間がかかった。飽きてきた私は、もういいだろうと、ナスを水を張ったボウルにドボンとつけて冷ましてから、皮をむき始めた。TVで見たように皮がぼろぼろとはがれず、爪を立てて無理やりに皮をむいた。皮と一緒に実の部分もごっそり落ちてしまい、残ったところは、やせっぽっちのへにゃへにゃになった。母からは、「皮と実の間が一番おいしいのに、もったいなかったね」と言われて、さらにがっかりした。

その後も我が家でナス、といえは醤油煮だった。母の気分次第で、素揚げやてんぷらになることもあったし、豪華版になると、肉のはさみ揚げが出てくることもあった。

結婚して、義母と二人で夕飯の支度をするようになった。「今日は、焼きナスにしようか」

当たり前のように言われて、私の心は踊った。焼きナスが

食べられるなんて。義母に言われるまま、ナスを洗いへたを落とすと、「薄く切ってちょうだい」という。心の中で、「へ？丸のまま焼かなくちゃ、焼きナスにならないでしょう」、と憤慨したが、新婚の嫁はにっこり笑って尋ねた。

「どのくらいの厚さにしますか」

義母はフライパンに油をひくと、五、六ミリに切ったナスを並べた。私は遠慮がちに聞いた。

「あの、この後、どうやって食べるんですか」

「皿に盛ったら、醤油をかけるだけ」

えー、そんな簡単なの？　これは、焼きナスじゃなくて、ただの「焼いたナス」だよ。義母は「醤油煮」を作らず、ナスと言え、この焼きナスか、てんぷらと決まっていた。

母も義母ももういない。

私は、真っ黒な醤油煮を七月に亡くなった母の霊前に供えた。

なあんだ！

古谷 耀子

海外から日本を訪れる旅行者が増えた今春、ロサンゼルスに住む従弟一家が来日した。

早くから日程を知らせてきていたので、私たち親族は歓迎のプランを練って到着を心待ちにしていた。

しかし何という不運。彼らに会う二日前の夜になって、私は激しい腹痛に見舞われた。救急病院へ駆け込み応急処置は受けたものの、肝心な歓迎の集いには残念ながら参加することができなかった。

数日間、服薬と食事療法に専念して一日のあらかたを自宅の布団の上で過ごした。

静かに横たわって天井をじっと見つめていた時、やはり米国西海岸に住んでいるもう一人の従弟が来日した折の顛末を思い出した。

数年前の晩秋、サンタモニカで暮らしている従弟が東京にやってきた。日本で卒業した高校の古希記念のクラス会に出席するのだと言う。前回は還暦の時だったので、その時から数えると来日は十年目になる。もともとその間、私が一度サンタモニカを訪れているので顔を合わせるのは五年ぶり。

彼は日本で医師免許を取得してしばらくすると、両親が仕

事で移住したロサンゼルスへ渡り小児科医として働いた。

病院務めはすでにリタイアしたが、米国の市民権も得ていた事から日本へは戻らずにサンタモニカに居を定めた。

彼から来日を知らせるメールが十月初めに届いた。東京滞在は一週間、宿泊先は都心の老舗ホテル。私と会うのは、ホテル内のレストランでディナーを書いてあった。

「嫌だ。ホテルのディナーなんか行きたくない」そう思うとすぐに返信した。

「どこか外へ出かけてみない？ 久しぶりにお墓参りなんかどうかしら？」

彼は祖父母と暮らした事のある唯一の孫なので、私は彼の里心をくすぐる作戦に出た。

残念ながらその手には乗らず、折り返し「ホテルの中で好きなお店を予約しておいて」とのすげない返事。

ホテルのディナーが嫌な理由は、ドレスコードが心配だったから。

まだ若かった頃に叔母と出かけた先で、私の着用していたズボンがそのドレスコードに反するからと帰された苦い経験がある。

そんな記憶もあったし、そのうえ普段から洋服には無頓着な私は衣類の持ち合わせも少ない。正式な場所への集まりに

は臆病になる。

今回は覚悟を決めて、そのホテルのドレスコードをインターネットで調べた。

男性に関してはジャケットの着用が必要なレストラン名などが出ていたが、女性のそれはどうも曖昧。画像で映し出されているのは若い女性の姿ばかり。こうなったら単刀直入、電話で問い合わせるしかない。

「宇都宮から近々そちらのレストランでディナーを予定している高齢の主婦なのですが、こちらは気温もだいぶ下がりました。それでスカートでは道中が寒いのではと案じております。ズボンで行きたいのですが、ドレスコードの方は大丈夫でしょうか？」

「お客さまご心配はございませんので。パンツスタイルでお願いいただけます。皆さまお召しになっていらつしやいますね。ただ、お靴はヒールのあるものをお履きになられているようですよ」

一難去ってまた一難。

〈後期高齢者が、カカトの高い靴なんか履いてバスのステップで滑って転んだらどうするのよ。駅のエスカレーターだって怖くて乗れません〉

ドレスコードの関門は通り抜けたものの、さて何を着て行けば良いのか迷った。服装の気がかりをディナーに同席する東京住まいの娘に打ち明けて相談した。

「お母さん、そんなに気合を入れなくたって大丈夫。他人の服装なんか誰も気にしてないわ。レストランに行ったらさっさと椅子に座っちゃえばいいのよ」

何とも心休まるアドバイスだった。

当日、手持ちの洋服を組み合わせて何とか外出着らしく装った。姿見でチェックすると少々アンバランスな部分もあったが、もうそんなことに拘っている場合ではない。靴も履きなれたローヒールをズボンの裾で隠すようにして履いた。

約東はホテルのロビーに午後六時。三十分前に到着した私は辺りを見回したが従弟はまだのようだ。取りあえずロビーのどつしりとしたソファアに深々と腰をおろしてみたが、どうも落ち着かない。上着の袖をたくし上げて何度も腕時計をのぞき込んだ。

職場から駆けつけた娘が玄関口に現れ、私を見つけて手を振っている。ホッと胸をなでおろし私も手を振ったが、アレアレアレちよつと待って、私には「気合を入れなくても良い」などと言っておきながら、アンタはえらくお洒落をしているじゃないの。

娘の服装を見て、私はますます自分の着ている洋服が哀れで老舗ホテルには相応しくないように思え、従弟に対しては何だか申し訳ない。

その時、少し離れた所のエレベーターから従弟が出てくるのが見えた。

ロビーのソファアに座っているのが私だと分かると、懐かしそうに私をニックネームで呼び両腕を大きく広げて駆け寄ってきた。彼の姿は、ジャケットどころかネクタイも締めてはいなかった。

随筆丸

柴崎 幸子

出会いが十五年くらい前になる。先生が審査する文芸賞に応募したことがきっかけだった。

「賞は逃したがこれからも書いてゆくなり、作品を読ませて下さい。感想を送ります」と連絡があった。面識のないどこかの男性の不思議な申し出に首をかしげながら、面白そうな船が目の前に止まったから乗ってしまったおう、という気持ちで作品を送った。

しばらくして、随筆教室が開催されるのでそちらに参加するのはどうかと、直接先生から誘いを受けた。私はそれまでの無償の個人通信添削指導に、動機を見つけられずにモヤモヤとしていた。先生に直接会えば理由がわかると思い、早速教室に申し込みをした。

初対面の先生は経歴から想像していた風貌とは違い、穏やかでお洒落なおじさまという印象だった。華やかな薄ピンクのシャツを私たちが褒めると、ちよつと恥らいながら、嬉しそうに目を細めた。教室は用意された席が埋まってしまふほどの人が集まり圧倒された。後に先生はこのように話していた。

「人が集まらないと困ると思い、事前に声をかけた人もいるが、まさかあんなに参加者がいてくれるとは驚いた」

この言葉を聞いて気付いた。実は先生も出港した「随筆丸」

という船が安全に航行できるのか、不安だったのかもしれない。

文章を学びたいという人々に、随筆の基本から応用を知らせるにはどうしたらよいものかと、先生も悩みながら教室正面に座っていたようで、

「最後まで作品を読んでもらうには独りよがりにならないように」と、何回となく繰り返した。受講生が時間をかけ思い悩みながら生み出した言葉たちを、バサリと半分以上も削る添削指導を大胆に行った。それがより良くなって、上手い具合におさまるのが不思議でならなかった。そんな随筆教室が十年以上続いた。

令和五年十一月十五日、先生の訃報が届いた。あまりにも突然すぎる。七月の誕生日には嬉しそうに微笑んでいたというのに、まさか、そんなはずはない。心臓が早打ちして、大きな波に気持ちが持っていられる。椅子に座り込み空を見つめる。しばらくして、いや、待て、本当にそう思っているのか。自分に問う。

先生が一人暮らしになって初めて書いた随筆がある。

『相撲中継を観ていて最良の力士が勝った、すかさず「今日は勝ったよ」と言って振り向いたら誰も居なかった』という

最後の結びだった。

これを読んだとき、ドキリとした感覚があった。悲しいだけではない何かもっと深いもの。そのときから今日の覚悟を持たなければならなかったのかもしれない。それなのにわざと気付かない振りをしていた。

急な知らせは気持ちが置いてきぼりにされる。まずは皆に知らせが回り、その後通夜、告別式、弔電、供花など誰がどうする、何をする、の相談が先になる。細々とした決め事や事務手続きは、一時悲しみを忘れるためにあるのかもしれない。

昨日の雨は上がり傘の心配はない。しばらく出番の無かった喪服に袖を通す。持ち物を一つ一つ確認する。数珠、真珠のネックレス、黒のストッキング、非日常の装いは鎧で身を包むように動きづらい。

時計を見ると、まだ時間はある。そうやって私はゆっくりと支度を整えた。三回目でやっとはめられたネックレス、足を入れて直ぐに破れたストッキング、それらはすでに今日の思い出となって流れてゆく。強い風と共に、先生とお別れした日の風景になる。

会場では涙を忘れて手配した我々の供花が、こちらを見据えている。祭壇を中心にして広がる空間を見回してみる。

先生の心が今この場所を見下ろしているように思う。僧侶のお経のリズムは気持ち良く聞こえるか、遺影はお気に入り写真になっているか、人々の表情は疲れていないか、と先生はたゆたいたながら心配されているかもしれない。私は天井を端から端まで眺めてみる。先生に見つけてもらえないように。

御棺の中に花を供えるよう会場の係の人に促された。紫と

黄色の花を差し入れて静かに場所を譲ろうと後ろに下がると「なんで俺より先に逝くんだよ」と言って語りかける人がいた。

ほんの四ヶ月前の先生は、「こうして米寿を迎えられるとは」と言って八十八歳を感慨深く受け止めていた。息をするものの生がどこでどのようにして終わるのか、決められるのは運命という神様だけだ。

最後の見送りのために建物の外へ出た。冷たくて強い風が吹く。でも、空はどこまでも青い。お別れをするために、そして気持ちに迷いがなくなるように心を強くして式に参列した。

先生は何を伝えたかったのだろう。文章の魅力や言葉の持つ力なのか。作者と読者がつながる楽しさか。十五年前に突然現れた船に飛び乗って見たが、いまだに「随筆とは何ぞや」の中で迷っている私はまだ何も見つけられない。言葉の海は深い。

花粉の気紛れ

小林 博

植物図鑑には自分の花粉で受粉する形態を「自家結実」と呼ぶ、とある。

ならば、「他家結実」という他人の花粉でちやつかり受粉する方法があってもいいはず。

文章教室の仲間が書いたリンゴの受粉の仕組みのことを思い出した。

「フジにフジの花粉を付けちゃダメなんだ。フジには秋映えがいいんだよ」

実際にリンゴの受粉作業を行っている農家の人から、直接聞いた話だから、疑う余地はない。

フジの雌しべにフジの花粉を受粉させても「自家不和合性」というリンゴ特有の、受粉を拒否する遺伝子が働いて受粉しないということだった。

「他家結実」はリンゴや梨の特有の受粉の仕組み、純血では病気や害虫がまん延すると全滅してしまうので、平和的に共同防衛で対処するようだ。植物の世界では浮気が許されている。

「他家結実」は根が張って動けない植物が、周囲の条件に順応して生き永らえる自然の摂理らしい。

人間の社会では、男の甲斐性で二号さんを持つことが許される時代もあった。今は他人の花粉を当てにすると「ヒモ」

と呼ばれたり、「セクハラ」と呼ばれる誘惑の機会も多く、意志の固さが試されている。

今年の夏は異常に暑かった。連日、熱中症警戒アラートが発令され、九月になっても残暑が厳しかった。

暑い夏の翌春はスギ花粉の飛散が多いと言われ、一層気が滅入った。

七月の新聞に、スギ花粉を抑える実証実験の結果が載っていて心が少し晴れた。

「食品添加物が主成分」の人体には害を及ぼさない薬剤を散布すると、スギ花粉をまき散らす雄花の花粉を、約九割減らすことが出来る、と伝えていた。雄花を痛めつけて花粉を減らす作戦らしい。

実験は思惑通りの成果が得られたと報じていた。高齢者の花粉症の人にとっては朗報。幼い頃はスギの花粉でクシャミ、鼻水など考えられなかった。

実験を指導した教授の話では「スギの樹木を切ったり、植え替えたりする対策もあるが、薬剤の散布が最も効果的に花粉を減らすことができる。安全性や環境への影響を検証し、効果を確認したい」と頼もしく言い放っていた。

今年の夏は、暑いうえにコメ不足が加わり、一層憂鬱にさ

せた。そのコメ不足の理由が振るっている。

去年の八月末の暑さで白濁米ができてしまつて、一部の地域では米の作柄は不作だった上に、外国人の旅行者の増加で米の消費に拍車をかけた、というのである。外国の旅行者のインバウンドが増えることを、目標にしてきたのに。

新潟大学の農学部「暑さに強いコシヒカリ」の品種改良に取り組む様子も紹介されていた。

暑さに強いコシヒカリをビックアップし、それを育てて安定化させる。「桃栗三年、柿八年」と言うから、莫大な労力と長い年月を要することが予想される。

そんな悠長なことではなく、八月の暑さを避ける方法が五十年前の栽培方法にはある。

子どもの頃の田植えは五月中旬から六月中旬で、九月から十月に収穫だった。昨今は機械化されて四月中に田植えを行うから、二か月ほども早まっている。ちょうど暑い盛りと稲が実を結ぶ時期とが重なってしまう。

そんな素人考えを引き合いに出していたら、父のニンマリした顔が浮かんだ。

「稲の開花は十一時と決まっています、一時間しか咲いていない」

と父は頑なに信じ切っている様子。稲の開花時には午前中には田んぼに入らなかつた。稲の受粉を妨げないためだったのだろう。

土用の頃に田んぼの水を抜き、八月末の出穂の時期には水をたつぷり田んぼに入れていた。

今に思えば、稲を暑さに慣れさせ、冷たい水を田んぼにたつぷり入れてクーラーダウンを図っていたのかもしれない。私

は稲に花が咲くこと自体、このとき初めて知った。

スズ花粉と暑さに強いコシヒカリの実証実験のその後が気になる。

暑さに強い稲の品種改良の取り組みが真剣味を帯びるに従い、やっぱり危険な暑さの夏は毎年くる、と覚悟しなければならぬ。

今年の七、八月の気温は、気象庁が記録を取り始めて過去最高だったと報告している。去年も異常気象といわれた。一昨年とも異常気象と言われている。危険な暑さは異常ではなくなつてしまった。

スズやヒノキは雌雄異株（雌しべと雄しべが同じ花に付かない）、雄花は花粉をあふれるほど沢山飛ばし、雌しべに気に入ってもらふ。

あぶれた花粉はどこに行くのだろうか、まさか腹癪に人間を苦しめるのだろうか。

夏には危険な暑さにボヤキ、翌春はくしゃみ鼻水に悩まされる。冬と夏が目立ち、四季が二季になつてしまった。

俳句に「秋思」という哲学的な秋の季語がある。秋が短いと「秋に思う」が無くなってしまう。

財布がない

関根 喜久枝

十月十日に夫と二人で多摩霊園にお墓参りに行った。霊園には有島武郎、石坂洋次郎、大久保利通、山本五十六、三島由紀夫らたくさんの著名人のお墓がある。

墓地は今年の夏、雨がよく降ったので雑草が驚くほど延びていた。早速草むしりをして掃除を始めた。その日は天気予報で夏日になると報じられていた。首にかけたタオルが汗ですぐに濡れた。一時間ほどしてやっときれいになった。夫が延びた木を切っていたので、墓石を洗うために私がバケツを持って水を汲みに行った。歩いて五分位の所に洗い場がある。満杯に水を入れたバケツを運んでいると、夫が伐採した木を捨てに来ていた。お墓に戻り墓石を洗ってお花を飾った。焼香し手を合わせるとほっとした。二人共満足して、

「きれいなったわね」

と言いながらお墓の前でお弁当を広げた。姑が元気だった頃は三人で話をしながらいた事だ。夫は、

「本当にいい天気だね。風もないし穏やかな日だね」

見上げると青空がどこまでも広がっていた。帰り支度も終わりバックの中を見ると私は驚いて思わず大きな声が出た。

「財布がない」

夫は、

「車の中に置いてきたんじゃないの」

とのんびりした事を言っている。私は、
「盗まれたんだ。だけどいつかしら。荷物を置いたままお墓を離れていたのは五分位だったのに」

身体から力が抜けそうだった。苛立つて夫に、

「あなたは私が水を汲みに行つて戻つてから小枝を捨てに行けばよかったのよ」

「そんな大事な物があるなら行く時に言っておけばよかっただろう」

互いに声が荒荒しくなった。太陽がじりじりと照りつけ額から汗が流れた。近くの花屋さんに水桶を返しご主人に、

「置引きの被害にあつてしまつて。管理事務所に届けておいた方がいいですか」

と聞いてみた。

「お財布にたくさん入っていたんですか。近くに交番があります。そちらへ行かれたら」

教えられた交番に行き被害届を出した。警察官は一部始終細かく聞き取り書類を作成していった。五十歳位の警察官は、

「落としたんではないですね」

私は、

「お花を買つてお財布はバックにしまいました。まちがいはりません」

被害届けを出すまでに二時間も費やした。帰る時、

「財布を取られてから夫と喧嘩になりました」

「悪いのは盗んだ人ですから喧嘩しないで下さい。最近はお墓でお墓参りをする人も少なかったで置引きの被害もなかったんですけど……。お墓から離れないで草むしりをしていても盗まれた事もありました。その時もご夫婦で来ていて奥さんが『あなた何で気がつかなかったの』ともめていました」

と説明された。

墓地には置引き注意と書いた看板が立てかけてあったが、自分がその被害にあうとは思わなかった。財布には現金の他に免許証、ナナコカード、福田屋と東武デパートのカード、病院の診察券が入っていた。現金の被害よりカードの紛失の方が大きかった。夫とはその後も気まずい雰囲気でも過ごしていた。三日後に運転免許証の再発行のため鹿沼の免許センターまで夫が同行してくれたので、気持ちが静まりやつとあきらめる事が出来た。

今までのんびり過ごしてきたのでこれからは気を引締めて生活していく様にと墓に眠っている姑からの警鐘のメッセージだったかも知れない。そんな気がしてる。

玉砕地に届いた祖母の祈り

館野 ひろ子

無謀な戦いの代名詞ともなっている、インパール作戦の事だ、下野新聞に掲載されていた。

『平和のかたちーとちぎ戦後79年ー』と題した記事だ。九年前の戦後七十年の時の記事も再掲されていた。

そこには、

「部隊千六百人で出発し最後は二十人でした。みんな、人間じゃなくなっていた」との談話があった。それは叔父が終戦後、生還できた戦友の力を借りて記した『インパール作戦五三四日』という記録本に繋がっていた。

インパールでの昭和十九年三月から終戦までの戦いの様子と、戦友たちが戦死した場所を記している。

現地で筆記したものではない。戦後、生き残った人たちの記憶を辿って記したのだと聞いている。

○月○日 友軍の前進陣地が次々玉砕

○月○日 ○○少尉、○○兵長戦死

等、一行だけの記録の日が多いが、一日も欠かさず五三四日が記録されている。時に悲惨な状況説明に読むことを躊躇う記録の日もある。若いイギリス兵と生きるため必死に取っ組み合ったことも淡々と記録している。

目の前で銃弾に倒れる戦友の様子を記録した日もある。

インパールを知る者は少ないだろうが、『ビルマの堅琴』という本の感動的な舞台になった戦場だ。映画にもなった。私も心に残る感動した映画だった。叔父にはその感動はあったのかどうか、聞いても無言だった。

作者は従軍者ではなかった。あまりにも過酷な武器も食料もなく、さ迷い、攻撃され畜生道に落ちていく様。戦死・餓死・病死した兵士が、累々と重なり朽ちて放置され、道なき道をさ迷う兵士たちが想像され、どうにかならないの、助けてあげて、と無性に怒りが込み上げてくる。

後に白骨街道と呼ばれている状況を知らされ、『ビルマの堅琴』にみる感動を見つけることはできない。

戦後三十年間、孤独な戦いを続けて発見された、小野田少尉のドラマは、日本の戦時体制の残酷さを見せつけるものであった。驚かされたのが三十年以上の日々、記憶した状況に、わずかな狂いしかなかったという信じられない人間の能力と、叔父たちのそれと重なってくる。極限にある時の人間の脳細胞の謎の働きに、驚嘆してしまふ。

叔父が玉砕地で執拗に攻撃されている頃、私と祖母は、朝な夕な、裏山に祀ってあるお稲荷さんを拝んでいた。

ももごと口の中で唱え、最後に「くんなんしょ」と言っ

て祈っていた祖母が浮かんでくる。

叔父の無事を「どうぞ生かして、帰してくんなんしょ」だったのだろう。祖母の傍らで拝む、幼い私も透けて見える。

叔父は、二十歳でシナ事変に出征し、インパール作戦開始十九年三月一日からビルマに送り込まれ、五月十九日には玉砕の命令が下りていたと、記録されている。この地で三万人が戦死したという中で、終戦二年後、ひよっこり出征八年目にして、満身創痍ながら叔父は生還している。

生きて帰った叔父に、祖母は家屋敷の処分をした。叔父が生きていく資金のために。祖母と私の思い出の故郷はこの時失われた。

故郷を無くした祖母は、軍事工場の社宅に住む私たち家族と一緒に暫く暮らしていたが、叔父の商売に目途がつき、東京に移って行った。

しかし都会での暮らしに、何かにつけ抵抗していたらしい。叔父の家の手伝いをしながら大学に通っていた兄から、在京中の祖母の様子をよく聞かされていた。

「わっちにはもう、ける所がねえ。けれど、ジャガイモやニンジン^{ニンジ}を、なぜ買わなくちゃなんねえんだ」と、祖母が愚痴る。

「ほんじゃコンクリートの道路に、穴をかつぽじって、野菜の種さ蒔いてよ、肥をぶんまけっかい」

叔父と祖母のやりとりは、まるで掛け合い漫才を見ているようだったという。

不自由な身体で、叔父は生かされた者の役目として、記録本を仕上げていた。グアムで横井正一さんが発見されたころである。形こそ違え戦争という刻印を背負って後年を生きた

二人は、相前後して亡くなっている。

数年後、叔父の法事で戦友たちが叔父を語るのを聞き、叔父や祖母の懐かしい言葉が甦ってきた。

「あの、私、祖母にぶんぬきだって言われていた孫娘です。祖母といつも叔父の無事を祈っていました。祖母には叔父と年の離れた兄妹みたいにぶんぬきだとも言われていました」

叔父の写真の隣に立つて参会者に言った。

「ぶんぬきってなんです」

九十歳を過ぎたという戦友の一人が聞いた。

「似ているってことなのだそうです、もっと、そっくりっていうことだそうですよ」

私は叔父の写真に顔を寄せた。

「ぶんぬきだね」別の誰かが笑いながら言った。

「この写真、今の私と同じ年くらいでしょうか。私は、叔父が戦争に行っている間、祖母と二人で暮らしていたんです。叔父の戦地が玉砕したというころ、毎日お稲荷さんにお参りしていたんですよ。祖母は、生きて帰してくる。死なせねでくんなんしょって、お祈りしていました。必死な思いが幼かった私にも伝わって来ましてね。私なりに懸命でしたよ」

「あなたの叔父さんが、玉砕地から生還できたのは、息子を思うお婆あちゃんとあなたのお陰ってわけですね。おかげさまで、行動を共にした私も守られたってことですな」

叔父の部隊の隊長さんだったという白髪の人が、叔父の写真に最敬礼し、私にまで敬礼をしたのだった。

どうしようもない変化

国井 和子

九月ごろの下野新聞に「未利用公共施設は十七カ所」の見出しがあった。県北の方の町の様子である。

記事によると、未利用施設は廃校になった教育施設や公民館、文化会館、観光施設などである。継続的な維持管理費などが課題であるらしい。

これと同じような課題をかかえている市町は多い。時の流れに従って設置した施設などが、無用の長物となって財政を圧迫し始めている。

これらの悩みは、公のもののばかりではない。個人の家や不動産も、古くなったり使用しなくなったりで、その管理に苦慮している人の話をよく聞く。建物の周りの雑草なども、藤つるなどが生えてくると、驚くべき速さで家全体を被い込む。

現在、私の近隣でも急速に空家が増えてきた。空家に続く放置された田畑には、丈の高い雑草群の上に何やらごみのようなものが投げ捨てられてある。

先日、散歩道の途中で毎日見ていた家に「売物件」の大きい看板が立てられていた。庭先で花の世話をしている老夫婦を見かけたが、二人はどうしたのだろうと気になった。

私の家の前方にも、二十年ほどは住んでいない二階建の家がある。三十坪ほどはあろうか、バランスの良い形のすつきりした建物である。軽トラックが何台かきて、中の荷物を運

び出すことがあったが、間もなく「売家」の看板が壁に張られた。

その後、管理する不動産会社の社員が、見周りに来たので話を聞いた。

「最近では中古家専門の会社が増えてきましたね。リフォームをして売り出すんですが、私どもはすべて現状のままの売買です。リフォームも今は採算が合わない場合が多いんですよ」「でも住むのに、手を入れなきゃならないでしょ、この家なんか長く放ってあったから、水まわりも相当痛んでいるでしょうし」

屋根もさびているが、雨漏りなどしないのだろうか、と思いつながら言うところ、

「まあ、買い主はいろんな方がおりますから。壊して更地にする、うわ物がある時より値が高いという例も多いんです」中年の社員は、なめらかな口調で説明をする。必要な部分だけを買えばリフォームして使い、利用しなくなったら、また売り出す、というのが、いま時のやり方らしい。

昨年のこと。親しくしていた近所の人が、突然あいさつに came。隣り町に住む孫のところで同居することになったと言う。

「我が家もいつの間にか古くなってしまつて、あちこち修繕

しながら住んでいたんです。家を建て替えたかったんですけどね。なにしろ長年住んでいたし、便利なところなので、ほかへは行きたくないからね。しかし壊すのに大変なお金がかかるんです。小さい家を建てられるぐらいに。壊して新しく建てるだけの出費ができないし、もう先も短いから、家は売って孫の世話になることにしました」

いつも元気な人なのだが、淋しそうな口調で言う。

こうしてまた一軒、親しい人が居なくなってしまった。実際、建物を壊してその廃材を処分するのは、大きな労力と金銭を必要とする。庭の樹木を剪定した枝葉を処分するにさえ、驚くほどの経費がかかる。

七月の或る日、私は実家へ行くために、久しぶりに山道を車で通過した。道路は車二台が並んで走れるほどの広さがあるのだが、一方は山で古い立木が続いている。木の枝が道路の方に広がり、数本の折れた枝が道の真ん中に散乱していた。少々億劫だったが、車から降りてそれらの枝を山の中に放った。枝は枯れて折れたはずなのに、ずっしりと重く、引きずる方法でしか移動できない。

そういえば、東京でイチヨウ並木の木の枝が折れて、下を通行していた男性が死亡するという事故があった。枝はそれほど枯れていたわけではないのだが、折れて落下したという。今年の水不足などで、樹木の水分が不足し枝が弱ったのではないか、との解説もあった。

私の住む近辺の山道は、折れた枝の落下などひんぱんに起こりそうで不安がある。

この山道は竹林が続くところが多い。竹の管理は意外に大変で、少し強い雨や雪の日などがあると、道路に低くたれ下

がって道を塞ぐ。そのため竹林の管理者は、道路の方へ竹が伸びないように、絶えず伐採をする必要がある。

我が家にも道路に面した竹林があるのだが、管理がどうにも大変で、きれいに全部切ってしまったことがある。しかし、二、三年もすると、竹はいつの間にかぞっくりと生えて、伸び伸びと成長していた。

かつて竹は生活の必需品だった。農作業や家まわりの防風に使われるとか、竹専門の商売などもあったが、今はまったく使い道がない。

わずかに、春先に生えてくるたけのこを取るぐらいの利用である。

自然の樹木を維持管理をするのも、建物のそれ以上に労力や経費を要する。

何事によらず、時代の移り変りに伴って、変りゆく諸事情に対応しなければならぬことは、あまりに多くあり過ぎる。何とかしなければ、何とかしてほしい、と願っても、どうにもならないでいるのが現状である。

萎れた花びら

国母 仁

真つ黒なマニキュアの爪が伸びてきた。

腕には桜の花びらのタトゥーが彫られていた。いくつもの花びらが咲き乱れていた。黒いマニキュアはペン先のように尖っていた。

梅肉入りの飴は残り一袋しかなかったから手を伸ばしてきただけ。飴は甘みが少なく好みの味なのでスーパーに行くたび買い求めている。わずかだが私の手にマニキュアの爪が触れた。

振り向くと照れ笑いをしていた。まだあどけなさが残っていた。顔のパーツは一つ一つが人工物のように整い孤立していた。どう見たって日本人顔ではない。茶褐色に濁った肌色をしていた。南米人の顔だった。以前、私の店に来ていたペルー人の女の子に似ていたから。

どうして、若い娘がタトゥーなんか入れているのかと彼女の背景が気になってきた。両親が日本に出稼ぎにきたので、あとから日本にやって来て言葉の壁もあって学校には行かないで遊び仲間と付き合っているうちに、タトゥーを入れてしまったのではないかと深読みしてしまった。

今の若者はタトゥーをファッションの一部として入れているから昔のような暗いイメージがない。その証拠に堂々と腕をまくり晒している。隠す気は全く見られない。外国のスポー

ツ選手も堂々と見せびらかせている。人気スポーツのサッカー、アメリカンフットボール、バスケットボールの選手に多い気がする。子供たちに影響を及ぼすことはないのかと懸りではあるが、大人が考えるよりファッションのパーツとして捉えているのかもしれない。若者が入れているのはタトゥーで反社会の人間が彫っているのは刺青のような気がするが、その境目は何処で判断するのか分からない。

昔は刺青をしている人間はヤクザか特殊な職業ときまつていた。たまに素人が自分で彫ったのか墨がぼやけてきて桜の花びらが消えかかっているのを見かけたことがあった。

五十年前に店を開いたときに角のカウンター席に七十代の男の人が腰を下ろした。目つきがまるで鷹が獲物を狙うように鋭かった。男が長そでをまくり上げた桜の花びらがのぞいた。これはヤバイ客が入ってきたなと疎んでしまった。咽喉がカラカラになり言葉を発しようとしてもうまく出ない。こういう時はどう対処したらいいのかと言うマニユアルもなかった。男が来るとは範疇になかった。まさか、開店と同時に墨男が来るとは範疇になかった。

緊張しすぎてピンと張った糸が今にも切れそうになった。「オレは近くに住んでいるYと言うものだけれど、お宅は何処から来たんだい」

と脅すように低重音で迫ってきた。

ここで怯んだら後で絡まれる恐れがあると、なるべく語気を強めて「K市の方から来たんです」とゆっくり返した。

「K市の何処ら辺だよ」

「K市分かりますか」

「オレは大工だから、いろんなところで仕事をやってきたから大体わかるよ」

会話が滑りよくなってきたて、最初の印象とは違って人の良さそうところが言葉のすき間から零れてきた。

「オレは、仕事中に二階から落ちて腰を打ってしまつて今は休んでいるんだよ。毎日ブラブラしているからかあちゃんに文句ばかりいわれているよ」

「どうやら氣に入つたのか頻繁に顔を出すようになってきた。」

店に入つて角のカウンター席に座ると「酒くれや」と放つた。彼の目的は食事ではなく酒を飲むことだと分かった。飲むと氣が大きくなり隣のテーブルのお客さんに絡むようになった。

「オレがおぐつてやるからのみなよ。この店は顔なんだからつけも利くから心配するなよ」

勝手につけが利くと言いつた。氣の弱い客は店に入つて来るなり彼の顔を見るとすぐに帰つてしまった。

ある日、昼時の忙しい時に来た。

「酒をくれや。冷でいいから」

「駄目だよ、昼間から酒を飲んじや」

「なんだと、客が酒をくれと言っているのにくだらないのか」

「他のお客さんに迷惑がかかるから」

いつものカウンター席に座りながら大声を発していたが、いつのまにかうつぶせになり寝てしまった。いくら声を掛けても返答がない。このままにして置いておくわけにはいかず困惑していたら、常連のMさんが来た。

「どうしたんだい。何かあったのか」

「昼の忙しい時に来て酒をくれと言うので断つたら、ここで寝てしまったんだよ。本当に困つたよ」

「あれ、Yさんじゃないの、どこの店へ行つても飲んで大声出して迷惑をかけているから嫌われているみたいだよ」

Mさんは顔が広いからYさんを知っているようだった。

「このままにして置くのも他のお客さんに迷惑が掛かるから帰つてもらおうと思うんだけど」

「だったら、車に乗せて送つて行つたら。オレも手伝つてやるから」

MさんはYさんの家を知っていた。Yさんを二人で抱きかかえるように車に乗せて送つて行つた。田んぼの中に入母屋の一軒家があった。かなり年月が経っているのか壁の一部がはがれていた。庭は雑草に覆われていた。

抱きかかえて家の中に入つてゆくと女の人が腰を曲げて出てきた。

「あれ、どうもすみません。飲むといつもこうなんですよ」

深々と頭を下げ続けた。

数日後、常連の外人のTさんが生ビールを飲んでるところへYさんが入ってきた。Yさんも生ビールを飲み始める。カウンター席で向かい合わせになる。Yさんがいつもの調子で、

「生ビール一杯おぐつてやるから飲みなよ」

とチョッカイ出すがTさんは相手にしなかった。

Tさんは酔っ払いが嫌いだったから無視し続けていた。

「なんだよ、バカにしやがって。おぐってやると言うのになんとか言ったらどうなんだよ」

「やめなよ。そんなに押し付けけない方がいいから」

「外人さんと、仲良くなろうと思っておぐってやろうとしているのにその態度はなんだよ」

Tさんは生ビールを飲みながら枝豆を食べていた。殻は受け皿に山盛りになっていた。Tさんはアメリカから来て高校で英語を教えている。日本に十年住んでいるから流暢とはいかないが喋ることもできる。毎回、ラーメンを食べる前に生ビールを嗜んでいる。Yさんがだんだんエスカレートしていった。あまりの執拗な絡みにとうとう嫌気がさしてきて枝豆の殻をYさんに投げつけてしまった。

「あなた、みんなの迷惑ですよ。帰ってください」

「何だ。このヤロウ。いくら外人だって帰れとはふざけんじゃねいよ。下手に出ればいい気になりやがって。日本刀持ってきてぶった斬ってやるから待っている」

いきなり店を出て行った。私が追いかけて宥めてもかなり興奮していて怒りが収まらない。

「落ち着いてくださいよ。相手が外人なんだからおおめに見てやってください」

「なんだよ、マスターは外人に味方する気かふざけんじやないよ。枝豆の殻をオレに投げつけやがって」

いくら宥めても一度沸点に達してしまった熱はなかなか冷めない。家に帰って日本刀を持って来られては事件に発展しかねない。ここで帰したら取り返しがつかなくなるから必死

に体を押さえて謝り続けた。

「いくら、マスターが謝っても許すわけにはいかないからな」
着ていた長そでシャツを脱ぎ捨てて上半身裸になってしまった。背中の桜の花びらが萎れていた。

糸井哲夫さんとの益子での出会い

藤田 香月

糸井哲夫さんは、かつて益子に住んでおられた。陶芸家であり、版画家でもあって、更に詩人であるとも言われていた。初めてお目に掛かる日、私は待ち合わせ場所の、共販センターシックスギャラリーでお待ちした。

丁度その日、ギャラリーで絵画展をされていた方は、糸井さんをご存じのようで、「糸井さんは初めての人には会わないはずだが……」とか、「糸井さんの家に行っても座る所が無いよ！」などと言われたのだった。

私は「座ぶとん一枚分があれば大丈夫です」と返したが、約束の時間が過ぎててもなかなか見えず、正直不安になっていた。だがドアの所で通りを見ていると、前かがみになって懸命に自転車のペダルを踏んで、こちらに向かってくる人がいた。糸井さんだった。

糸井さんの家は、ギャラリーからさほど遠くない林の中にあつた。入り口から近い開け放たれた部屋（座敷？）が目に入つた時、さすがの私も一瞬、ギョツとしてしまった。

部屋の中は物で埋め尽くされ、わずかに人ひとりが通れる中の細い道ができていた。次の間に通され、私は座ぶとんに座った。

そつと回りを見回してみると、四、五十センチほども積ま

れた物たちに囲まれて私はいた。

糸井さんは「ちよつとゴメンナサイ！」と言われると、私の膝前に片足を着いて軸とし、もう片方の足を大きく振り上げて物たちを跨ぎ、ご自身の定位位置に座られた。

畳半畳程のその場には座布団とお湯のポット、建水があり、すぐ近くには三、四個ずつ重ねられたお茶碗が幾列にも並び、棚の上にも、お茶碗や、少女の顔のテラコッタなどが見られた。

糸井さんは平茶碗の一つに小布施の栗落雁をのせると、静かに私に差し出された。落雁をいただいていると、糸井さんの周りに積まれている箱は、栗落雁の空き箱であることに気がついた。

糸井さんは、静かに、丁寧にお茶を点ててくださっている。バロック調というのだろうか、隣の部屋からは、低くおごそかな響きが流れてくる。

糸井さんは無言で、だがどうぞと言うようにお茶碗を私の方に差し出される。私は手を伸ばし、物たちの上で手渡されたお茶碗を受け取り、押し頂く。なぜか、とても清らかで静かな空気が感じられた。

飲み終えたお茶碗を膝上に置いていると、「どうぞ」と急須を差し出され、一瞬戸惑ったが、お茶碗を差し出すと何や

ら注いで下さった。なんと、それは紅茶であった。それも香りの高いアールグレイのように思われた。

こうして、初めはたしかに驚きもしたが、徐々に糸井さん流のお茶のもてなしも嬉しくなり、何度か伺わせていただくようになっていた。時には林の中で点ててくださったこともあった。お菓子ほとんど栗落雁であったが、良寛さま好みと言われる白雪糕（しらゆきこう）のこともあった。

良寛さまの五合庵を訪ねる際には、白雪糕とお茶の道具をこのようにして持って行くと教えていただき、私もこれを真似て、出かける時には旅茶碗を持参して楽しんでいる。

糸井さんは版画に、濱田庄司、合田好道、加守田章二先生方の似顔絵や親しみのあるお姿をはじめ、焼物に携わる方々の働く場面が描かれた「益子百態」や「益子百窯」として窯場風景などをたくさん残されている。

刷られた版画をご自身用に綴じた「益子百態」を拝見させていただいたことも忘れられない。また益子の地名（小字）や風景もよくスケッチされたとのこと。手許には「たかたて（高館）」や「野寺」の文字を刻された小作品が見られる。

糸井さんは、いつも版画作品を丁寧に、たとう紙におさめ題をつけて渡して下さった。益子の人々、生活、花や風景をこよなく愛されておられたことが伝わってくる。

だが、東日本大震災がきっかけとなり、糸井さんは出身地の栃木市に戻られた。そしてその後、お会いすることもないまま亡くなられたことを知った。

いただいた版画の中の二つには、糸井さんご自身のことと思われる歌が描かれている。

（朱く染められた阿修羅像の絵に添えて）

三佛を彫まんとして対へとも

今日の心は阿修羅の如し

（正座して感慨深げな面持ちでお茶碗を持つ、自画像らしい絵には）

絵をかゝむ歌もよみたし書もかゝむ
陶焚くわれは茶をたてゝのむ

糸井さんの座られておられた回りには、お抹茶の缶がいくつも並んでいたことが思い浮かぶ。

今良寛のようなお方でもあったと、ひとり思う。

特集

かけがえのない言葉

パレイドリア

福富 陽子

高校時代、通学時に乗ったバスの木製の床。不定期に廃油だかコールドだか知らないが、それが床一面に塗られた日には思考は停止し、授業中は宇宙を漂う夢を見て眠り続ける症状が出るほどひどい異臭を放っていた。腐敗防止のためだと聞いた。

もともと学校へは勇んでいく性分ではなかったからバスが臭いとなると学校へは行かなかった。バス通学以外の手段がない遠いところに学校があったため出席日数は毎年危うい状態に陥った。しかし、バスに乗りたくない理由は他にもあった。その床に大きな顔が見てとれるせいだった。

友人たちに「口を開けた老人の顔がある」と言っても「気のせいだ」と誰も共感してくれない。床一面に広がる嘆きの顔は、まさにこの世の終わりといったテイだ。いつしか私もそれと同じ顔つきになった。

ある時、帰宅のバスの中で、ふだんは無口でほとんど誰とも話さないKさんがいたので話しかけた。

「床に顔がある学校行きのバス、知ってる？」私の戯言扱いされ続けた問いに、彼女は「ええ」と即答した。

ココロオドルとはこういうことか！ 私は高揚した。

「おじいさんが嘆いている顔だよ」と続けた私に、「でも斜め前から見ると船に見えるから私は好き」とKさんは言っ

た。——船？ とにかく床の件をわかってくれる人がいた！ 嬉しい気持ちと同時に、この人は悪しき光景を別の角度から佳きものとして見ていたのか。衝撃が走り、その時から私の呂律が変になった。行動にも変化が出た。不穏な油が塗られていようとも私は布製の厚手のマスクをして例の朝七時五〇分発のバスに意気揚々と乗るようになった。見る角度によって床は島が浮かぶ海原にも見えた。

しかし、別の問題は免れない。その時点で、今後全力でバスを拒まず残りの必須日数を踏破しようとも私の出席日数はトロツコで急行列車を追うごとき悲惨な状況だった。

後々、心理カウンセラーになるべく学んでいた途中、対象を本来のものと違うものに見てしまう「パレイドリア現象」を通過したが、違和感があった。「心理現象、錯覚現象」と言い切る解釈には依然として何か言いたい。

あの時のKさんの「斜め前から見ると」の発言こそかけがえのない新鮮な響きがあったが、彼女はバスの床を誰とも共有せずひとりで楽しんでいたと思ったら、その潔さに嫉妬さえ感じた。対象を前に感受具合を誰かと共有できなくても、自分の内側はとめどなく豊かになると思うようになった。わかる者だけにわかってそれでいい。錯覚にしてもその現象に罪はない。

高校の出席日数の件に関しても、先生方に「錯覚現象」が起きたのか、私は卒業を許された。それとも卒業したと私が思い込んでいるだけなのだろうか。

短い言葉

安西 悠子

日本の軍部が、“大東亜戦争”と称していた頃、昭和二十年（一九四五年）、ラジオから流れるニュースの冒頭のメロデーは、年初の時の様な明るい“軍艦マーチ”ではなく、悲しい曲の“海ゆかば”のメロデーが流れる様になった。軍部が敗戦を隠蔽しようとしても人々には、不安な戦況を感じとる日々であつた。

この様な折に、伯父に、召集令状が届いた。令状の外に、注意書きが添えられていた。それは、

“出征は極秘に行うこと。よって、見送りは一切無しとする。軍服は着用せず、平服のこと。軍刀は、目立たぬ様隠し、風呂敷などで包むこと。”という文書である。

当時、戦争を指導していた軍部は、敗戦の現実を隠し、国民には、徹底抗戦の意識を煽り続けた。この少し前までは、召集令状が届くと、名譽なことで、入隊の朝は、親戚、町内、友人達が、賑やかに、大前神社に戦勝祈願をいたし、人々は、日の丸の旗を打ち振り、駅まで見送るのだ。それをするな、隠密裡に入隊せよ、との事なのだ。理由は、アメリカ側の諜報機関に、本日、何人の軍人が召集されたかを知らせない為だ、という。

その後、B 29爆撃機が東京を焼け野原にしていた。

伯父の出征の日、小さな淋しい駅には、見送る人も無く、

伯母と三人の子と私だけが、ひっそりと立っていた。

ジーゼルカーが一両、ホームに止まった。伯父は、車のステップに足をかけながら、

「体を大切にするように」

と、伯母に言った。伯母は、深く頷いた。自分は、命を捨てに戦場に赴くの、残してゆく家族に、「体を大切にせよ」と、申したのだ。

或る日、町役場から、伯父、戦死、の公報が届いた。伯母は、信じなかった。やがて届いた“白木の箱”の中には、伯父の髪の毛一本、爪の一片も無かった。

ある秋の日、見知らぬ青年が訪れ来た。彼は申した。

「中隊長殿は、ニューギニアの戦線で、敵の弾が胸に当たり、亡くなれました。私は、幸い、復員できましたので御報告に参りました」と。

彼は、敗戦後、復員できたという。彼の言葉に、伯母は、失神してしまった。

残された家族は生きている。

“体を大切に”と、言い残して去っていった伯父は、“生きているのだぞ。生きていれば何事も出来るのだ。”と、伝えなかったのだ。

短い言葉を残して、伯父は、魂だけの存在になってしまった。

お帰りなさい

高杉 治憲

私たち夫婦が、昭和四十七年五月に結婚して暮らした場所は、郷里の佐野市が始まりだった。その五年の生活にピリオドを打つことになったのは私が経営する会社の悲慘な倒産のためだった。あの日、自宅で幼い子ども二人と共にいつものように私の帰宅を待っていた妻に、私からの突然の電話によって破綻が告げられた。

「会社が倒産した。急いで身の周りの物をまとめて東京に逃げろ」突き放すような言葉だったに違いない。半月後、緊張と疲労を引きずって、その時はまだ仮住まいだった家族の元に辿り着いた私を迎えてくれたのは、『お帰りなさい』の温かいひと言と母子三人の笑顔だった。妻は、悲しみや不安、そして不満の一切を全て笑顔の奥にしまってくれていた。翌年の九月下旬、私は、倒産した関係会社の債権者から告訴され、不起訴処分になるまでの二十二日間勾留されて人生のどん底を噛みしめた。逮捕されるまで何も知らされてなかった妻が子どもを抱いて、不起訴となった私を迎えに来てくれた時、それまで見せたこともない二筋の涙に咽ぶ悲しい「お帰りなさい」は、今でも私の人生の反省の基になっている。

あれから四十七年の歳月が流れた。『二度と立ち上がれないだろう』と、私を知る大多数の人々がそう考えるほどの大型倒産だった。一時的とは言え一家離散の体を招いたこのど

ん底を、私は、自らの実家と妻の生家双方の支えによって乗り切り八年後に全ての負債を完済することができた。そして、今度こそ終の住処と決めて宇都宮に転居して早や二十三年目を迎えている。ところが、平成二十三年一月、岳父から引き継いでいた事業が時代の変遷について行けずに民事再生申立を余儀なくされてしまった。それでも妻は、その三十四年前のあの日と同じように憂いの全てをしまってくれていた。またしても、救われた思いで日常を保つことが出来た。その筈だった。しかし、僅か二カ月後の三月十一日、あろうことか今度は後に千年に一度といわれる悪夢が襲い掛ってきた。「もしもし」、私の上ずった声はそれだけで事態の大きさと深刻さを伝えていた。「はい、もしもし」と、妻が一言応えたところで携帯電話は虚しく切れて、全ての回線が不通に陥った。罹災した私たち父子が経営する温泉旅館は、茨城県境に近く、眼下に那珂川を見下ろす高台にあって震度七弱の激震だった。私たちは前代未聞の暗闇の家路を慎重に走行した。自宅に近い一九号線外環に差しかった時だった。「あれ、信号が点いている」と、息子が叫んだ。普段なら当たり前の光景だが、その眩い光に感動し心底から感謝した。家に着くと煌々と電灯が点され、玄関のドアを開けると、この時も妻はいつもと同じ微笑と『お帰りなさい』で迎えてくれた。夫婦になって五十三年、老境に至った今もおお、ほぼ毎日通勤を続ける私を送り出し迎えてくれる妻。その「お帰りなさい」に限りない感謝と健康と優しい言葉で応えようと心に決めている。

もつとダメ

吉田 稔

昨日よりちょっと減っているくらいの量だから、八個でいいかな。こっちは五個でいいかな。

私は三十代半ばまで、飲食店で働いていた。だいたい昼のピークが十四時に終わって、一息つく間もなく、厨房から溢れている洗い物を洗浄機にかけて、夜の部に向けた仕込みも進めなければならない。

やっと洗いがひと段落して、午後の仕込みはパートタイマーのベテランが担当してくれる。すでに十五時。私の休憩時間は十四時からなので、とつくに働くべき時間が過ぎていく。さらに追い討ちをかけるのが、発注作業だ。これをやらないと食材が届かないので、大切な店長業務ではあるが、発注の締切時間が十六時というのが、毎日絶望的な気分にした。

さっきまで客がそうしていたように、ゆっくり食事して、おしやべりして休憩を満喫したい。そんな当たり前のような願いが叶うことはほとんどなく、だいたい昼のラッシュが終わって、やっと落ち着いたら十五時を回っていて、十六時までに発注に追われる。この繰り返しだった。

シフト上は、私の休憩は十七時に終わるので、実質の休憩時間は三十分しっかり確保できればマシな方だった。疲労が溜まって、気持ちも折れると、私にとって真っ先に手を抜く

業務が発注作業だった。百何十とある食材の在庫を数えて、明日の予測客数や天気に合わせて、足りない食材を発注するわけだが、食材が多い分には、足りなくなるよりマシであり、手を抜いても、直接的に客やスタッフに迷惑がかかることもない。

そんなある日、営業部長が巡店に来了。いつものように忙しい午後を過ごして、部長に「客席で一緒にごはん食べようか」と誘われた。正直なところ、まったく気が休まらないので乗り気ではなかったが、当然断れないまま夕方になった。「発注書の控えを見たけど、発注手抜きしてるだろ？」

完全に見抜かれてしまった。あまりにあっさり指摘されてしまったので、日頃のうぶぶんが部長に向かって爆発した。

「そりゃ私だって、サービス残業の時間でやってるんですから、手抜きになりますよ」

その後に部長が言ったひと言は、私にとって二十五年にわたってかけがえのない言葉になった。

「たしかにサービス残業はダメ。だからといって、でたらめに仕事するのはもつとダメ」

その後の記憶がないくらい、まさに衝撃的な言葉だった。仕事はルール通りにしなければならぬが、それ以上に、そんなことをしていたら、私の成長にならないという意味で話したことは、一瞬で伝わった。

あれから、職も何度かわり、まだまだ至らない点も多々ある。しかし、何かに取り組んで、ついつい心に油断ができた時にはいつも思い出す、私だけの言葉である。

キャンパスの片隅は

島田 トミ子

ここ一、二年くらい前から、ネットなどでお盆や正月の時期になると、夫の実家へ帰省する際の妻の気持ちや呟きを目にするようになった。

夫の父母、つまり舅、姑との関係について息子の妻の心中を吐露した書き込みである。

「夫と子どもだけを行かせる」、「別々に行く」とか、「一緒に行っても先に帰る」などなど。

もちろんそんなマイナスの感情を持った妻ばかりではないはずだ。が、一方、愛する妻が自分の両親に抱いている思いを夫は気づいているのかどうかは私は非常に気になる。

いつの時代も婚姻には人間関係の変化が伴うために、予想外のことが派生してくることが多い。

「〇〇家と結婚したわけではありません。大好きな彼と結婚したのです」。当然の理屈だ。選択的夫婦別姓の議論がある今だが、そうはいっても配偶者の家族と全く無関係というわけにはいかないだろう。

私は、昭和四十年代に結婚したひとりだ。

当時、嫁ぎ先の班内で自営業は別だが、既婚女性がフルタイムで勤めている例は少なかった。

結婚披露宴の席で、上司が祝辞を述べてくれた。その中で女性の上司がくれた言葉が忘れられない。

「新婦トミコさんは、シマダ家へ嫁ぎこれからシマダ家の一員になるわけです。一日も早く新しい生活に慣れ、シマダ家の色に染まって皆さんから可愛がられますように……。 (中略) また女性がフルタイムの仕事につき男性と一緒に仕事をするとは、いろいろ困難なこともあるはずです。そこで、上司として新婦にではなく、シマダ家の皆さま方にお願ひがあります。これから大きな真っ白いキャンパスに少しずつ嫁ぎ先であるシマダ家の色を塗りながら生活をしていくことになりませんが、キャンパスのどこか片隅に色を塗らないスペースを残しておいて下さい。仕事と家庭と両立をしていく新婦自身が自由に自分の色を塗っていきけるようにしてほしいのです。」

このときの言葉はその後私の生活にとても大きく影響した。自分色の絵具をいっぱい塗った。振り返ると、いつのまにか少しずつ自分の領域を拡げてきていたな、きつと。

その後、後輩の結婚披露宴に招かれた際は、祝辞として私が貰ったあの言葉を脚色しながら、同じように贈ってきた。核家族化が通常となった今では「〇〇家」という単語も以前とは重みも変わった。すでに姑になった私は、この先はどうなっていくのだろうと、心の隅で気になっている。

有り難くもない有り難う

三上 博史

読売新聞に「時代の証言者」というコラムの連載がある。各界著名人の回顧録なのだが、昨年の8月から9月にかけては、探検家で医師の関野吉晴氏の「グレートジャーニー」が連載された。

「グレートジャーニー」とは、6万年前に現在の人類が東アフリカに誕生し、世界中に拡散して行った人類の旅路のことをさす。関野さんは1993年から2002年にかけて人類の旅路の逆のルートを辿り、南米からタンザニアまで、自分の腕力、脚力だけで「グレートジャーニー」を行った。

コラムでは興味深い体験がいくつも紹介されたが、旅路の最後に近づいた頃、エチオピアのコエグ族について語ったエピソードに私は驚嘆した。要約して紹介する。

「助け合うのが当たり前のコエグ族には、日本語の「ありがとう」に相当する感謝の言葉がない。医者としてたくさんのお患者を治療したが、誰も感謝してくれなかった。

世界にはいろいろな言語があるが、日本語の「ありがとう」に相当する言葉が存在しない言語があるとは、私には信じられなかった。」

「ありがとう」の元来の意味は「有ることが難しい」ということである。有ることが難しくなく当然であれば、「あたりまえ」ということになり、これが対義語になる。

なぜ人は人に対して感謝するのか。感謝するようなことが有り難いと思うからである。反対に、あたりまえのことなら感謝の気持ちは生まれない。感謝の意を表さない。

娘がまだ小学生の頃「我が子から聞いた言葉で嬉しく思ったものは何か」を親に訊いてくるようにという宿題がクラスで出された。それを聞いて私は思い浮かぶものがなくて少し戸惑ったが、一応いろいろ考えてみて「ありがとう」だと思いき、それを答えた。翌日帰った娘に「みんな何と答えていたか？」と尋ねると、ほとんどの生徒（の親）が「ありがとう」だったらしい。

子供の頃、人に対する感謝の気持ちを忘れるな、などとよく説教された。でもその実態は、有り難く思う感謝の陰には有り難く思わない経験が多々あるから「有り難い」が明確に概念化される訳である。すべてがあたりまえばかりの社会なら有り難く思う余地はない。コエグ族の社会はあたりまえだけで成り立っているのかもしれない。それは現代人から見れば、ユートピアみたいなものなのだろうか。

現実の文明社会は、価値観の違い、コミュニケーションにおける誤解や齟齬、勝ち負けの競争原理と闘いによって成り立っている。だから有り難いと思う場面が起きる訳である。それが消えた「あたりまえ社会」（私の造語）になってしまえば、「有り難う」と声を発する機会もなくなるはずだ。掛け替えのないように思われる感謝の言葉の裏にはこんな真実が隠されている。人間なんて、社会なんて……

エツコハドコ

福澤 悦子

わたしにとってのかけがえのない言葉と言えば、この言葉を置いて他にない。

これは、父が今はの際に言ったと姉が伝えてくれた言葉であり、父の臨終に立ち会った家族みんなが耳にした言葉である。残念なことに、宇都宮に住んでいた私だけは、その場に居合わせなかったので聞くことはできなかった。

「ワタシココヨ、イママデアリガトウネ」

旅立つ父の手を握り、別れの言葉が言えたら、どんなに良かったことか。

私は、父が心臓発作を起こし、家の前の畑を駆けまわって苦しんだと聞き、慌てて家に帰り、数日間父に付きつきりで看病した。

大学も入学したばかりで、年度当初の手続、事務処理などもあるので、父の病状が安定したのを見て、宇都宮に帰った。「チキトク」の電報を受け取ったのは、それから数日後の朝まだ暗い頃のことであった。父が危ない。いやもしかしたらもう亡くなっているのかもしれない。宇都宮発益子行きの一番早いバスに乗った私は、バスの中で人目もはばからず、涙を流した。

ついほんの半年ほど前、父は、わたしの入試のために、父の従姉妹の家に泊めてもらうように手配し、私をその家まで

バスで連れて行ってくれ、一晚一緒に泊まり、入試会場まで同行してくれたのだった。

入試科目の最初は国語だったが、私はすっかり上がってしまい、問題の意味が理解できず、ただぼーっと字面を目でなぞっているだけであった。するとその時、窓の外から、誰かと談笑する父の笑い声が聞こえた。今考えると、幻聴だったのかもしれないが、とにかく私は、はっと我に返り、あとは試験問題に集中できたのだった。

私の合格を喜んでくれた父は、その三か月後に亡くなった。私は父の死に目に会うことはできなかった。

父は私に「エツコハドコ」の一言を残して、不帰の人となってしまった。私にこころを残したままに。

父の今際の言葉を私に伝えてくれた姉は、この夏八月三十一日に亡くなった。私の誕生の時のことを、詳しく語ってくれた姉である。かけがえのない人を無くしたと心が痛む。人はいずれは死ぬが、後に残ったひとの記憶の中に生き残っている。

「エツコハドコ」、私にとってかけがえのない言葉、父の最後の愛のメッセージもまた、私の命が続く限りは、私の心の中に生き続けることと思う。

ゴメンナサイ

国母 仁

ボランティアで学習支援をしている。

受け持っているのは中国人の母娘だ。どういう目的で来日したのか詳しいことは分からない。母親は懸命に日本語を身に付けようとしてどんどん質問攻めにくる。

そう簡単に覚えられるわけないから焦らずに徐々にとアドバイスをするのだが納得できないのか「私の日本語レベルはかなり低いです」と自虐的な発言を繰り返す。

二人で小学三年生の教科書からスタートした。先ずは文字を正確に読むことから始めた。分からないときにはとことん説明をする。それでも細かいニュアンスはいくら説明しても納得できないのか首を縦に振らない。どう説明すれば分かってもらえるのかと、辞書を引こうとしたら、

「先生、スマホの方が早いよ」と画面を開き検索をする。確かにスマホは便利だ。母親は日本に来て何年になるのか正確には分からない。日常生活には対応できるくらい日本語のレベルには達しているようだが、さらに一段ステップアップを望んでいるようだ。娘さんは日本に来て二年足らずのようだ。娘さんは感が良く直ぐに言葉を理解してくれる。理解したことを中国語で母親に伝えている。娘さんは日本に永住するのかそれとも中国に戻るのか、それとも羽根を広げてアメリカ、ヨーロッパへと飛び立ってゆくのかもしれない。

母娘は小学校が終わってから、午後、五時過ぎに来る。

教科書には広島原爆の物語が載っていた。戦争は遠い昔の出来事で私とは全く結びつかない出来事だと信じ込んでいた。韓国がいくら謝罪しろと迫ってきても他人ごとと捉えていた。父は赤紙招集で中国の満州に渡ったと言う話は近所の大人から教えてもらった。戦後シベリアに抑留されたことは母親が口にしてたのを憶えている。抑留と言われてもピンとこなかった。六十万人が抑留されて六万人が飢えと寒さと重労働でシベリアの大地で今も眠っている。

中国に対しても後ろめたいものがある筈だが、触れると蓋が閉じられなくなるから閉じたままにして置く。中国人も未だに日本人に悪感情を抱いていることは間違いない。

中国は今やGDPはアメリカに次いで世界二位まで上り詰めた。あつという間に日本は追い抜かれてしまった。ドイツにも抜かれてしまった。インドもピタリと追従してきているから抜かれるのは時間の問題だ。

ある日、重暗い表情で母親が教室に入ってきた。

「私とても悲しいです。悔しいです」カタカナのような籐が外れたような日本語でゆっくり吐き出してきた。

「先生、この、記事読みましたか」記事には蘇州市で日本人母子が斬りつけられ、負傷する事件が発生したとある。更に同じ蘇州市で日本人斬りつけ事件がおきたとあった。

「先生、本当にゴメンナサイ。ゴメンナサイ。；；」
が何回も続いた

君ひとの子の師であれば

こやま きお

国分一太郎先生との出会いは大学の自治をめぐる、各大学が激しく揺れていたころだった。文化連合主催の文化祭を開くのだが、メインである講演会の講師を誰にするか、私に一任された。教師志望だったこともあって、国分一太郎先生の著書は何冊か読んでいたので、国分先生の名前がすぐに浮かび上がった。面識もない学生が厚くましく中野の自宅に講演のお願いに伺った。何をどう話をし、お願いをしたのか、今となつては思いだせないが国分先生は快く引き受けて下さった。そんな折、大学の構内で文学部の鈴木康之先生に突然声をかけられたが、経済学部の私になぜ?と不思議に思った。国分先生との関りを聞かれ、面識もなかった私の講演依頼に苦笑されていた。鈴木先生と国分先生は国語サークルや言語学研究会に属され、以前から懇意にしていたのだ。当時の私は政治や文学などいっぱしに口にしていた生意気な学生だったせい、鈴木先生から麦書房刊・教育国語4、5、7号を手渡された。奥田靖雄先生の「文学教育における主観主義」を読み、文学作品を読むということの今までの価値観が崩れ、衝撃的な評論だった。この評論は教職についてからも、文学作品の読み方指導の実践には欠かせないものとなった。

教職に就いてまもなくのころ、明星学園の公開研究会があり、国分先生と再会した。「きみはあの時の学生か、教師になっ

たのかね」東北訛の独特な語り口で声をかけて下さった。分科会の会場でも一緒に、国分先生のお話を聴くことができた。会場には全国からたくさん先生の先生が見え、今日の授業について話し合ったが、言語学と今日の公開授業内容とのかかわりなど私には理解できなかった。子どもに読み方を教えるには言語学まで勉強するのかとショックだった。

国分先生とはその後も日教組の全国教育研究会や教科研国語部会の合宿研究会、日本作文の会で一緒にすることもあり、先生を囲んで文学の話や子どもを取り巻く今日の課題や教育の内容について聴くことができた。そんな中でどうしても忘れられない言葉がある。国分一太郎著『君ひとの子の師であれば』である。本の名前ではあるが、くじけそうになった時など何度も読み返したことを退職した現在でも思いたす。

「教師というものは、生きた子どもに對し、その子ども主体がなにかを考えたり、感じたり、行動をおこしたりするうちに働きかける、(魂の技師)である。」そのために教師は、目の前の子どもたちと向き合う授業のために教材研究、学習会や研究会にも参加していく。「君ひとの子の師であれば」私を教師として奮い立たせたかけがえのない言葉である。

敗北と死に至る道が

生活ならば

石寄 敬子

私に体を搾り寄せて寝息を立てている犬のテツ。また一段
命の階段を降りる。背骨が曲がり、あばら骨が浮き出てきて、
立ち上がった時に後ろ足が交差して倒れることが多くなっ
た。

十六才、大型犬の雑種。生後一か月で友人から譲り受けた
日から、階段を駆け上がり私たちのベッドに這い上がろうと
した。最初の二日だけ床に寝かせようと試みたが、三日目か
らは可愛さに負け、夫、子供二人、テツと私のごろ寝生活が
十年続いた。子供がそれぞれ家を出てからは、テツを挟んで
川の字で寝ている。

日本のロックグループ「エレファントカシマシ」の曲に「あ
なたのやさしさをオレは何に例えよう」がある。二十年以上
前の曲だが、私が初めて聴いたのは一昨年二月、宮本浩次の
宇都宮ソロライブのときだ。優しくてのびやかで、パワフル
なパフォーマンスに、初ライブ観戦の私は酔いしれた。宮本
と会場が一体となつているときに耳に焼き付いた歌詞が

敗北と死に至る道が生活ならば

あなたのやさしさをオレは何に例えよう

最初は聞き取れなかった。耳で言葉を拾うので「ハイボク
トシニイタルミチガセイカツナラバ」が漢字に変換されない

のだ。リピートでも「ハイボクトシニイタル道が生活ならば」
としか聞き取れなかった。その後セトリがネットに上がり、
曲名を検索して初めて「敗北と死に至る道が生活ならば」と
理解できた。人間勝つこと（成功）を目指して日々負けを繰
り返し、同じように過ぎていく毎日は確実に死に向かつてい
るということか。なるほど、この事実から逃げることは誰も
できない。

自分もそれなりに年齢を重ねて、若い頃より恥ずかしい感
覚が薄れてきた。五十才で折り返してからは好きな人には好
きと言い、会いたければ会いたいと言い、感動したら感動を
伝えるように心がけている。言わなくては伝わらない。待つ
ても相手からのアプローチは奇跡に近い。どこにゴール
のテープが待っているのかわからないなら、ひたすら後悔し
ないように生きるしかない。

失望や不安が増していく日々を「あなたのやさしさ」が支
えてくれている。最初「あなた」とは自分を突き動かす内な
る力と考えていた。しかし今は、素直に今まで私と関わって
きた全てのものと思いたい。

この数か月で、テツはハーネスが必須になった。玄関の段
差はスロープを使う。おねしょも頻繁になり、私のシーツの
下にはビニールのマットが敷かれた。それでもテツはよろっ
と立ち上がると私を散歩に誘う。

朝目覚めると、私は手を伸ばし、テツの胸にその手を置き
呼吸を確認する。するとテツは人の気も知らないで、私に笑
いかけるのだ。

※セトリ……セトリリスト ライブの曲順

ほんとうに ありがとうございました

丕内 七武

自分のものではないのですが、この「かけがえのない言葉」は、脇屋友詞さんが出版した「厨房の哲学者」のなかにあります。この本には、彼の半生が描かれています。ガキ大将で悪戯をしたこと。中卒で中華料理店に修行に出され苦労したこと。相思相愛の女性との結婚。経営者として工夫や努力の末、成功したこと。彼は全てに全身全霊で取り組みました。

この言葉はエピソードにありました。何の変哲もない言葉です。それは、「最後にお読みくださって、ほんとうにありがとうございました。」というものです。この言葉は、不思議にも肉声で聞こえました。彼が深々とお辞儀をする映像まで鮮明に見えました。彼は心を込めてお客様に対し、気の遠くなるほどの数を丁寧なお辞儀と共にしたことでしょう、またこれからも。このような生きざまから彼は言霊を獲得したに違いありません。私もこうありたいと願いました。

まずは医局で

ラーメンを食おう

旭 英幸

私は、団塊世代の生まれである。団塊の世代とは、昭和22年から24年生まれを指すもので、1970年大阪万博を国として取り仕切った、通産省役人であった堺屋太一が、のちに小説家となり本の題名として命名したものである。その頃大争論が華やかであり、この国の道程が混とんとしていた時代でもあったかもしれない。羽田事件そして新宿騒乱など学生と国家権力との闘争があり、学生とそれらを押し込める警察官は互いに同じような年齢であった。しかしそのエネルギーもしほみ、学生は就職へと舵を切っていたのである。東京オリンピックから始まり大阪万博も無事に開催されおおいに盛り上がりつつあったのも事実である。そして我が国は高度成長へと右肩あがりの状況でもあり、したがって会社も多量の人材を受け入れており、社会情勢の勉強をしなくて何となく、就職出来たようである。

私は理学部化学科に在籍しており、就職できる会社を探していた。人と話す事は苦手であり、研究所などのある会社を望み、また化学でも有機化学並びに自動制御などについての研究より、製薬会社に仕事を求めた。ある製薬会社に入社を申し込み、それなりの試験が終了し面接室へと向かった。面接官は会社の人事部長であった。私は口ごもりながら、会社

の将来性並びに自身の希望を話した。優等生の出来ではないがそれなりに無事に話が出来たと考えていたところ、その人事部長はひと言

「私は君の父上を知っている。せっかく化学を勉強してきたのであるから、それを土台に医師になる気はないか。薬を創る研究も悪くはないが、その薬を使う職業もあるのではないか。君の父上は検事の仕事をしさらに弁護士として活躍している。私はあと4、5年でこの会社で定年を迎える。何が一生の仕事であるか答えはないが、長く続ける仕事も一つの考えではないか」私自身その時点で医師という職業に関して全く考えも及ばなかった。更に仕事に定年がある事実は知っていたが、実際に定年という言葉を人事部長から聞いて、一大決心をして医学部への進学を父に許可をもらい、その上父は応援することとで医学部に入学した。医師になってから一度その人事部長に電話した。随分懐かしかったのか、眼科を専門にしていることを話すと、ある大学の教授の話を私にしてくれた。

その方は定年して別の会社に勤めていた。

医学部入学後ある友人と気が合い、夜は時々酒を飲みながら医療界の矛盾などについてよく話していた。彼の父親と眼科の教授と学生時代同級であったらしく、その教授は学生時代陸上部であったとのこと、私は高校時代少々陸上競技部を少し係わっていたので、気に入られ陸上部立ち上げに加わった。それにより何となく教授に可愛がられた。また医療には地域社会との関係も大事であることも教わった。其の事で社

会医学と称し（社会医学などと言う言葉はないが）酒を飲み麻雀や競馬など、色々経験した。いまの学生の生活には考えられない行動であった。其のうちに卒業となり、当時大学病院副院長であった教授の元へ、学生時代の放蕩を詫びお世話になった挨拶を兼ねて、卒後入局先の相談に行った。教授は我が家が医家ではないことも十分に承知の上、幾つかの医局内容を話してくれた。私自身すべての医局に対し白紙であったので、積極的な考えはない事も話した。昼頃となり、教授は「医局でラーメンでも食おう」と言いながら副院長室を二人で後にした。医局に向かう途中

「まずは眼科で少し飯を食うようにしたらどうか、
まずはとりあえず俺のところへ来い」

とのこと。医局でラーメンを食いながら眼科入局を決めて現在の私がある。

私の人生を決めるひと言として、製薬会社部長の

「定年のない職業」そして

眼科教授には「まずは医局でラーメンを食おう」

偶然の一言、不確実性の医療に身をおく者として、すべてが良い方向に進んで行った。

価値観を

押し付けないように

関根 喜久枝

その日私は高校の同窓会に出席した。東京まで行き帰宅すると、長男の髪が丸刈りになり自分の部屋にこもっていた。

「何かあったの」

と夫にたずねた。

「今日警察から電話があつたんだ」

「えー」

胸がどきんとした。

「義雄が友達三人と人通りのない河川敷で友人の家のオートバイを乗り回していたんだって。巡回中の警察官に注意され補導されたんだよ。僕が『頭を丸めて来い』と言ったんだ」

高校に入学して間もなくの事だった。学校に連絡がいき、一週間自宅待機となった。その間学校が息子の処分を検討すると知らされた。間もなく夫と私で高校を訪れた。応接室で教師から

「退学処分になりました」

と告げられた。その折夫に、

「お父さん、国立大学を卒業され一流企業にお勤めですね。今まで頑張つてこられたと思いますが、ご自分の価値観を子供に押し付けないように」

とアドバイスを受けた。それまで夫は息子の成績が芳しく

ないと不満をもらしていた。教師の言葉に下を向き暫く顔を上げられなかった。それから家族で話し合つてとにかくもう一度高校受験をすると決めた。息子は落ち込んでいたが次第に元氣を取り戻し受験勉強に励んだ。卒業した中学校の学年主任の先生に事情を話すと、別室で受験生向けの模擬テストを受けさせてもらえた。進学相談にものつていただき書類の作成等本当にお世話になった。

次の年に受験し合格した。桜の花が満開で息子の再出発を祝福してくれてる様だった。在宅の時夫が息子にテニスクラブに誘いテニスを教えた。それが楽しかったらしく新しい高校に入学してからは友人と学校のコートで放課後テニスのゲームに興じていた。良い友達に出会い充実した三年間を過ごせた。今振り返ると高校退学は親子共々ショックだったが本人が反省しやり直す機会になり、良かったと今では思える。退学した高校の教師から言われた言葉、今も身にしみて忘れられない。

人生の和は総じて一いっ

高橋 淑乃

『朝明』第13号の特集テーマは「かけがえのない言葉」である。どういう事を書いたらよいのか。「かけがえのない」とは、代りになるもの、と言う事か?。「母は私にとって、かけがえの無い人であった」と言う事はある。又、辞書には「かけがえのない命」と出ている。

とりあえず私のより処としている好きな言葉を書いて見た。

〈バラの木にバラの花咲く 何事の不思議なけれど〉

〈花の命は短くて苦しきことのみ多かりき〉

〈水をのむ時には井戸を掘った人々のことを忘れてはならない〉

〈少年老いやすく学成り難し〉

〈初心忘るべからず〉

折に触れ、私が心のより処とした言葉である。

私は昭和六年生れで、今年満九十三歳を過ぎた。

満州事変、日中戦争、太平洋戦争、と私の青春はどつぶり戦争であった。父は軍人であったから何度も戦地に行ったけれど無事帰国した。

私は四人姉弟の長女である。今でこそ、思い出話として語り草になっているけれど、戦後の生活は父母を助けて大変であった。だが、その後の私の人生九十三年の中で、何にも代

え難い悲しみは長男を亡くした事である。

オートバイで通勤の帰路、下校中に自転車で飛び出して来た中学生を避けて転倒し、以来六年間の看病の甲斐なく死亡した。半年程の入院中、病院の看護士さんから「意識不明でも聴覚は動いているから話しかけているうちに気が付く事もあります」と言われ、それを信じて退院後の自宅療養を六年間つづけた。その時、憔悴した私を心配した叔父が、〈人生の和は総じて一いっ〉であるから力を落すなど言ってくれたのである。以来、自分だけが不幸だと思った時は、この言葉を、よりどころとして頑張つて来たような気がする。

今思うに、叔父の人生も決して順風満帆ではなかったのだ。山あり谷ありのくらしの中で、この言葉に縋っていたのかも知れない。〈人生の和は総じて一いっ〉好調、不調、知力、体力充実している時には苦勞しても、終りよければ全て良し、老後は穏やかに終りたいものである。

私のかけがえの無い言葉である。

祖父のくれた言葉

鈴木 みずほ

「いつせい、いつせい」

名前を呼ばれて、壱成はベッドの傍に近づいた。

「お前にとっておきの言葉をやろう。は……—しよう、だ」

いつも冗談ばかり言っている祖父が、いつにもなく真剣な顔で言った。紙にも書いて見せてくれたけれど、四文字の漢字は、五歳の壱成には難しくて読めなかった。

「辛いときも、この言葉を思い出せばきっと元気になる。だから壱成、絶対に忘れるなよ——」

またこの夢だ。壱成はため息をついた。

祖父は死ぬ前、幼い壱成に「大好きな言葉」を教えた。しかしその肝心な言葉を、壱成は忘れてしまっていた。「は」から始まる四字熟語。覚えてるのはそれだけ。

記憶の中の祖父はいつも酔っぱらっていて、悪戯をしては祖母に怒られていた。病で倒れるまでは、幼い壱成をよく甲子園球場へ連れて行ったという。壱成は祖父が大好きだった。

壱成はこの頃、学校生活がうまくいかずに悩んでいた。そんな中、この夢を見るようになった。祖父が何か伝えようとしているのではと思った壱成は、彼の言葉を探すことにした。

母に聞けば「おばあちゃんなら絶対知ってるよ」と言う。しかし祖母は「おじいちゃんのことだから、どうせくだらな

い言葉よ」と笑った。そんなはずはないと壱成は思った。あの真剣な顔を、今でも思い出せるからである。

「八方美人、波乱万丈……。ちがうよなあ」

分厚い辞書で「は」の行を引きながら壱成はつぶやいた。並んだ単語を眺めるも、祖父のくれた言葉が一体どれなのか、見当もつかなかった。今日も分からずじまいか。

『——いつせい、いつせい』

眠くなってきた頭に、祖父の声がこだまする。この名前は彼が付けたいが、当初は別の漢字「一生」が充てられる予定だったという。

その時壱成にひらめくものがあつた。一生はそのまま『いつしょう』とも読める。

もしかして、とたどった指先に、ある言葉が触れた。

はがんいっしょう【破顔一笑】

ほほえむこと。輝く笑顔のこと。

——これだ。祖父は僕にずっと笑っていると言ったんだ。きつとこれが、僕にとってのかけがえのない言葉なんだ。

壱成の心の霧はすっかり晴れていた。

「あの子最近頑張ってるわね。よく笑うようになったし」

壱成の母の言葉に、祖母も「そうね」とうなずいた。

「そうだ、お義母さん、あの『言葉』って結局何だったの?」

「それはね、『阪神優勝』よ」

自分の言葉に救われる

松林 厚子

九十四歳になる母と話が出来なくなった。認知症で自宅での暮らしが難しくなり、数年前から老人保健施設で暮らしていた。

春先に病気が判明し、施設から病院に移った。入院してから母は急速に弱った。起き上がれなくなり、口から食べられなくなった。そして、意思疎通が出来なくなった。転院して数週間でのことだ。いずれはこんな日が来るだろうとは考えていたものの、これほど早いとは思わなかった。病院に行くと、「お母さん、来たよ。調子はどうですか」返事がないとわかっていても、つい問いかけてしまう。

「庭の草がぼうぼうだよ。お母さん、いつも草むしりしていたね」

ベッドで横になっている母の耳元にぼつりぼつりと話しかける。面会時間は十分と決められているので、あつという間だ。話している間は、手をさすり続ける。

「温かいねえ」

以前はふつくらしていた手も今は小さくて硬い。気分転換にヨガのレッスンは続けている。先生には母の状態を伝えてあるので、いつも気にかけてくれる。

「生きているうちに言いたいことを話すといひよ」
伝えたいことがあるでしょう、と続けた。

母が認知症になってから、顔を見るのも、口をきくのも辛くなった。そんな自分に嫌気がさして、落ち込んだ。母の施設入所が決まった時は、心底ほつとした。ここしばらくはそんな心持ちだったが、認知症になる前の母はどうだったか。子どもの頃の私は母親が大好きだった。二十代の頃、育児ノイローゼになった時に母がいなかったら、私は立ち直れなかったかもしれない。

ヨガの先生に、
「お母さんにありがとうって言うことは、あなた自身のためでもあるんだよ」

とも言われた。次の面会の時は、照れくささをかなぐり捨てて、母の耳元で囁いた。

「お母さん、私を産んでくれてありがとうね。おかげで、今まで生きてこれたよ」

母はうつろな目のままで反応はなかった。が、言えた、という達成感が湧き、重かった気持ち軽くなった。自分の言葉に救われた気がした。ヨガの先生の言葉は正しかった。

母の病気は進んでいる。口の中にできた柘榴状の腫瘍が大きくなり、スポイトで飲み物を数滴口に入れられるだけで、むせて、しかめっ面をする。

母があちらに行く日はそう遠くないだろう。その時、私は平常心でいられるのかなあ。不安が募る。

「よくがんばったね」と声をかけて送り出してあげたい。

センセイとハサミ

くぼかわ けんいち

私には、「センセイ」と呼んでいた人が、一人だけいた。

センセイは、川上弘美さんの小説『センセイと鞆』の登場人物のように教師ではない。医師でも、ましてや政治家でもない。

センセイは、美容室の経営者だった。

美容室の経営者は、その店で働く若い美容師たちから「センセイ」と呼ばれていて、私も自然にそう呼ぶようになったわけだ。

センセイはスポーツ以外は何でもよく知っていた。とても好奇心が旺盛なのだ。たとえば美容室の休日である火曜日に東京の美術館や博物館へ行ったらと、疑問があれば問い合わせなくてはならないくらい勉強熱心でもあった。

センセイは決してご自分の知識をひけらかさない。美容師になる前はかなり難関の大学で勉強していたこともあり、勉強の基礎体力をお持ちだったから何でも吸収できたのではないか。

センセイも高い技術を持った一人の美容師。技術というのはカットの腕前だけではなく、それぞれのお客様に合わせた会話ができるかどうかということでもある。

私がセンセイと初めて会ったのは三十三歳のときだった。学生時代、絵を描いていたことや、下手な小説を書いたこと

などを自然に話していたのだろう。センセイも最近読んだ本の話などをされ立花隆の『臨死体験』を貸してくれたりした。センセイとのお付き合いは何年続いただろう。私が四十七歳の春、センセイはすい臓がんで旅立ってしまったのだ。六十二歳だった。

お葬式に伺えなかった私は、初盆にセンセイのご自宅を訪ねた。奥様とも顔見知りだったから。その頃の私は初めてのラジオ連載掌篇の執筆中で忙しくもあったが、三年間付き合った恋人との別れから立ち直れずにもいたのだ。

センセイの仏前で、私はすべてを正直に話してしまっていた。奥様にとつては、さぞかし迷惑な話だったに違いない。しかし、奥様はこうおっしゃって下さった。

「くぼかわくん、不幸をいつまでも不幸と思ってちゃダメ。背筋を伸ばして歩きなさい。あなたが笑っていれば、あなたの周りに人が集まってくるから」と。

私は泣いていた。センセイを失ったことの淋しさと、奥様の真心に心の底から打たれたのだ。恋人との別れからも立ち直れそうな気えした。それほどかけがえのない言葉だった。現在、私はセンセイの最後のお弟子さんに髪をカットしてもらっている。先日、初めて白髪染めをした。私はいつの間にかセンセイの没年を超えていた。

センセイと最後に話したとき、センセイは言われた。まるで遺言のように。「カッコイイおじさんになってください」センセイ、それだけはムリなようですよ。

想う

相馬 龍久

我が家では朝の「おはよう」から「おやすみ」まで挨拶を大切にしてきた。私は家内がちよつとした事をしてくれても「有り難う」と大きな声で言う。理屈を言う前に挨拶がしつかり身に付けば感謝の気持ちや思いやりが出てくる。そうすると相手を気遣う「想う」そういう感情が湧いてくる。

想のつく熟語は実に多いが、私は勝手に造語を作っている。想像して創造することを「想造」や「想作」と日記やメモに勝手に書いている。いくら造語でも想思想愛は言い過ぎだろうか。

「想」には無から有が湧き出てくるような感じもある。

話は変わるが一刀流の極意に「無想剣」というのがある。無念無想で何も無いという意味ではなく、沢山心に念も想もあるが、心を一ヶ所に留めないことをいう。即座に千手から無心で一手を選ぶようなことである。本当に千本の手があった千手観音があつたそうです。その手には刀や筆や大工道具などあらゆる道具が握られていたそうです。因みに東京の千住は千手観音が語源でしょう。

「想」は私の姓、相馬の相の下に心と書くので自分の信条にしています。くれぐれも相の下心とは読まないように。

私は私

小林 千枝子

青年期を「第二の誕生」とするのは、十八世紀の思想家Ｊ・Ｊ・ルソーの教育小説『エミール』にはじまる。

自らの青年期を振り返ると、大学、続いて大学院に進学した際の指導教官であつた故中内敏夫の存在が大きかった。中内の目に私は他の学生や院生と違つて見えたようだった。中内は「他の学生が十教えれば九か十はわかるのに小林君は三か四しか理解しない」と言つたらしい。こう言われたなら、自分の理解力のなさを指摘されたと思う人もいるだろう。しかし私は「この先生はとてもよく私をわかつてくれている」と思つた。中内の前で思わず涙を流したのも覚えていゝる。のちに中内は私をときに「小林大明神」と言うようになった。

研究会の調査や学会活動等でよく同室に泊まつていた先輩が言つていた。「千枝子さんは、自分の世界を持つていて、そこをぐぐらせないと納得しない。そこを中内先生は評価している」と。その自分の世界とは、おそらく父と母の出自である農民の世界。青年期の模索の結果か、私は農村に焦点を当てた日本教育史を中心に研究するようになっていた。

中内が勤務する大学に入らなければ、私は中内に出会うこともなかったろう。大黒柱の父を早くに亡くした貧しき家の娘だった私は、家事をこなしながら肉体を駆使した長時間の受験勉強をした。その結果の国立大学一期校入学だった。

何が私をしてそれほどの受験勉強に走らせたのか。いわゆるいい大学に入りたい思いがあつたことは否めない。だが、そういう上昇志向だけで、睡眠時間を減らして勉強に集中することが出来るものだろうか。私のなかに、自分をより大きくしたい、自分の可能性を拓きたいという気持ちがあつたがゆえの行動と、その結果なのではないか。

中内が私のことを見ながら言つたことがある。「教育学とというのは面白い。大学に入学するときの成績は悪くても、学ぶなかで違つてくる」と。大学院まで進んだ私のことを言つていゝると思つた。自分が時代の風潮も知らずに大学まで来たことなどは、大学での友人との交流のなかで感じていた。

高校生の頃が私の青年期のはじまりであり、ほぼ終わったのが、自分の研究テーマがはっきりしてきて大学院博士課程に進学するまでの十年近い年月だったのだろう。ただ、真面目、一生懸命等々の性格は、思春期・青年期の頃から変わつてないような気がする。自分自身に内在する生き方、あり方を見出すのが青年期の課題であるなら、それは私本来のものなのかもしれない。その原点は、農民に受け継がれてきた朴訥さと連動するものだと思いたい。

私は今、超高齢社会で、半世紀前なら老年期と言われた年代を生きている。その私が、研究論文という枠にこだわらない自由な文筆を楽しんでいる。まるで第三の誕生を迎えているかのようである。変わらず一生懸命である。おそらく「十教えられても三か四しかわからない」人のまま。

紫式部からのメッセージ

吹木 文音

『源氏物語』の作者・紫式部は、彰子中宮に女房として仕えるかたわら、教育係としての任も負っていた。並外れた学識を誇り、非凡な才能を見出されながら、朋輩を憚って、「一という漢字すら書けない顔をしていた」という逸話は有名である。

そんな彼女が、『源氏物語』中、ヒロイン・紫上に、しみじみと述懐させる件は興味深い。「もののあはれ、をりをかしきことをも、見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしさも、常なき世のつれづれをもなぐさむべきぞは」。現代語に直すと、「ものの情趣も、折りにふさわしい風雅なことも、何もわからぬかのように引きこもっていたのでは、いったいどうやってこの世に生きる喜びを味わったり、無常の世に生きる味気なさを慰めたりできるのだろうか」。さらに、「善悪のけじめを知っているのに黙っているなんて、ほんとうにつまらないことだ」と、付け加える。

帝が、日本書紀を読みこなしている秀才を褒めれば、「日本紀の局」と陰口を叩く朋輩たち。酒席では、「こちらに若紫はおいでかな」と揶揄する宮廷の雰囲気。只中に在って、敢えて無言を貫かなければならなかった紫式部の心の叫びを、『源氏物語』のヒロイン・紫上が代弁している。言葉のない人生の虚しさを。

紫上の述懐は、女性の生き方、その息苦しさを嘆じたものではある。だが、人生の哀歓に無言を決め込む味気なさといっ

た点から考えれば、性別、また時代を超えて共通するものがある。

式部は、『源氏物語』中、最後のヒロイン・浮舟を「無学無教養で、気の利いた受け答えもできない女性」と造型しているが、同時に彼女に「書き言葉」を与えた。浮舟は、ひたすら歌を書きつけることによって自身の心情を語り上げ、自我を獲得してゆく。読者は、彼女の書き言葉を通して、そのありようを理解し、ストーリーに引き込まれてゆくのだ。

書くこと、そして話すこと。私たち人間にとって、言葉はかくも大切なものである。感動を言葉で表現することで、私たちは自分の思いを人に伝え、共有し、繋がりが合うことができる。時に、反する思いをぶつけられても、言葉を重ねること、より絆を深めることもできる。文字にして読み合えば、時間も距離も超越することができる。社会、という輪の中で生きる人間にとって、言葉は、実にかげがえのない存在なのである。

インターネットの普及は、私たちの世界を圧倒的に変えた。刺激的な映像、断片的な言葉が飛び交う世の中になり、AIの登場で、人類の心も、それを表す言葉の行方も混沌としている。

季節の情趣を、愛別離苦を、こまやかな心で受けとめ、素直に言葉にする営みを見直したい。古今東西の書物を辿り、己の内なる言葉を豊かにしたい。そう、現にこうして千年余りの時を超えて、『源氏物語』の言葉から、さまざまな示唆を受け続けているのだから。

言葉によって人生を輝かせる夢。私はそれを日々温めている。

八〇年間、胸にある悔い

館野 ひろ子

かつて北押原村横山と言われていた所に祖母の家はあった。家の裏には、千葉昭三も祭には遊びに来ていたという、三日月神社があった。母の故郷であり、私の戦時中の疎開先でもあった。現在では鹿沼市となっているが、横浜生まれの私には、日本の原風景の空気を感じさせてくれた所であった。一年半ほどのわずかな時ではあったが、私に豊かな心をくれた場所でもある。ただ一つの出来事を除いて。

家の東方に、黒川という大きな川があった。

小学校に入って最初の夏であった。都会からやってきたということで珍しかったのか、世話好きな祖母のお蔭なのか、遊びに誘ってくれる子どもたちが結構いた。

イナゴ取りやタニシ取り、どじょうや鮒をとるための笠の仕掛け方、麻の茂みでのかくれんぼなど、初めてのことばかりで、毎日の自然とのかかわりが楽しくて仕方がなかった。

黒川で対岸まで泳いで渡るといふ遊びも、その一つだった。真ん中辺りは流れが速いし、色も濃く深そうだった。

「決していっちゃんね。おめに泳げる川じゃね。行っちゃなんねえ」と、祖母からは、きつく言われていた。

しかし、村の小さな子どもたちが、飛び込んでいくのを見て、弱虫と思われたくない思いから、私は祖母との約束を破って川に入ってしまった。

対岸まで流れに逆らって渡れるほど、泳げたわけではない。出来ないと言えなかったのだ。私より小さい子が、川の向こう岸で、おいでおいでをしていた。私は犬かきで泳ぎはじめたが、すぐに中ほどの急な流れに押し流され、思わず川底に足を着こうとした。水がきれいで、川底が近くに見えていたのだった。足は着地出来ず空をけただけ。あわててもがいているうちに意識は遠くなっていた。

気がついたとき、私は河原に寝かされていた。

助けてくれた見知らぬ兄ちゃんが、時間がないんだといって帰ったことを、覗き込んでいる子供たちが教えてくれた。

村の子たちと別れて、何事もなかったように、私は家に戻り、祖母には溺れたことを内緒にしていた。

命の恩人は、出征を控えていた青年だった。

ずっと後になって、それを知った祖母は、

「命の恩人にお礼もしないまま戦地に行かせてしまった。

悪かったナイ、申しわかなかったナイ」と、天に向かって手を合わせて大泣きする祖母を、私は呆然と見ていた。

その後、命の恩人の戦死を聞かされ、以来、言い知れない思いが幼いながらこみ上げてくるのだった。心の中で幾度詫びたことか。

年が経つごとに薄らぐどころか苦い悔いとなって、居ても立っても居られない気持ちになってくる。この思いはこれからも生きていく間中、続くことだろう。

同時にあの日の祖母の詫びる姿や言葉の一つ一つも。

故郷（ふるさと）があるからこそ

頑張れました

藤田 香月

今年の七月始め、東京の佐藤英夫さんから思いも掛けない贈り物が届きました。それは、黄綬褒章受章記念の御品で、菊の御紋と鳳凰、華唐草のほどこされた丸形の拡大鏡兼ペーパーウェイトでした。

佐藤さんとの出会いは、三年ほど前に黒羽・川西地区公民館多目的ホールでの講演会の講師として、お話を拝聴したのが始まりでした。その日、佐藤さんはご自身の人生を語られたのです。

「私は、昭和十七年に黒羽で生まれました。中学生の時に家運が傾き、父から高校進学を諦めてくれと言われ失望し落胆しました。修学旅行にも参加できず大きな悲しみに暮れました。しかし、よし！それなら腕に職と技能を付ける仕事をしようと思い立ち、十五の春、上京して住み込みで彫刻業（製品の元型）の仕事に就きました。それから人は人一倍努力し、いつの日か、この業界のチャンピオンにと心に刻み技能の向上をめざし働き続けました。その結果、『株式会社佐藤金属彫刻』を設立し後に、一級工業彫刻技能士、東京マイスター、東京都功労者としての資格や表彰を受け、東京2020オリンピック・パラリンピックの聖火トーチのエンブレム原型彫刻を手掛けることになったのです。オリンピックの聖火トー

チを握りしめ、故郷（ふるさと）黒羽に思いを馳せ、トーチキスを行う聖火セレモニーの最終ランナーを務めることができました」と語られ、結びには私の心に深くしみ入る言葉が続いたのです。「私には、かけがえのない故郷があるからこそ頑張れました」と。この日、講演の後には、参加した私たちにも栄えある聖火トーチを握らせてくださったのでした。それから、令和四年度現代の名工を受賞され、さらに本年、令和六年春の叙勲で黄綬褒章を受章されたのです。お祝いを申し上げたとき、佐藤さんは私の亡き父の想い出をお話しくださいました。

私の父、藤田捨吉は黒羽小学校の教員でしたので、卒業生である佐藤さんにお尋ねしますと、「藤田先生のこと、覚えています。坂道で自転車を押したことがあります」とおっしゃってくださいました。父は、先の戦争で右足を大腿部から切断し重い義足を着けていた為、自転車のペダルを一回転踏むことができず、半回転を繰り返す乗り方をしていました。小学生だった佐藤さんは、坂道で自転車から降りて歩く父の姿を見つけては、自転車を押して下さっていたのです。また、「中学生の時、私の習字が県の佳作に入選できたのは、黒羽小学校で藤田先生が丁寧に書道を教えて下さったお蔭と思っています。私にはいつも心に故郷があるからこそやって来れました。今も、生きがいは大好きな仕事を続けることですよ」と伝えてくださいました。

そして今、「故郷があるからこそ頑張りました」のお言葉は、私にとってもかけがえのない言葉となりました。

おてんとさまが見でつから

渡邊 公之

おらが物心づき始めだころからずーっと、とおちゃんとあちゃんがいさめる時は、いつも「おてんとさまが見でつから」だったなあ。

ありやあまた言つてらあ、なあんてふてくされた時もあったけど、あああまた言われつちまったなあと反省しきりだったなあ。だが、おらあ真つ正直に生きてきたつもりだ。

おらが、中学三年・十四歳の時にとおちゃんが、五十四歳の時にかあちゃんが亡くなった。

おらあ、この「おてんとさまが見でつから」の言葉を、かけがいのない言葉として、親孝行がでぎねがった分、大事にしてくだし、これがらもだ。

このごろ、「ひとりもとりのこさない」と耳触りのよい言葉があつちこつちで言われでつと、安易に使われでるような気がすんだよなあ。

「とりのこさない」なんて言わねえで、「少数でも、一人ひとりの意見や要望でもとりあげる」と言つてほしいなあ。

多数は力だと、少数意見が無視されてき、切り捨てられてつぽよ。一人でも、少数でも、どういふ意見なのかをきちんと聴いて、しつかりやりとりしてほしいなあ。

おらあ、同僚や後輩に、何事にも疑問をもつようにと声を掛けてきたんだ。

団体やグループの中では、先輩や役員などに「どうなんだろうか」「そうかなあ」などと疑問や問題提起したりできねえ、そんな雰囲気じゃねえかなあ。

団体やグループは、その構成員一人ひとりのもんだべ。その一人ひとりが、そうだーと納得してこそ、その団体やグループはうまく回つて楽しくなるべよ。

おてんとさまがしつかり見でつから。

おらが楽しんでる俳句会は、宇都宮市中央生涯学習センターで句会をやつてんだ。センターの入口に一本の酔芙蓉の木があつて、九月上旬ごろに咲き始め、次つぎ咲きつづくんだけ。

昼ごろ、十個ほどの真つ白な花が、句会に参加する仲間たちを迎えてくれるんだよ。楽しく、賑やかな句会を終えて、センターを出ると、ピンクに染まった花が見送ってくれる。時には真つ赤になっていたりして。

おてんとさまの日ざしを受けて。

おらあ、この酔芙蓉の花が好きだなあ。

私が好きなのはピンク、僕は白がいいなあ、いやいや真つ赤・真紅がすてきよ、などいろいろ好みが違うて、そこがいんだよなあ。

句会後の紅を増したる酔芙蓉

愛は王冠より、 もつと求める価値がある

名村 忠

王冠は王が被るもの。女王は王の側にいて、王の妻として君臨している。古代ローマから下々の者は女王の美しさを称え、憧れ夢見たのである。他の女達は怒ったにも拘わらず、しかし女王と王冠は一体のものと考えられた。彼女が長く健康なままでいられるよう、彼女を女主人として選んだ後も彼女は魅惑的であり、唇は赤く輝き肌は白く歯並びはまた白く輝いた。瑕疵のない女性として太陽の如く月の光の如く神格化されて行った。その女性に奉仕するのが封建制社会の人々の義務であり誇りであった。女は奥でなく高みに立った。

こういう女性崇拜が西洋の社会には根元として存在する。女性が神の子を産むのである。マリア信仰が既にあり、それとの葛藤、矛盾の中で西洋の男達は自分の限界、分を弁えてきた。女主人への憧憬、自分への諦め、体制への準拠その長い繰り返しの中で主体を解放し、女性をゲットして子孫を残してきたのである。神の子は肉の交わりを超越した霊的存在である。遠く高く胸壁に立つ女主人を仰ぎ眺めて男達は女神に似た至高の存在に心打たれ言葉を使い喜びで一杯となったのである。彼女の言葉は天国の歌のように響き愛らしく神聖な信頼となって降り注いだのである。

個々人の悩みも苦しみも死に対する恐怖も秘かに彼女を思

いつつ克服されたのである。激励の言葉は悲しみに耽ることを許さない。彼女は城の胸壁の窓辺に立ち力強く多くを可能にしてくれたのである。

女は可視的に輝き煌く存在であった。西洋中世のミンネザング（恋愛歌）にはそういう女性、女主人が眼前にいた。モルンゲン（中世恋愛詩人、ドイツ1222没）の脳裏には、そうした窓辺に姿を見せる女性はやがてビーナスの如くマリあの如く自分の部屋の窓辺に現われ微笑し煌いた。しかしこういうことを為し得ない魔女も処理し切れない存在として出現させたのである。

愛のスタートは言葉のない失語症的驚嘆であり、立ち止まりなのだ。マリア信仰が出現し愛人の助けが必要だが決して愛人は助けを提供することのない絶望的希望なのだ。

こうした長い長い心の煩悶を通過した後にはリアルな男女の結びつきが起ることを人々は知っている。眺めることなく歌うことなく踊ることなく憧れることなく昔の行為を反芻、抵抗することなく諦めることなく恋愛の道を歩むことは出来ない。面倒で自信の持てない道である。白鳥は死ぬ直前最も美しく歌う。生死を分ける、死を選ぶ超越的道再生への道程である。死をかけた挑戦にも似た恋の道を通過後再生の誕生の春が訪れる。結婚少子化の論議は選ばれた人間だけが辿り着く出産の問題を繁殖、数字の出来事に政治的に矮小化した。教育も超えた狭き門を通過する課題を日本人は背負った。「愛の讃歌」の最後「神は愛し合う二人を結び（守り）給う」を人は既に知っている。愛は罪と神聖の二極性を統一する。

エー それって「結^{ゆい}」

貝塚 津音魚

セブンイレブンの店舗数は世界全体で8万5000店を超えている。

コンビニ社会、日本では1969年小売業者がマイシヨップ・チェーンとして日本独自の店舗として開発し現在に至っている。これは我々日本人一人ひとりが近代化を目指し、住みよい社会を望んで作った世界である！ 挨拶ひとつなしでお金とカードさえあれば普段の生活用品は事足りる世界である。昔の雑貨屋はこうはいかない。まず挨拶があり、必ず会話が あった。そこから色々な情報が入ってきた。またお店の人は、それぞれの家のことや家の事情まで知っていた。しかし、こうした社会は若者にとっては非常にうっとうしい社会であった。昭和30年代、みんな貧しかった。三世帯社会は当たり前だった。

昔、農業は農家にとって人力と馬や牛の力による労働力は必須であった。私の頭の上をしよっちゅう「結」という言葉が行き来していた。結とは労働力を対等に交換しあって、田植えや稲刈りなど農の営み、屋根葺きなど一時に多大な労力を要する際に、共同労働の形態で生活の営みを維持していくために行われていた。共同作業を「もやい」と称されることもあるが、厳密には「もやい」もしくはそのための相互扶助組織のことをいう。「ゆい」は「共にはないが、たがいの約

束にもとづいて共に事を行う」と。

私の父は大工であったが、周りは農家であったため母は季節が廻るたび、「結」の田植えや稲刈りに身を晒し、そのおかげで田植えや早苗饗の赤飯やあんころ餅、収穫の終わりにはおぼたもちや新米などのお裾分けが、腹をすかした子供たちには何よりの待ち遠しい楽しみであった。

また村や田舎の町、住宅などでは常に米やお醤油や味噌の借りっこや、親戚から何か貰ったらお裾分けとか、それが頻繁にあちこちの村で住宅地で行われていた社会だった。一方こういう社会はうっとうしい、常に監視されている状態であった。常に噂があり、すぐ広がる。濃密な関係があればある程うっとうしい社会であった。高度成長時代までは全てが村社会であった。結いの存在、村はよそ者を嫌った。組や班、そして村の中で犯罪が起こる、自殺者が出る等、村の恥になることを嫌った。しかし、その絆が犯罪や自殺の抑止力にもなった。村で子供たちは家の人以外の他人に叱られたり、褒められたりすることもあり、地域で何となく子供達を育て見守るシステムがあった。

男女の結びつき、それって結？ 小学生の頃国語で新潟高田の「がん木」を知った。雪深い高田（現在の上越市）では軒の下を互にくつつけあって雪を避けるがん木という、通りを作って人々が往来していた。そんな風景の人々の結びつきの温かさに憧れを感じていた。それって雪に隠れて見えない結！ コンビニ社会は結を壊したのか。私にとっては時の流れと共に結は繋がりだという軽いものに変化しつつある。

令和5年度栃木県文芸家協会事業報告

事務局長 吉田 稔

○役員会

令和5年4月15日 役員会開催／宇都宮市中央生涯学習センター(出席者:8名)
令和5年度総会審議案件を審議

○総会

令和5年5月21日 総会開催／栃木県教育会館(出席者:18名)
①令和4年度事業報告 ②令和4年度収支決算報告 ③令和5年度事業計画 ④令和5年度収支予算 ⑤令和5年度から令和6年度までの役員等を審議承認 ⑥その他(夏季講演会案、新会員挨拶等)

○夏季講演会

令和5年8月20日 夏季講演会開催／栃木県青年会館(参加者:25名)
講師:大田原市黒羽芭蕉の館学芸員 新井敦史氏
演題「松尾芭蕉の生涯－誕生から「軽み」の俳諧まで－」

○朝明第12号発行に係る編集会議

令和5年6月26日 第1回編集会議開催／おかりや(編集委員出席者:6名)
①朝明第12号の編集方針(特集テーマ・表紙デザイン)
②原稿提出要綱 ③その他を審議

10月5日 第2回編集会議開催／宇都宮市中央生涯学習センター
(編集委員出席者:7名)
①表紙デザインの選定 ②提出原稿の確認・校正
③その他を審議

11月9日 第3回編集会議開催／おかりや(編集委員出席者:6名)
①初校の校正 ②その他を審議

○朝明第12号の発行及び合評会

令和6年1月1日 朝明第12号を発行(提出作品総数78編・創作14・評論3・随筆8・詩10・短歌9・俳句3・川柳6・特集23・特別寄稿2)発行部数320部、12月下旬に会員へ2部配布、図書館等へ前年度と同様に配布

1月14日 朝明第12号合評会開催／栃木県青年会館(参加者:14名)

○とちぶん会報

令和5年7月1日	とちぶん会報第72号発行・会員に配布
10月10日	とちぶん会報第73号発行・会員に配布
12月15日	とちぶん会報第74号発行・会員に配布
令和6年3月15日	とちぶん会報第75号発行・会員に配布

○懇親旅行

令和5年10月23日～24日 秋の懇親旅行開催／大田原市と那珂川町の史跡等を見学・拝観、南平台ホテル泊(参加者：7名)

○寄付金

42名の会員から、合計84,000円の寄付をいただいた。

○会員からの自著等の受贈

- 「那須の緒」(第19号)／発行所・貝塚津音魚／発行日・令和5年5月16日
- 「那須の緒」(第20号)／発行所・貝塚津音魚／発行日・令和5年9月13日
- 「詩集 白い椅子」こやま きお著／発行所・玲風書房／発行日・令和5年4月19日
- 「ヘルマン・ヘッセの二極性－愛と自由への求道者－」名村 忠著／発行所・文芸社／発行日・平成28年2月15日
- 「ヘルマン・ヘッセの二極性2－愛と自由への求道者－」名村 忠著／発行所・しもつけの心出版／発行日・令和3年2月15日
- 「川柳の神様Ⅲ－秀句の誕生と鑑賞－」三上博史著／発行所・新葉館出版／発行日・令和5年5月27日
- 「逸見猶吉 谷中から満州への軌跡」森 羅一著／発行所・随想舎／発行日・令和5年7月17日
- 「同人誌「r e r a」(第三号)／発行所・生きがい創造舎 事務局／編集・生きがい創造舎／発行日・令和5年6月6日」
- 「母と娘の物語 母五十歳当時の手記を読み、今を語る」小林 史・小林千枝子著／発行所・文芸社／発行日・令和元年12月15日
- 「裁ち板と土 昭和と平成をまるごと生きた一農夫の生涯」小林千枝子著／発行所・文芸社／発行日・令和5年10月15日
- 「詩集 里山-イノシシのうた」貝塚津音魚著／発行所・文化企画アオサギ／発行日・令和5年9月30日

○会員数の動向

令和5年4月1日 69名

令和6年3月31日 64名

／入会者 4名／退会者 9名

栃木県文芸家協会規約

第一条

本会は栃木県文芸家協会と称する。

第二条

本会は下記の事業を行う。

機関誌の発行、講演会、シンポジウムの開催、会員相互の親睦、その他本会の発展に資する事業。

第三条

会員は、栃木県在住者またはそれに準ずる者とする。

第四条

会員は、小説・評論・随筆・児童文学・詩・短歌・俳句・川柳の創作者または愛好者とする。

第五条

入会は、会員二名の推薦を受けて会長に提出し、正副会長の承認を受けるものとする。

第六条

会員は、著作を刊行した場合、会に一部寄贈するものとする。

第七条

退会は、本人の意志によるもののほか、下記の事由によるものとする。

死亡したとき、三年以上会費を滞納したとき、本会の名誉を著しく損なう行為があったとき。

第八条

一、本会に次の役員を置く。

会長一名・副会長三名以内・理事若干名・監事二名・事務局長一名・会計一名・顧問。

二、会長・副会長・理事・監事は会員の中から総会において選出する。

三、事務局長(同次長を含む)・会計は会長が指名し、監事を除く職にある者が兼ねることもできる。

四、必要に応じ、顧問を置くことができる。顧問は総会の会議に出席し、意見を述べるができる。

第九条

一、会長は会を代表し、業務を総理する。

二、副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その業務を代行する。

三、理事は会務の執行を決定する。

四、監事は会計を監査する。

第十条

一、役員の任期は二年とし、再任を妨げない。

二、補欠または増員による役員の任期は、前任者または現任者の残任期間とする。

三、役員はその任期後においても後任者が就任するまではその職務を行う。

第十一条

会議は、総会・役員会とする。会議は会長が招集し、議長は会長がこれにあたる。

会長に事故あるときは、副会長がその任にあたる。

一、総会は、年一回開催し、役員会が必要と認めるときまたは会員の五分の一以上から請求があったときは、臨時に開催することができる。

二、総会は次の事項を審議決定する。

- (1) 事業報告及び収支決算
- (2) 事業計画及び収支予算
- (3) 規約の改正
- (4) 役員の選出

(5) その他必要な事項

(6) 総会の議事は出席者の過半数の同意により決定する。

第十二条

会計年度はその年の四月一日より翌年三月三十一日までとする。

第十三条

会員の年会費は八〇〇〇円とし、年度内に納入する。

第十四条

会の事務を行うために事務局を置く。場所は会長が指定する。

第十五条

機関誌の発行は編集委員会がこれにあたる。

第十六条

編集委員会は、会長の指名する委員によって構成する。

(付則) この会則は、令和二年九月二七日から施行する。

栃木県文芸家協会会員名簿

(令和6年12月1日現在)

〔小説部門〕20人

阿久 純 大平町
安西 悠子 日光市
石寄 敬子 宇都宮市
石塚 蓉子 佐野市
紙屋 里子 群馬県太田市
くぼかわ けんいち 宇都宮市
小林 千枝子 小山市
嶋 均三 那須塩原市
島田 トミ子 宇都宮市
鈴木 あぐり 小山市
鈴木 みずほ 茂木町
相馬 龍久 宇都宮市
高杉 治憲 宇都宮市
寺崎 暁生 鹿沼市
永井 想 宇都宮市
鋏 蟹次郎 大田原市
丕内 七武 塩谷町
福田 三男 宇都宮市
福富 陽子 宇都宮市
吉田 稔 宇都宮市

〔評論部門〕3人

石川 文之進 宇都宮市
柴田 裕巳 宇都宮市
名村 忠 宇都宮市

〔随筆部門〕14人

旭 英幸 宇都宮市
国井 和子 市貝町
国母 仁 宇都宮市
小林 博 鹿沼市
三本木 昇 那須塩原市
柴崎 幸子 宇都宮市
関根 喜久枝 宇都宮市
舘野 ひろ子 宇都宮市
中村 昭夫 宇都宮市
人見 智子 宇都宮市
藤田 香月 大田原市
古谷 耀子 宇都宮市

松林 厚子 宇都宮市
水野 弥彦 矢板市

〔詩部門〕11人

岩本 久美子 鹿沼市
貝塚 津音魚 大田原市
こやま きお 宇都宮市
高田 太郎 宇都宮市
螺良 君枝 芳賀町
戸井 通夫 矢板市
吹木 文音 宇都宮市
松本 ミチ子 宇都宮市
村上 周司 矢板市
森 秀夫 宇都宮市
森 羅一 茂木町

〔短歌部門〕9人

唐澤 るみ子 宇都宮市
神野 規子 宇都宮市
佐藤 孝子 那珂川町
高橋 淑乃 宇都宮市
田村 世津子 壬生町
橋本 茂子 足利市
福澤 悦子 那須烏山市
増田 律子 足利市
山崎 緋紗江 宇都宮市

〔俳句部門〕3人

石井 光 下野市
吉田 良二 宇都宮市
渡邊 公之 宇都宮市

〔川柳〕5人

あおい 七海 鹿沼市
松本 とまと 鹿沼市
三上 博史 壬生町
水上 義明 宇都宮市
柳岡 睦子 茂木町

〔合計65人〕

役員名簿

(令和6年12月1日現在)

会 長	福 田 三 男 (小説)	
副 会 長	高 杉 治 憲 (小説)	松 林 厚 子 (随筆)
	三 上 博 史 (川柳)	
理 事	国 母 仁 (随筆)	藤 田 香 月 (随筆)
	こやま き お (詩)	福 澤 悦 子 (短歌)
事務局長	吉 田 稔 (小説)	
会 計	永 井 想 (小説)	
監 事	相 馬 龍 久 (小説)	古 谷 耀 子 (随筆)
顧 問	高 田 太 郎 (詩)	

『朝明』編集委員

(令和6年12月1日現在)

編集顧問	三 上 博 史 (川柳)	
委 員 長	こやま き お (詩)	
委 員	国 母 仁 (随筆)	藤 田 香 月 (随筆)
	福 澤 悦 子 (短歌)	

上記5名に、高田顧問、福田会長、高杉副会長及び松林副会長が加わり、計9名の構成。

編集後記

■朝明十三号をお届けします。会員数六十四名(令和六年三月現在)のうち五十八名の方が寄稿しております。とくに創作(小説)部門と特集部門の執筆者が昨年度よりも増え、読み応えのある作品が目立ちます。また、十三号では読み手の意欲が持続できるように、目次の構成を次のように変えてみました。創作部門の次に詩の部門を置き、評論、随筆は特集部門の前に置きました。このようなことも合評会の折にご意見をいただけたらと思います。

編集委員長という大役を三上博史さんからバトンを受け、今年度からこやまきおが担当することになりました。精一杯取り組んでいきますのでよろしくお願い致します。(こやま) ■校正をしている間に喜寿を迎えた。特に感慨もなかったのだが、孫達が祝いに来てくれて一緒に食事をしていたら、急に年齢を感じた。

昨年の暮れ、友人に誘われて三年ぶりにゴルフに行った。少しばかりわくわくしながら出かけたのだが、上がり三ホールばかりは足が前に出なくなってしまった。ヘロヘロになって、途中棄権しようかとも思ったが、仲間に励まされて何とかホールアウトすることができた。体力の衰えは明白だった。その日は若い友人が車で自宅まで迎えに来て、帰日も玄関口まで送ってくれた。練習場にも彼が誘ってくれた。日常の用事は女房が運転している。

孫達に囲まれていると最近、周囲の人に甘えすぎているよ

うな気がしてきた。とりあえず、一八ホール歩き通せる足腰をつくらう。(福田)

■会員の高齢化が進む中で、若い会員を迎え十編の詩が届いた。詩の内容は多様ではあるが、世相から見えてくる、感じてくるような視点の詩もほしい。作者の微妙な心理は詩の形式にも反映され、比喩、句読点、行替えは必要なスキルになる。状況を読み、将来を推察する感性は詩を書く者にとって欠かせないが、わかり易い言葉で表現することも大切だ。推敲を重ね、合評し合う場があれば独りよがりにならず、人生の詰まった良い詩が書けるに違いない。

表記のことで、特別な場合以外では現代仮名遣いで、送り仮名では許容範囲であれば原稿通りに掲載した。(こやま)

■短歌部門、出詠者六名、前回より三名減、締切日が気力体力を奪う猛暑の時期だったのが一因かもしれません。それにもめげず、作品を寄せて来られた方々の熱意に敬意を表します。

二十首詠一名、十首詠二名、十首詠二編三名でしたが、六人六様、若き日の恋を、父母やふるさとを、平安の代を、さくらを、いのちの尊さ、不可思議さを、創造力、想像力を自在に駆使して描出しています。

また、ガザ地区の瓦礫と化した街にこころを痛み、戦争の悲惨さを訴え、その終結を願う歌、海外旅行に出かける娘を危ぶむ母親の気持ちを詠出した歌もあり、テーマは多岐にわたりますが、どの作者にも通底するものは、自らの老いを実感し、過ぎ去った若さを懐かしみ、間近に迫る命の終焉を静かに迎え入れようとする深い思いではないかと思えます。超

後期高齢者(?)の私も、共感の涙を誘われる思いで寄せられた作品を熟読しました。

第一回編集会議の後、烏山線で家に帰る時、終点烏山に電車が到着したのに、本を読みふけていて下車せず、迎えに来た夫に携帯電話でよびだされ、慌てて下車するという椿事がありました。いささか、いや、かなり深刻な惚けもあったのでしょうか、なんと、読みふけていた本というのが「朝明」12号の特集「再スタート」だったのです。「朝明」は、自作を発表する場であると同時に、ジャンルを超えて読んで楽しむものなのだと痛感したのでした。

(福澤)

■今号の俳句作品は2編、川柳は5編だった。それぞれ前号より1編ずつ減ってしまった。会員数全体が減少傾向にあるので致し方ないことなのかもしれないが、それでも些か淋しい思いを抱いてしまう。昨年は川柳担当の理事として、私が関わっているいくつかの川柳団体(吟社)の会員に朝明のバックナンバーを贈呈して、とちぶん会員になることを勧誘してみたが、残念ながら誰一人として入会してくれなかった。手詰まりの状況になってしまった。これからどうしたらいいのか、今のところ展望らしきものはない。

(三上)

■市内のデパートで影絵作家の藤城清治の展覧会が開かれた。会期中に会場でサイン会が開かれ、私も参加した。開始予定時間を十五分ほど過ぎた頃、スキーのストックのような杖を二本つきながら、先生が現れた。静かな歓声の中、席につくとペンを持ってサインを始めた。

先生は百才を超えた。その年になってもイラストも文字も描ける。卓越した能力に言葉が出なかった。百才まで自分の

やりたいことが出来たら、どんなに素晴らしいことだろう。

(松林)

■年々、三十度越えが多くなり、異常気象と言われているが異常ではなくこれから通常になってくるのではと危惧する。温暖化の影響のような気がする。漸く一人一人が温暖化と言う異端児に目を向ける時がきたのではと思う。

そんな中で、五年ぶりに作付けしたさつま芋は順調に育っている。作付けと言っても土を盛ってさつま芋の苗を斜めに刺しただけで、肥料は一切与えない。与えようと育たないと言う不思議な作物なのだ。掘ってみると大人のこぶし大の真っ赤なさつま芋が、数珠つなぎに出てきた。さつま芋はこんなに赤かったのかと再認識する。さつま芋の赤い生命力に奮起された。

(国母)

■小生、「朝明七号」以来、特集の校正を担当して七回目を迎えたことになる。現在、会員数が六十五名前後に止まっている中で今号の特集に二十六の作品が投稿されたことは真に喜ばしいことである。しかも、その内容において目を見張る作品が多く、校正していて引き込まれるように読み返すことがあった。入会した当初、創作の大先輩の方々から、「所詮、十枚では小説を書くことは難しい」という論説を承ったことがあるが、多くの文豪が短編小説で名作を生んだことに加え、今号の多様性あふれる特集作品に著された文体の纏めや表現力、創作力は、全ての分野の方々に活かされるということを学ばされた思いがしている。

(高杉)

朝明 第13号（通刊58号）

2025年1月1日発行

定価1,500円

発行所 栃木県文芸家協会

発行人 福 田 三 男

事務局長 吉 田 稔

編集長 こやま き お

事務局 〒329-1116 栃木県宇都宮市立伏町462-56

吉田 方

TEL 070-8477-6211

印刷 鈴木印刷株式会社

朝明 第13号 2025年発行 栃木県文芸家協会

ホームページは「とちぶん」で検索

定価1,500円